

## Gallery Aki Blog

ギャラリー安田のブログへようこそ！

## 月食・日食・彗星・流星

投稿日: 2012年1月9日 作成者: admin

先月2011年12月の皆既月食を見た。月は、自宅新宿区の神楽坂から見てちょうど天頂にあり、観察すると首が痛くなる。12時過ぎからと思って、たつぷり着込んで外に出たが11時過ぎごろから始まっていたらしく、多少左の下から少し明るくなってきているところだった。月食といっても暗い部分はほのかにかつ不気味に明るく、月食は必ずしも美しいとは言えない印象。むしろ、月の光は弱いので、月のすぐ下にオリオン座の4つ星がひときははっきりと見えたのが印象的であった。更に、ほぼ月の左上に強く輝いている星がみえる。これが星の一生の最後を飾る大爆発が予想されているベテルギウスかとあらためて見なおした。北陸にいた子供時代に冷たい冬の夜、よく見た星である、と思いだした。やがて月が戻り始め、左端から糸のように光り始めたが、この時の月の光は強烈で実に美しく見える。月食の美しさはこの時である。

天体といえば以前オーストラリアのシドニーに勤務していたころ—1974年の5月ころ—偶然にも「皆既」日食を経験した。これは珍しいことだから、小学校と幼稚園の子供たちにもよく説明し、できれば観察でもなどと考えていたが、驚いたことに学校からは絶対に太陽を見るなどという強いお達しである。むしろ一週間ほど前からテレビなども通じ絶対に太陽を見ないことというキャンペーンが繰り返される。太陽をみて一瞬凝視すると網膜に穴があき一生苦しむこととなるという。こういう経験で苦しんだ(苦しんでいる)人が多いそう。いかにも常に明るいというか、むしろ強烈な太陽の光を浴びているオーストラリアの気候・生活を反映しているようだ。日食の当日は借りていた家の家主であるウエストさんがたまたま来ていたが、これまた子供たちに突に厳しく、子供たちが外に出て頭を上げようとすると手で頭を押さえこんでしまう。皆既日食でしかもシドニーというような大都市通過というのに町は実に静かで殆んどだれも格別な動きを示さない。しかし、おかげで不思議なゴルフを経験した。つまり、こちらはすることもないので(その日は週末だった。しかも快晴)ひとりでゴルフに出た。さすがにゴルフ場は人もなく静かでひとりで回っていたが、8番ホールに来た時、天空がうす暗くなり突然異様な雰囲気包まれる。と見ているとどこにいたのか、ゴルフ場の立ち木にたくさんの鳥が一斉に集まりねぐらを探しはじめた。忘れられない不思議な光景であった。

その後1982年、マニラに勤務していたころ、ハレーすい星に巡り合った。この年の夏ごろハレーすい星がマニラから見られることは当然予想・計算され報道されていたが、これらによると目視できるようになってからほぼ1カ月続くとのこと。こちらは毎晩見られるとは思いながら、やはりマニラの夜は出にくいという事情もあり、そのうちにとおもってやり過ごしていた。しかし、そろそろ1カ月ほどたち、いよいよ視界から去っていくと報じられると、おいしい気になりあわてて女房も含め2—3組の夫婦と夜の町(ビレッジといわれる住宅街)に車を運転して出かけた。ハレーすい星は 意外に高度が低く、人家の屋根もありなかなか見当たらない。多少詳しい人の案内でついに見つけた。ハレーすい星といえば、例の長い尻尾を予想していたが、実際は尻尾はほとんど見えず、ガスの塊のようなまろい輝きが見えるだけであった。しかし、ハレーは75周年回帰とかだそうなので、これでもはや一生見ることはないという感慨を語り合いながらその場を後にした。

ハワイのワイキキ海岸に面するアパートのベランダから、かに座大流星群をじっくりと見た。1992年ころ。今年のかに座流星群は特に見事だという報道があり、ちょうど、その夜は家族とハワイに休暇を取っていたのでベランダに椅子を持ち出して待ち構えた。子供たちも大学生となっていたので、結局8時ごろから1時過ぎまで眺めた。これは確かに驚きの天体ショーである。最初は散発的で、願い事でも賭けるか などというような感じであったが、そのあとはものすごい数の流星が行きかう。なかにはじつに長く時間をかけて走るのもあり一瞬というよりじっくり眺めることができる。また、ときにその大きさに驚く。高度は意外に低く見えるのでたまたま見える飛行機のライトと交差し一瞬ぶつかるのではないかと思わず声を上げてしまう。わすれられない経験だ。

天体ショーはなかなか一生のうちに見る機会は少ないと言われるが、こんな具合に世界各地で不思議に珍しい経験をした。思い出の一つである。

カテゴリ: 未分類 パーマリンク

Gallery Aki Blog  
Proudly powered by WordPress.

## Gallery Aki Blog

ギャラリー安樹のブログへようこそ！

## 暴力を見たくない

投稿日: 2012年1月7日 作成者: admin

最近、地下鉄駅を歩いていると気になる広告がある。暴力は見たくない、とかで目をおおう若い男性の広告である。いわゆる公共広告の一つであろう。なにしろ暴力は見たくないのであるから写真の男性は目を覆っている。この広告を見るたびに、しかし、とって仕方がない。暴力、それは人間性の或いは社会の問題の一つ——であるならばなぜ直視しないのか。勿論、それに巻き込まれる、とか、割って入れと言うほどの勇氣はこちらにもないが、いい男が目をおおうとは。以前どこかで聞いた気がするが、例えば交通事故などで最悪の又最後の瞬間の反応として女性は目を覆ってしまう。この点男性はやはり直視して立ち向かう傾向がある——つまり問題に直面した時の反応に性差があるともいわれるが、この写真一、どう見ても若い、いまは盛りの男性のようである。(このモデルになった男性は自らのこの姿を見てどのように思うかと想像するが——)

社会の問題はやはり直視しなければならないのではないのか。まずは直視し、考えるという姿勢がほしい——とってしまう。このところ中東の政変が続き、いろいろな場面(いわゆる弾圧の場面)の報道がある。この広告は、いわゆる公共広告なのだから、仮にそのようなことに直面した場面には目を覆うことを認めているのであろう、という印象がどうしても抜けない。子供にもなると言うのだろうか。たとえば、いじわるの子が犬をひどく虐待しているのを見たとする。親としてまずは目を覆うように勧めるのか——と疑問がわいてくる。要するにこの広告が伝えようとしているメッセージのあまりの軽さ。

このような広告はいわゆる宣伝ポスターではなく公共ポスターだから、まずは誰かが公共的な部門において、一生懸命考え、起案し、何度かの検討後、担当者から上司を経て最終決裁者の承認を得るというように進んできたのだろう。それだけにここに表れている姿勢は一般に広く認められ(るはずであるということが前提になる)、いわば、現代の世の姿勢が表現されているともいえる。十分検討された後であり、その検討の過程でこのプレゼンテーションに別に違和感を感じる人はいなかったというわけだ。

暴力は見たくないのだ、直視したくないので、考えたくないのだ、そこに社会的な或いは人間性の矛盾の契機を見たくないのだ。実際には深く暴力に彩られた人間の歴史を考えたくないのだ——地下鉄の駅を歩きながらそんなことを考えてしまう。

カテゴリ: 未分類 [パーマリンク](#)

Gallery Aki Blog

Proudly powered by WordPress.

Gallery Aki Blog

ギャラリー安樹のブログへようこそ!

---

## オリンパスの怪

投稿日: 2012年1月10日 作成者: admin

オリンパスの粉飾経理はいろいろな意見をよんでいる。最近会った昔のビジネス仲間と話すと、やはりこの事件は日本の会社のガバナンスを、総体として、あるいは原則論として疑わせるという結果となったと残念がる声が多い。

ところで、ちょっと不思議に感ずるのはオリンパス元社長菊川氏が、どうしてまたいわゆる外人を後継に選んだのかという点である。そこで、いろいろ想像するわけであるが、一何よりも、(今となって明らかとなったわけであるが)過去の疑わしき経理処理も何とか整理をつけた、そこで、過去の人的なしがらみがない(あるいは薄い)外人を入れる、この際心機一転のけじめにもなる、という感じであったのだろう。しかし、これが意外に誤算だった、まさか社長に選んでもらった人が逆にほじくりだすとは。このところを想像すると、何となく人縁としがらみでつながっている日本人の間での社長選びの不透明さが見えてくる。つまり、この元社長の誤算は、社長に選んであげた、つまり、本来なら恩義を感じるべき所を、逆にかまれたというところにある。仮に日本人同士の発想なら、これまでの縁もあり、何より社長に選んでもらったと成るはずだから逆襲は考えられない—という伝統的な(潜在)意識が元社長のなかで働いていたのではないかと想像する。勿論、相手は外人で、そもそも発想が違うというところまでは思い及ばなかったということであろう。

翻って、後継者、社長選びがもっと透明ならこんな事件とはならなかったように思うが、いつだったか日経の「私の履歴書」で、ある会社の会長が、昔、社長に指名される件で、「廊下ですれ違った時」、つぎの社長を頼む、といわれて驚く場面があったが、このような場面は、日本の後継者選びにおける第三者的、透明性の欠ける一面をうかがわせる。後任者選びにおいて十分に機能するような「選考委員会」とか第三者的な要素が働いていたら「子飼いのように」社長を選ぶことも難しいであろうし、そうなると、そもそも粉飾を代々引き継いでいくという発想自体が出てこないだろう。要するに、本件、せっかく選んであげたのに、恩義を感じるかと思っていたら逆に「噛まれた」という構図のように見えてくる。そして、その背後は、子飼いと思われる人を後任に据えていくというしきたりである。この点、前社長の誤算ということとどまらず日本の企業の社長、後継者選びのそもそもの不透明さを暗示しているともいえよう。

ところで、その後、当の前任外人社長が今度は株主の委任状争奪戦で復帰を図る、という記事が出ていた。しかし、これはまずうまくいかないだろうと見ていたら、やはりそのような動きのようだ。というのも、上記のように、この事件、日本的にはどうしても「飼い犬に噛まれた」という構図に見える。こうなるとこれは日本人株主からは、あまり心理的、感情的に同感を得られまい。ここにまた日本の株主の独特の心理状態、「感じ」があるように思う。なんとなく恩義を感じないような人(不可思議な外人)を応援したくないということではないか。——本件の怪はこういうところにある。

---

カテゴリー: 未分類 [パーマリンク](#)

Gallery Aki Blog

Proudly powered by WordPress.

## Gallery Aki Blog

ギャラリー安住のブログへようこそ！

## 子供の英語の本

投稿日: 2012年1月11日 作成者: admin

親戚の子供(小学校3年生)が、英語を勉強したいというので、ちょっと見ている。一通り、簡単な英文法みたいなことを済ませたので、なにか適当な英語の物語はないかと探してみた。アマゾン、COで検索するといろいろな本が出てくる。基本的には3種類あるようだ。一つには日本の出版社によるもの(日本語は勿論日本人によるものだろうが、英語のほうは誰なのかわからない)、と、完全な英文だけ、つまり洋書としての教材である。更に、その中間に、たとえば台湾の業者による本などである。この台湾版は、日本語もきちんとしていて日本語らしいが、同時に英語のほうも何となくバターくさくやはり日本の本ではない雰囲気はすぐわかる。日本の出版社によるものも、当然英語のほうはネイティブが書くか監修しているはずなので、立派な英語ではあるが、やはり、全体として日本人向きの感じがある。これは基になる物語自体が、日本人の感性にあうようになっていることからきているのではないかという気がする。これらに対して完全な英語版、要するにアマゾンの分類で「洋書」に入る本については、ネイティブによる英語というのもおろか、要するに外国人による外国人の子供たちのための読本である。つまり、アメリカやイギリスの子供たちが、普通に子ども時代に親しみ読んでいる本(絵入りが普通)であろう。

ということで、選択に迷ったが、本格的な英語の「雰囲気」ということで、いわゆる「洋書」をいくつか買ってみた(勿論、日本語の翻訳ページはない)。

ということで、その物語見ると実に驚く――物語1 王様は自分の妻が他の男と一緒にいるのを見て、怒り、cut off the man's head. それから、cut his wife's head off, too. これはどうやって教えようか。と考えながら次々と物語を見ていくと 物語2一の結末は、so, you will kill him. -

物語3――and they killed him with their knives. They cut K―― into four pieces――さらには なにか毒薬を与える場面 put something in the magicians' drink -and he slept. Then -cut off his head.

という調子。これをどうやって教えるか 彼の首をはねて、死体を四つに切り刻んだ、と訳して教える?? ちなみにこの本は、格別特別な本ではないらしく 立派な Penguin Readers であり、作者名も明示されているし、さらに、本の裏にはこの本の英語のレベルが表示され、レベル2 Elementary 使用 英語数は 600 と出ているから立派な系統立った教材と思われる。(なおこの本にはレベル6まであり、そこでは使用語数 3000となっている)。

英語圏つまりイギリスやアメリカの子供たちは(幼年期に)こういう物語、文化的な背景で育つのか? その教育的効果・影響は? ――と考えてしまうが、そのように考えるのは考えすぎかもしれない。翻って日本の童話を思い出してみると、舌切雀一雀の舌を日本式の和ハサミで切り取る? 想像するにひどい話である。鬼が島の鬼退治―退治とは殺す? cut off his head? カチカチ山ではタヌキの背中のみが燃えだす―――と考えると、実際残酷な話があるつまり、よく考えると、これらの残酷な物語は、どこの国でも子供の教育に必要なものなのか。

どうも気になって、別の日本の出版社発行の英語版桃太郎を見てみる。これこそ鬼を「退治」に出かけたはずである。しかし、最後のところは「――とうとう、鬼どもをすっかりたいじしてしまったそうな。」とあり 訳は Finally, they managed to wipe out the Oni. となっているのを見てやれやれ。しかし、wipe out とはいかにも曖昧な表現だ―これでよいのか―という気がする。

教育というのは残酷さを教えるということでもあるのか―そもそも cut off head は、大人が想像する(想像できる)から残酷なのか。首を切る場面と言えば、旧約聖書外伝の「ホロフェルネスの首を切るユディット」という有名な絵を思い浮かべてしまうが(これは「怖い絵」中野京子p.114にもでてくるが、これ以外にもいろいろなバージョンがある)、そもそも、わるいやつは殺すと教えるべきものなのか。この場合、どこが悪いかはあまり詮索せず単純に教えるべきか? ? ということで、色々考えた末、とにかく、この「洋書」の本を使うのはやめたという次第。しかし、依然として、一方でこの残酷さは教えてお

くべきか—残酷ではないのだ、単純に悪を懲らしめたと教えるべきか—と迷いが抜けない。

カテゴリ: [産分類](#) [パーマリンク](#)

Gallery Aki Blog

*Proudly powered by WordPress.*

## Gallery Aki Blog

ギャラリー・安田のブログへようこそ！

## 社外取締役

投稿日: 2012年1月13日 作成者: admin

オリンパス事件もあり独立した社外取締役の必要性が叫ばれている。社外取締役と言えちよつとした思い出がある。2000年初めごろ、アメリカ勤務から帰国後ビジネススクールに關与していたが、日本の会社のガバナンスの問題に關し、アメリカ時代の見聞を思い出し、日本でも社外取締役を導入すべきではないかと思案した。某証券会社から同じビジネススクールにきている同僚に話すと、まだ日本では社外取締役という概念はあまり議論もされていないとか。それでは一度経団連にでも話をもちかけてみてはどうか、すこし日本での議論を喚起するかもしれないということで、2人でしかるべくアポをとり出かけた。その時の経団連の担当の反応は実に意外であり、今でも思い出す。つまり、日本における社外取締役などの必要性は全く認めない、と言う。こちらから、しかし、OECDでは企業のガバナンスガイドラインを発表しており、その中でも社外取締役が提言されており、これは国際スタンダードになりつつあるのではと持ちかけると、国際機関はいつも、なにか新しい仕事で口出しすることを探しているだけにすぎない、つまり、国際官僚による余計な口出しにすぎない—との意外な反応。別に、経団連を批判するわけではないが、当時はその程度の認識だったことが思い出される。その後改定1万条といわれるように商法の大幅な改定があり、今や社外取締役は、常識となりその強化が叫ばれている。

という次第もあり、ビジネススクール時代も含めていくつかの社外取締役を経験した。結果は？結論から言うと、これは実に危ない仕事である。社外取締役と言っても現実には全く情報が来ない。要するに経営陣(つまり他の取締役)が何をしているか全く分からないのである。これではならじといろいろ動き回り嗅ぎまわっても所詮限界がある。いわんや非常勤ともなると率直に言って会社自体の動きには全く付いていけず取り残されるばかり。どうなっているのかと思いつつ、商法に規定されている取締役の賠償責任＝連帯責任が気になってくる。オリンパスの例にもあるように仮にも賠償責任ともなると、こちらは非常勤・独立だから責任は100万円、社長は1億としてもう一というわけにはいかない。連帯して、つまりこちらにも全額1億100万円の賠償責任がやってくる。この点商法も改定され、いくつかの軽減策が盛り込まれるようになってはいる。そのひとつに、契約で賠償額の上限を限定しうる(ただし取締役会の承認が必要)ことを定款に規定しておく方法があり、社外取締役なるときは必ずこの契約を結ぶこととした。しかし、やはり取締役として相当のリスクをとるという覚悟が必要である。仮に、非常勤監査役ということになる場合ももっと難しい。これこそ本当に社内の動きを探し回るといような姿勢が必要だがこれはなかなか難しい。これはおかしいと危険を感じて、早急に辞任したほうがよいと考えたとしても商法では監査役の直ちの辞任は許してない。次の監査役が決まるまでは辞任も出来ずその間の責任がやってくる。

勿論、会社との関係でこのように敵対的な(嗅ぎまわる)感じではなくて「お仲間的」な取締役もありうる。友人の紹介などでそういうお仲間的取締役も経験したが、今度はなかなかものを言いくいということになる。何しろ社長はお友達と言う感じであるからなおさらである。これは実は本当は危ない関係である。とは思うがやはりお仲間になってしまう。いわんや多少なりとも報酬をもらっているということになればどうしても議論が鈍くなる。子会社などの取締役に入る場合は、やはり親会社の意向が気になると言う意味で、これに似たようなことになろう。

さらにもっと気になるのは株主訴訟の途である。商法が改正されて比較的簡単に、手数料も安く(1万円くらい)誰でも(6カ月以上株を持てば)会社経営陣を相手に訴訟を起こすことができる。株主ともなるとその数は多いし、いったいどうい人がいるのか皆目分からない。弁護士の意見等を聞いてみると、一般的には経営判断の誤りというたぐいは訴訟にならない、なにか取締役に違法行為(反社会的勢力との接触や詐欺横領の類)があった場合のことが多いとのこと。しかし、仮にも訴訟になれば個人で戦わなければならないことは十分認識しておく必要がある。このような場合は経営陣は普通変わっているはずで、新経営陣からの(つまり頼みとする会社からの)支援はまずない。勝っても負けても弁護士を雇って個人での戦いである。

要するにサラリーマン独立取締役は成り立ちにくいということである。いま独立取締役となるための研修会等が行われているようで、一定の経験と勉強・研修をすれば独立取締役になりうるし、またなることを推奨されているようであるが、実際は相当大きな(いわば定年後・老後の生活では賄いきれない可能性のある)リスクを伴うことを十分承知すべきである。そういう覚悟が必要だ。

ついでながら似たようなポストで「顧問」というのがある。これは不思議なポストである。勿論、商法上に格別の規定もなく、大体において仕事の内容が明確でない上に、経営者の一画としての責任もなく、この意味では気楽なポストである。多数の顧問団を擁している企業もあるようだが、その費用対効果はどうかよくわからないところがある。

翻ってアメリカ・イギリスの独立取締役の典型的なイメージは少し異なるようだ。そもそも、彼らは基本的に相当な金持ちである。あちこちに投資しておりその経験を踏まえて厳しく経営を見ていく。勿論 取締役会では、社長は末席の被告席ともいべき場所に座り、(アメリカでは社長が取締役の議長をするようであるから少し異なるようであるが)厳しく追及される。独立取締役が機能するにはまずはこのような基本的な「背景」が必要だ。これから、いわゆる定年後、研修を経てサラリーマン独立取締役になる道は楽ではない。

余談。大学時代の同期会などで上場企業の上級役員などを経験した人と話す機会がある。コーポレートガバナンスの話題も当然出るが、ある時、そのような議論の中で、某大手企業取締役経験者から、企業は税金で(つまり人の金)で賄われるお役所とは異なり、その稼ぎは「我々が汗水ながして稼ぎだした結果であり、この金は自分達のものである」というような発言があったが、これにはちょっと??となった。それは株主の金ではないのか? 汗水を流し、苦勞し、粉骨細心、困難な経営を乗り越えて稼ぎだした金が自分たちのものではないのだ、というところがコーポレートガバナンスの難しいところである。

カテゴリ [未分類](#) [パーマリンク](#)

Gallery Aki Blog  
Proudly powered by [WordPress](#).

Gallery Aki Blog  
キャラクター安田のブログへようこそ！

---

## 独立の人

投稿日: 2012年1月17日 作成者: admin

原子力安全基盤機構 で、いわゆる検査マニュアルとして納入メーカーの写しそのまま使われている、というようなニュースが伝えられている。聞いていると、そもそも原子力安全基盤機構の職員はメーカーなどからの出向者が多いとか。たしか保安院も担当役所からの出向職員の多いことが問題になった記憶がある。こういう記事を見ていると、日本ではなかなか「独立の人」は育ちにくいものなのだと感じる。

そういえば西日本JRの脱線事故の調査報告にあたって、報告書の案が事前に西日本側の当事者にあらかじめ渡されていたという信じられないようなことがあったようだ。ちょっとした料理屋で、いわゆる先輩に会い「事前に見せてほしい」「そうですか」というような感じであったという報道もある。調査委員からみれば、そこはやはり先輩からの話である、断りにくいというような事情が察せられる。なにかまるで作戦計画でも実施されたかと思ってしまうような、つまり交通事故としては想像できないような死傷者の数、この事件の重大さを考えると実に驚くべき事である。

ということを考えていると、以前、国際機関で管理職の一員として働いていた時のあの「不思議な人たち」のことを思い出す。彼らはイギリスからやってくる(どういうわけかイギリスからが多い)。国際機関ではなにか特別なまとまった報告や日ごろの業務からはなれた独立の検討が必要になった場合で、手持ち職員のノウハウが必ずしも十分でない判断されるときには外部から専門家を呼びよせて契約する。

ちょっと余談になるが、国際機関が、このように外部の専門家と契約する際には、当該現場の部局とは全く切り離された「中央調達局」が審査を行い、その名前のもとに契約する。現場の課長などが、つい自分の友人を呼んだりあるいは法外な報酬を払うというようにいわゆる癒着関係を切断するためである。「中央調達局」の審査はきびしく、当然ながら現場部局からはにくまれもの嫌われ役である。実は筆者は、別の国際機関に勤務していたころ、逆に、この調達局の管理に当たっていた経験があり、容易に現場の要求を鵜呑みにしないという側を経験したことがあり、この辺の事情はよくわかる。要するに一般に起こりやすい癒着を切り離しチェックアンドバランスを利かせるという発想である。

というわけで、こういう人たちは、ある日突然やってくる(勿論契約された場合であるが)。つまり形式的上司になる筆者にまず挨拶に来るわけである。このとき始めて知り合う。そして、格別のこともなくただちに仕事である。時々仕事の簡単な報告と指示を仰ぐべきところについては顔を見せるが、こちらあまり介入しない。契約期限終了まじかに総括的な報告があり、そして去っていく。レポートを残して、簡単な離任のあいさつを済ませ、歴戦の経験がしみこんだような大きな鞆を下げ、手にはレインコートを持って、去っていく後姿を見ると不思議な気持ちになる。もう二度と会うことはないだろう。

残されたレポートをみると確かに一級品である。知的な意味において彼らはたしかに主流の中におり傍流ではない。ふらりという感じであられ仕事を終え、契約が終われば鞆を下げ、廊下を去る後姿は、なんとなく哀れでもある。親元もなく、先輩後輩のつながりもなく、しかし同時にその姿は何となく強い、とも感じる。

愛社精神、組織への貢献、与えられた役割(この与えられた、というところが重要である、つまり自分で勝ち取ったわけではない)に全力を挙げ忠実にこなす。これは日本の強さである。誇るべき。しかし、冒頭に書いたような事例をみると、やはり独立の人がほしい。日本は組織的に強いが、そこには同時に意外な弱点があることも忘れてはならない。しかも、このような日本の弱点、不得意な部分(つまりhow to doではなくてwhat to do)、これから逆に重要性を増していくように思われる局面では。

実は、これらの不思議な人たちは要するに国際コンサルタントであり、別に不思議でもなんでもない。しかし、最近の冒頭に書いたような日本の記事を読んでいると、あの不思議な人たちの後ろ姿を思い出す。

カテゴリ: 未分類 | パーマリンク

---

Gallery Aki Blog  
Proudly powered by WordPress.



## Gallery Aki Blog

キャラクター変換のブログへようこそ！

## 海外留学

投稿日: 2012年2月8日 作成者: admin

最近日本人の海外留学者の数が顕著に減少しつつあることが指摘されている。いわゆる日本の若い人たちの内向きの精神を表わすものであり望ましくない傾向を示すものと言われている。先日も日経の「経済教室」で、この海外留學生の減少傾向がグラフで紹介され、論者もこれを一つの論点として議論を進めていた。これらを見ると確かに統計的に日本人の留學生は減少しつつあるらしい。ハーバードでも日本人の留學生がついに2人になったとかでハーバードからしかるべき「留学勧誘ミッション」が日本に来たなどという報道も見られた。これらの報道にも見られるとおり、たぶん留學生の数は、減少をしめしていることは間違いないようだ。

しかし、ここでちょっと異を唱えたい。手持ちに詳しい統計資料がないのでわからないところがあるが、仮に、上記の留學生統計を――

1. まず、学部学生とビジネススクールを含む大学院学生に分ける。
2. 次に、男性と女性に分けてみる
3. さらに、企業派遣(つまり特定の企業に在籍しつつ、その企業の負担でおこなわれている)留學生

という風に分けてみるのが可能ならばどのようになるであろうか。またこれらを組み合わせて考えてみるのも面白い。

まず、留學生が減っているとしても減っているのは学部学生か、大学院学生か。たぶん大学院学生に違いない。そもそも学部留學生(つまり日本の高卒からたとえばアメリカの大学に留学する)は居るのかどうか、居るとしても非常に少ないと思われる。ちょっと身近に身内、知人、友人その周辺に目を広げてみても高校卒で「勇躍」たとえばアメリカの大学学部留學生している例は思い当たらない。ということは統計などで現れる留學生は、アメリカを中心とする大学院生がほとんどで、問題は要するに、以下に述べるような要因を前提とすると、企業派遣留學生の減少ということではないか。とすれば、これは現下の経済情勢を考えるとたしかにありうるわけで、別に日本の若者の内向き志向などというような議論になるべきものではない。

次に、男女ということになると、たぶん圧倒的に男子であろう。つまり、上記のような統計の示すところは、最近の経済情勢を反映して要するに「企業派遣による男子の海外大学院への留學生」という分野が減少したということであり、考えてみるとごく当たり前のことである。

もともと日本では高校卒業後、何らかの志に基づいて海外の学部生として留学する人は少ない、というよりほとんどいない。また、大学院を含めて自費あるいはスカラーシップで独立して留学する人はそもそも少ないのだ。特にこのような「リスク――これについてはあとで述べる――」をとる男子学生はまずいないだろう。

ここに立ち上がるのは、企業の採用における新卒一括採用という熾然たる壁である。これは、なにか古き神話のようにその本当の意味はあまり問われないうまま、いつの日か確立され、そしてこれを変えることはタブーに近い。要するに日本ではいったん新卒の採用時期を逃すと、これは日本のシステムからの脱落を意味し、再び日本のシステムに復帰することは不可能に近いという現実である。

実は、筆者も大学の教育に関与していた時期があるので、今でも時々ちょっとしたパーティなどでいわゆる学部学生と接触する機会がある。このときの筆者の対応は我ながら奇妙なものである。パーティのこちらのほうで「一度思い切って海外の大学に留学してみたい」という学生には、大いにこれを奨励する。いまはグローバルな時代だ、外に出てみる―チャレンジ、がんばれという具合。ところが、パーティのこちらのほうで、今、就活の真っ最中という学生には一なんとそれが大学の三年生というのは内心驚きであるが一しっかりやれ、いまが一番大切、日本ではいったんシステムから外れると二度と戻れない外れ者になる、とにかくどこでもいい日本のシステムの中に入ってしまえ。留学？それはまた就職してから考えても遅くはない――という次第。自分ながら奇妙ではある、がこれがかつての先生としての真剣なアドバイスである。

筆者はかつて海外国際機関の管理職を経験したことがあるが、このような立場にいと、海外で博士号などを取得した人の国際機関への就職について相談を受けることがしばしばある。しかし、経験ではこのような人はほぼ100%女性である。男子はどこに行っているのか。聞いた感じでは男性で博士号などを狙って海外の大学で勉強する人はまずいないとのこと。(繰り返すが企業に席を置いて派遣されてくる人は別。ここではないというのは独立の人である。)しかし、また逆にみると、このように優秀な女性たちが(実際、海外で独立して博士号をとるとこまで行くのは金銭的にも能力としても並大抵ではない)なぜ、日本に帰らないのか—これも聞いてみると要するに日本には就職先は全くとっていいほどないそうである(わずかに日本の大学つまりアカデミズムにもぐりこむ方法はないわけではないが、これもこれも独立の人となるとむつかしいようだ)。

新卒一括採用は、まさに神話のごとく確固として変わらずかつ非合理的(たまたま氷河期にぶつかつたら一生チャンスなし)である。日経新聞だけでも、すでに、このような現在のシステムに対する批判記事はたびたび出ており、最近では論説にも取り上げられ、時にわが意を得たりという感じをもつが、結局は、就活を3年生のうちでなんと!3ヵ月ずらすという対応!もっとも最近では一年間は新卒と「みなす」という対応!というわけで新卒一括採用は容易には崩れない。しかし、そもそも大学の「3年生時代」に就職先など考えてどうするのか。筆者の経験でも大学の3年と言えば一番勉強した時代であり、第一、そのころは、自分の能力も自分とって未知である。

就職はその人の能力と経験(できれば実績)とやる気で決まるというようなわけにはいかないものか。面接の際、新卒ですか、というようなことが問題になる国はほかにあるのだろうか。どうも中国にもないようである。先般の日経の「私の履歴書」で、ある日本の有名企業(コンピューター会計)の会長の回顧録で、その経験からみて「私の眼の黒いうちは採用は絶対に新卒に限る。新卒以外は許さない。」と明記しているのが印象的であった。その経験によれば会社が次第に発展し大きくなるにつれて、経験者といわれる人材を採用したことがあるが、得てしてこれらの人はなにか途中で会社への不満を見出し、辞めていく、簡単にいえば裏切り者になる(これらはようするにスピンアウトということかもしれない)。せつかく膨大費用をかけて育て上げて、これらの途中採用者は会社への忠誠心に欠ける、よって、「新卒に—絶対に限る」という趣旨で興味深かった。

しかし、ここで視点を変えなければならぬのではないかという感想を持つ。つまり、これからの日本経済を展望すると、会社・企業は「大きくなる」というより、もどちらかといえば「多様」になることによって時代に即応し生きのびていけるのではないか。そのポイントはまさに人材の多様性である。

となると、採用は、必要な時に必要な人を必要な場所に、ということになってくる。第一、仮にも必要な人材と言うほどの人であれば、待っていてはくれない。ということは要するに通年採用ということもできるし、むしろ通年ということも適切ではなく必要な人材の適宜採用ということになるべきだ。

しかし、こうなると企業の組織も変わっていくことになろう。考えられる最大のポイントは「人事部はいらない」ということになる(「日本の人事部・アメリカの人事部」ジャコービィ 東洋経済新報社、「人事部はもういらない」八代尚弘 講談社)。人事部は現在のように企業の中核ではなく、採用は人材を必要としている現場が中心となって行い、人事部はそのサポート部門となる。一方、定年一斉退職ではなく適宜な時期に適宜な場所での「整理・リストラ」ということにもなってくる。となると退職、転職のシステムも変わってくる(現在の日本の法制では、いわゆる首切りには4条件とか言われる事情が必要で簡単ではない)。というようにこの問題はいろいろな広がりを見せるが、新卒の忠誠心より多様な人材の重要性が増しているのことは確かであろう—ということを留学統計を見ながら考えた。

カテゴリ: 未分類 [パーマリンク](#)

Gallery Aki Blog  
Proudly powered by WordPress.

## Gallery Aki Blog

ギャラリー・愛の季節のブログへようこそ！

## 愛の季節

投稿日: 2012年2月9日 作成者: admin

最近動物の生態を映像で伝える番組が盛んである。勿論、NHKのTVにも毎週よく知られている番組があり、動物生態の映像は夕方7時ごろのベストタイムにお茶の間に届けられる。

ということで筆者もよく観るが、ここでいつも何とも違和感を感じるのは、ナレーションの「愛の季節」である。野生の動物たちの「愛の季節」。この言葉を聞いたたびにいつも愛とは何だろうか——という不思議かつやや深刻な疑問がわいてくる。動物たちは愛の季節——しかし、いったい愛とは何なのか。

愛とはなにかこれは実に難しい問題である。人類史上これはいまだ語りつくされていない。という意味では永遠・無限のテーマであろう。愛とは何かをめぐってこれまで何千、何万という詩が生まれ、無数と言っていいほどの小説が書かれまた、偉大な哲学者が考え抜いてきた——しかしまだ語りつくせないもの。

ちょっと観点が変わるが、先日TVのコマーシャルを見ていたら、旦那さまが洗ったあとの犬の水きりのようにぶると身体をふるわせると金属板で作られたような愛という文字が落下する——それを拾って奥さんにわたすと、奥様がにっこりというような場面がある。夫婦の愛——それは金属の文字盤みたいなものなのか。

愛とは何か——かなり前の映画でショーン・コネリー主演の「薔薇の名前」という映画があったが、その一節を思い出す。謹厳なカソリック異端尋問官のショーン・コネリーとその若き従者（物語の語り手でもあるが）とのある夜の対話。若者の従者は、教会のゴミを拾いに来るような貧しくしかし美しい女性が次第に気になる——そこである夜 従者はショーン・コネリーに尋ねる場面——「先生は愛というものを知っていますか？」コネリー「勿論知っている」従者「？」するとコネリーが半身を起し「プラトンの愛、アリストテレスの愛——」従者「?? —いやそれとは違うんだ」——というような場面。その後、その若者従者のなにかしら態度の変化から、異端尋問官たるコネリーが言う場面「おまえは愛したな？」——忘れられない場面である。

愛とは何か——これは語りつくせない。聖書は「隣人を愛せよ」と言っている。（マタイによる福音書22節—39）。西田の善の研究によれば 愛とは二つの人格の接触から生まれる——と出ている。愛には人格が必要なのだ——であるとすれば動物についてはそのように考えたらよいのか、人格という言葉の重さからみると動物の愛の季節という言葉には違和感がとれない。NHKでは時に 恋の季節 とも言っている。恋という言葉になると多少感じも変わるが、しかし恋についても、一体何なのか——本当の恋とは——これを問うたことのない人は少ないであろう。というようなことを考えながら番組を見てみると、恋が成就しましたと、ナレーターがうれしそうな声を上げ、多少、野生動物にもプライバシーがあるのではないかとおもわせるような映像がお茶の間に流れてくる。

同じような動物生態映画にはBBCなどによるものもあるが、ここではどうもナレーションで愛の季節という言葉は出てこないように思う。要するにNHKの番組プロデューサーの感性の問題であろう。あの明るい声のナレーターは関係ないのだろう。あえてもう少し広く言えばこれが日本人の感性に合うのだろう。

神の愛、隣人の愛、夫婦愛、たぶん愛の一部と思われる恋——などと考えている間にもNHKの番組は弾むような明るい声でかたっている——愛の季節。

カテゴリー: 未分類, パーマリンク

Gallery Aki Blog

Proudly powered by WordPress.

## Gallery Aki Blog

ギャラリーアキのブログへようこそ！

## 賃金—労働の価格

投稿日 2012年2月16日 作成者 admin

最近の読売新聞夕刊で興味深い論争—やり取りが行われている。読者欄の意見交換であるが、主題は医者への給与が高すぎるかどうか、である。

まず、投書1 医者への給与は高すぎる。もらいすぎだ。 から始まり、

投書2 いや、医者への労働は実に苛酷であり、これを勘案すると高い給与も当然と考える。

と次に、投書3 この意見は不愉快だ、いまこの経済不況で我々労働者は皆大変な苦勞をしている。医者だけが苦勞しているような言い方は許せない。

さらに、投書4 最近の闘病の経験を振り返り、医者への努力を体験し、また医者から最後にやさしい言葉をかけられたことにかんがみ医者に感謝する—と続いている。

これらを読んでいて、実に興味深かった。一体 医師への賃金の適正水準はどこなのか。すこし、視点を広げると、この問題は要するに「労働者の適正賃金を如何に設定するか—すべきか」という問題に言い換えることができる。これは実に厄介な問題である。ここで仮に労働者—つまりその労働力を一つの市場における商品と考えると—労働力を商品と考えることについては以下に述べるように重大な疑問があるが—この問題は商品の価格(値段)はどのように決まるか、あるいはどの水準が適正か—という問題に言い換えることができる。しかし、この問題は人知では容易にとけない。つまり、どうも解が出てこないのである。

商品の価格がどのように決まるか。勿論これは需要と供給により決まるということになるが、需要と供給の力関係がなぜあるレベルで均衡するのかはだれも説明できない。ハイエクは言っているそうだが—カフェのコーヒー一杯の値段も、我々は、つまり人知では決めることができない。つまり市場がそのように決めていると言えるだけだ。私は時にドトールコーヒーでブレンド、小、持ち帰り200円を支払うが、いつもこの200円はどのように誰が決めたのか—と思ったりする。勿論、別のコーヒーとの価格の比較(高い、安い)は言えるが、なぜ200円なのかはだれもわからない。計画経済の旧ソ連ではどうしていたのか、さぞ大変だったろうと想像する。この200円の要素を分解して考えても、今度はその各要素の価格が何故その値段なのか分からない。靴一足の値段と言っても、原材料、流通費用、賃金水準、機械の減耗—など無数の計算をして—それでもわからなかったに違いない(余談ながらソ連が崩壊し自由経済に移行する際にどのようなレベルで、つまりどのような経済規模を前提に、ロシアが国際経済社会に復帰するか、この議論に参加した経験があるが、このとき旧ソ連のGDP統計では機械・固定資産の減耗=償却費が一切算入されていないことが分かり関係者一同困惑した経験がある)。

商品の価格は、その商品を生産するための労働力により決まる。つまり、商品の価格はその生産に投入された労働時間により決まるとしたのはマルクスである。この議論にはただちに疑問がある。たとえば1時間と言っても熟練工の1時間は一般工の1時間とは違うのではないか—という疑問を学生時代に提起したら、マルキストを目指す友人から、ここでは社会制度としての議論であり、一般的、社会的労働時間を意味しており熟練・非熟練(たとえば芸術家の1時間など)の問題は何ら議論の本質に影響を与えないと反論されたことを思い出す。しかし、この商品の価値=投与労働時間説もなにか曖昧なものを残す。これによれば、労働者の賃金は、他の商品と全く同じように、商品たる労働者の再生産価格(つまり一日働いて帰って食事をして適正な睡眠をとり翌日再び健全な労働者として現れるための費用の総体)によって決まると考える、これはマルクス経済学の中心命題である。そしてマルクスは論じている—商品のうちこの「労働力は特殊な商品」であり、資本の蓄積をたくらむ資本家は決して労働者に「正当な対価」を渡さない(かならず少ない)。労働者は社会的なシステムとして搾取されるというわけだ。

実際、日本でも、この労働者の賃金は「労働力の再生産価格に等しい」というアプローチが使われたこともあるらしい。かつて国鉄の労使交渉が華やかになりしころを振り返って、当時の国鉄労働組合の関係者が話すのを聞いたことを思い出す——その頃の国鉄職員たる労働者の一日の必要カロリーを—2400Kカロリーとして計算し、これを満たすため、つまり、生存のために必要となる賃金を計算するするといくらになるか、そのような議論が実際に行われていたらしい。これは、ある意味では残酷な話である—例えば労働者が楽しむための映画を見る時間・費用は？読書などの教養を高める費用は算入するか？等を考えるとこのような計算はじつに無残な議論であることが分かる—国鉄が民営化されて市場に出ることとなったことは、上に述べたような議論の残酷さを思うと実に喜ばしい。国鉄の民営化が踏み切られたことは、当時の民営化委員の言葉にあるように「日本民族にはまだ幸運がのこっていた。国鉄が民営化に成功したのだから—」。

ところで、聖書にじつにおもしろい記述がある。ブドウ園の労働者といわれる1章であるが、—ブドウ園の持ち主が、朝労働者をやとい1デナリの賃金を約束する。ひるごろ街に出てみるとまだ仕事についていない労働者がいるのを見つけ—そこで持ち主は自分のブドウ園へ行って働けという。さらに5時ごろになって街に出るとまだ仕事についていない労働者を見つけ、自分のブドウ園へ行って働けという。さて、夜になり賃金を払う時、最後に来た人に1デナリをはらう。そこで、最初に来た人はもっとうもらえらると思っているとやはり1デナリであったので、その朝来た人が文句を言うと、おまえには1デナリ払うと約束しその通り払ったではないかと答える。しかし、夕方来た人も1デナリとは？———という話である。（マタイによる福音書第20章1—16節）これにはさまざまな解釈があるようであり、そもそもこれは神の国のたとえとして話されたものであり、現実のつまり我々地の国の論理とは異なるともいえる。しかし、この章の解釈として次のようなことを聞いたことがある。つまり、すなわち1日夕方まで仕事しなかった人はどれほどその日を苦しんだか（その日家族や子供に食べさせるものがないとすると）、その心の苦しみを考えるとこれは公平なのだ。

このような心の苦しみを考えるとすると、そもそも人間の労働を商品とする考え自体が間違いではないかという考えに傾く。——これに関してまたちょっと違った見方もある。しばしば額に汗してはたらくことは貴重であるといわれる。ここにはなにか物造りは尊い、というどうやら日本で有力かつ特有の考え方がある。この関連で、たとえば金融（ようするに金貸し）や、最近話題を呼んでいるファンド運営の「売げたか野郎」には批判が強い。しかし、こういうファンド関係の仕事のものすごいリスク感と神経戦をどう考えるか。筆者も一時このようなファンド運営の相手方（つまり買収される側）を経験したことがあるが、この投資ファンド運営者・担当者の時間を問わない（いつ新しい情報が入るか、事態が変わるかわからない）労苦、張り詰めた神経を見ると、熱くはなからうが、冷たい汗は大変なものだと思う。物造りに流す熱い汗ばかりが貴重ともいえない。日本経済が今後サービス化していくとなるとこの辺の発想の転換も必要になろう。

ここまで、要するに労働者を商品のように扱い、賃金を労働者の再生産価格などと考えることはそもそも「正義」に反する。カントはその有名な格律で一人間はいかなる時でも目的であり、決して人間を手段としてはならない—と言っているではないか。このカントの言葉は実にカブよく心の扉をたたく。そしてマルクスは、労働の商品化を脱却する道を求めたのだ—と言う意味では、この扉をたたいたのだ。しかし、その結果は？これまでどれほど多くの知的に強力で正義感にあふれた人たちがマルクス主義にはせまじたか（小生の時代の何人かの友人を含めて—彼らはどうなったのだろう）—しかし、ソ連の崩壊とともに、これらの膨大な努力も20世紀最大の知的悲劇となってしまった。

上記投書を読んでいてこのようなことを考えるが、結局 医者 の賃金は勿論 機械工の賃金も含めて、なにが適正なのかわからない———なんということか！、結局、人間の労働も商品のように市場（労働）で自由に決める以外にない—そこが人間の限界である。そして、もし医者 の仕事ははたらきにくらべて、割の良い仕事だということになれば、みずから医者になってこの市場に参入して行く以外にはない。まことに不本意ではあるが労働力を一つの商品と考え、その値段は市場で決める以外に解はないというのがこれまでの歴史の経験から得られた結論である——これ以外になにかよりよい方法がほかにあるならば、べつであるが。上記投書のやり取りはそこまでは及んでいない。

カテゴリー 未分類 パーソナル

Gallery Aki Blog  
Proudly powered by WordPress.

## Gallery Aki Blog

ギャラリー空宙のブログへようこそ！

## 震災で亡くなられた人達

投稿日: 2012年2月24日 作成者: admin

昨年の東北・関東大震災にともなう津波によって失われた人たちの捜索が続けられているという。そろそろ1年になるが、むしろこれを契機に一段と努力し、見失われた人たちを探す努力を継続する――という報道があった。

すでに一年近い日月が経過しており、おそらく津波によって見失われた人たちを発見することは難しいと想像されるが、1年を契機にむしろ見失われた人たちを発見するための努力をさらにレベルアップしたいという姿勢には頭が下がると言わざるを得ない。

津波で流された人達は、発見されるのであろうか。おそらく難しいように思う。先日もテレビを見ていたら 津波で 夫と息子を同時に亡くしたという人の話が出ていたが、夫と息子を同時に亡くすということの意味を考えると、慄然とせざるを得ない。そしていま、この見失われた人たちはどうなっているのか。

そんなことを考えていた時、シェクスピアーの次の詩を思い出した。

エーリアル（歌う）

王なる父は五つ尋の

水底深く横たわり

骨は珊瑚、眼は真珠宿りぬ

その身は更に朽ちもせず

龍神(わだつみ)の業の不思議や

なべて貴き宝となり……………

海の妖精こぞりて時の鐘を打ち鳴らす

(折り返し歌)デイン・ドン

聴け！かの鐘の音を――――

あらし 第一幕 第二場 島の一部 妖精 エーリアル の歌 福田恒存 訳 新潮文庫

英文では次のようになっている

ARIEL

Full fathom five thy father lies;

Of his bones are coral made ;

Those are pearls that were his eyes:

Nothing of him that doth fade ,

But doth suffer a sea -change

Into something rich and strange ,

Sea-nymphs hourly ring his knell:

Ding -dong

Hark! now I hear them, -Ding-dong ,bell.

(The Cambridge Edition Text, as edited by WILLIAM ALDIS Wright)

津波で失われた人たち一再び見つかるのだろうか一水底深く沈んだのかもしれない。というようなことを考えると、このシェークスピアの美しい詩を一そしてその素晴らしい翻訳を思い出す一一思い出すことしかできない。

どんな海なのか一深き海に沈み、骨は珊瑚、眼は真珠、なべて御身は美しく一

この言葉を考え、ささげたいと思う。

カテゴリー 未分類 [パーマリンク](#)

Gallery Aki Blog

Proudly powered by WordPress.

## Gallery Aki Blog

ギャラリー安樹のブログへようこそ！

## 民主党と自民党

投稿日 2012年3月1日 作成者 admin

民主党が政権を担うようになってから、ほぼ3年になる。そして、この間に民主党はすっかり変わってしまったと感じる人は多いであろう。第一にハツ場ダム—コンク—リとから人へという掛け声とともにあれほどもめた挙句、結局は継続となった。継続の結論を持って現地に出向いた国土交通省の大臣の姿をテレビで見えていたが、—これで結論が出ました。継続します—と地元の関係者にあいさつする大臣の姿が妙に明るい、というほどでもないが平静でこやかである。格別、苦渋の表情もみられない。勿論 普天間の問題、—抑止力を研究してみたらやはり辺野古への移転が一番ということが分かったと述べるカリユシを着込んだ民主党の首相。高速道路の無料化も結局は、極めて限定的なものにとどまるようだ。最大の目玉であった子ども手当もそここのところに落ち着いたようである。そして、政権にある間は増税しないという約束を繰り返し聞いたはずだが、今や消費税の増税を前提とする検討が始まっている(勿論、選挙の洗礼を受けることが前提になっているようだが)。官僚との関係もどうやらそこそこの元々の鞆に収まったらしい。法制局長官が法律解釈を国会で答弁するという旧来の慣行に戻ったこともその一つである。

とザット見ると、要するに民主党も自民党も結局似たようなことになった。同じようなことは自民党でもできただろう。自民党と民主党とが、こうなっては一体何が違うのか—と感じる国民は多いに違いない。

もともと、民主党のマニュアルは激しすぎたのだ—という見方もある。先般、劇作家の山崎正和氏が読売新聞の寄稿欄に書いているのを読んだことがあるが、—民主党のマニュアルには驚愕した。民主党は一体これで日本に革命でも起す気か、と感じたと述べている。(山崎氏は民主党下の審議会の一つに参加し報告書を出しているが、自らその報告書について、必ずしも抜本的ではないが現実性を考えれば、このあたりが妥当なものであろうという現実感覚を述べているのが印象的である)。

結果として、要するに、あの期待された二大政党論は幻と消えたのだ。誰がやってもそこそこまじめにやっている間に、ほとんど同じようなことになる。ということから一度翻って考えてみたい。おそらく政治学の分野では散々議論されているのだらうと思われるが、一つの考え方は、二大政党というシステムは、そもそも社会に「階層＝クラス」が存在することを必要としているという観点である。多少、語弊を覚悟でいえば、例えば社会に 労働者＝無産階級と、資本家階級がある。そしてこの間でそもそも使う言葉も多少違い、教育的なバックグラウンドも違う—というような社会階層があるならば、その階級の利益を代表する形で政党ができ、「結果として」二大政党ができるというのが筋道ではないのか。しかし、日本にはこのような社会階層はないに等しい、ということもそもそも二大政党論がなり立つ基盤がない。

最近の日経「経済教室(2月24日付)」で、カリフォルニア大学 パークレー校のスティーヴン・ヴォーゲル教授が興味ある視点を提起している。「—両党の名誉のために付け加えると、最近の選挙で掲げたマニフェスト(政権公約)は、ある意味では具体的すぎる。特定の問題に関する大まかな提案は示しても、党としてよって立つところは何なのか、しっかりした理念を有権者に提示したとはいえない—」 その通りと思う。つまり、二大政党とは二つの理念の対立から生まれるべきもの。同時にこれらは理念である限り、結局、究極的な解決策、一元的な回答はない—理念の対立である—ということが重要である。

理念—たとえば大きな政府か小さな政府か、戦後この問題をめぐってさまざまな議論が国際的なレベルで行われたが、このような理念にはなかなか答えが出てこない。かつて、赤いバラをシンボルに政権をとったミッテランが一旦は国有化を進めながら、結局またあわてて民営化を進めたというような例もある。アメリカにもこのような理念の対立があるようだ。たとえば堕胎問題—これには絶対的な反対もある(アメリカで堕胎を営業しているといううわさで殺された医師がある)、が同時にこれを許容すべきという議論も有力である(あるアメリカ映画で、さまざまな事情による堕胎が間で処理される結果、母と子に悲惨な結果をもたらすことに直面し、ハーバードの医学部を出た医師が結局堕胎を助けるという印象深い物語もある)。余談であるが、今の総理の姿は不思議に思える。これだけ党として言っていることと現にやっていることが食い違っても総理・党首としてのアイデンティティを保ち、インテグリティをたもっているように見えることが不思議である。マニフェ



ストは一定の目標を書いただけであり、現実には柔軟に変更されるものという説明があるかもしれないが、それもやはり一定の理念の枠内での修正であるべきだ。

要するにあこがれの二大政党という形は、理念の対立があって成り立つ。いわれているように「生活者第一」では政治的な理念の提示にはなりえない。どの政党としても生活者第一にはまったく異論はなからうはずである。重要なことは、まず、理念があり、かつ、この理念には「原則的な回答はない」ということである。大きな政府がよいのか、政府は最小でよいのか—これにはなかなか回答はない。結局、これらの理念は、時々どちらかをやってみて、結果を見ながら修正していく以外に—これこそ二大政党と政権交代の成り立つ基盤であり、その意味でもある。このような「結果論的な修正主義」こそ二大政党とその間の政権交代を正当化するものであるはずだ。

時に、いわゆる「政局」が叫ばれることがあるが、以上の観点から見れば、ほぼ同じ理念の下のいわばコップの中の嵐であり、投票者としても「たまには変えてみるか」という以上の関心が出てこないことも当然と思われる。

と、このように考えるとボーゲル教授の期待するような理念的なマニフェストは出現しないであろう。

ついでながらボーゲル教授は、官僚システムについて次のように指摘している。「—官僚には一定の範囲の自由裁量の余地を与え、一貫性をもって効率よく政策を実行できるようにすべきである」つまり政党は理念を示し、官僚はその範囲である程度の自由と裁量を任される—という図式のようなのだ。この点、逆説的ではあるが、「生活者第一」というように誰でも賛成の理念のもとでは、官僚の役割についてもあまり騒ぐこともなく、次第に元来た道に戻るだろう。何と言っても過去の経緯に詳しく、既得権益の利害調整になれた官僚の役割はあまり変わることはないはずだ。この点ではボーゲル教授の期待に添うことになりそうだ。

カテゴリー: 未分類 [パーマリンク](#)

Gallery Aki Blog  
Proudly powered by WordPress.

## Gallery Aki Blog

ギャラリーアキのブログへようこそ！

## 小さな生物

投稿日: 2012年3月6日 作成者: admin

身近な小さな生物達と暮らしている。

庭に5センチほどのちいさなヤモリが住んでいる。庭の戸を開けたところ、右側の塀に沿って置いてある四角い花壇の裏側がその棲みかである。しばらく見ないな、とやや心配になるときはちょっと花壇をずらしてみると、やはりそこにいる。ので、あわてて花壇をもとに戻す。庭の入口には門燈がついており、夜は自動的に明かりがつくので、イモリは多分この明かりにつられてやってくる小さな虫を狙っているのではないかと思う。実際、夏などには、夜この門燈の裏にちいさなヤモリの影を見かけた記憶がある。

時に、入り口のドアを押しあげたときに、押しあげられたすきまからひょっと顔を出したり、時にぼとりと足元に落ちたりしてあわてる。このような時以外はよく見ることはないが、落ちてじっとしている庭石の上の姿をみると、体はうすい褐色で特徴はないが、じつにおおきな手と足(つまり手のひらと足のひら)をしているのが特徴的だ。サイズの合わない大きな4つの靴のように見える。この姿を見ていると、彼には――あるいは彼女か？しかし、筆者にはその孤独な雰囲気や漂わせる背中を見ているとどうも彼ではないかと思うのだが――パートナーがいるのか、いったいこの都会の庭でパートナーが見つかるのか等と考える。この小さな生物が庭にいるということだけで楽しい。――ところで、最近姿を見なくなったが――いるのかどうか――あの花壇をずらして覗いてみたい気がするが、止めておこう。もしそこにいなかったらずいぶんがっかりするに違いないから。

夜ソファの端に座り、そのそばに於いてある蛍光灯の下で本を読んでいると小さな蜘蛛が現れる。この灯火のそばに住んでいるらしい。深更、時に、本を開いている左手の親指に突然ぼんと乗って現れる。おやおやと思ってみていると、もうひと飛びしてちょうど読んでいる開いた本の上に乗ってくる。これは危険な行動ではないか。もしここで本をパタンと閉めればつぶされてしまう。と思いつつ、明るい蛍光灯に全身を表した蜘蛛に親しみを感じてじっと観察する。大きさは足もいれて5ミリにもいかないが、黒は実に漆黒である。つやもある。自分の頭の位置よりさらに高く盛り上がり曲げられた前足には多少獰猛なものを感じる。どうやら頭の上に小さな白い斑点があるようだ。と見ているとくると向きをかえると同時に消えてしまう。飛んだのであろう。こうなるといろいろ心配も出てくる。どうやら足元に積み上げて本の間にいるようだが、うっかり本をひっくり返したりしても大丈夫なものか。それに、掃除機が気になる。吸いこんでしまったらどうなるのか。というようなこちらの心配をよそに、忘れたころ、静かな夜の灯火の下にまたふと姿を見せる。

蜘蛛については別に面白い経験がある。どうやらトイレにも住んでいるらしい。大きさはほとんど変わらない。トイレの明かりは夜もつけることにしているので、どこからか虫が来るのであろう。ある時、トイレでふと見ると、右側の白い壁に蜘蛛がいる。目の前だ。いつもの蜘蛛かと思っていたら、ちょうどこちらの左のほほをこするように蚊が飛んできて、何とその蜘蛛の僅か7-8センチ前にとまったではないか。白い壁の上でこの二匹の小動物の位置関係がよく見える。蚊は明らかに後ろを見せている。蜘蛛から見れば絶好の間合いである。果せるかな蜘蛛は瞬時に位置を決めた。と見えた瞬間、蚊に向かって飛んだ。そして逃がした。珍しい瞬間を見たわけだが、蚊はいつどうやって後ろをみたのか。瞬間、襲いかかる蜘蛛を感じたのか。しかし、この距離でつかめられないとなると蜘蛛の生活も難しかろう。いったい1週間にどれだけの虫にありつけるのか、などと思う。

庭に鳩が巣を作っている。毎年同じで、この3月頃になるとやって来る。忘れたころに庭でクー、クーという鳩の声を聞くと巣造りが始まっている。かなり前はベランダの前にあるかなり大きな木の上だったがどうもベランダから人が出入りするのが気になるらしく――こちらにも気になる――今では庭の門のそばに並んでいる何本かの高いまっすぐな木の上である。だいたい秋には庭師をいれるので木は見事に丸坊主になるが、年を越えて今頃、ようやく葉がはえてきたという感じの頼りない場所である。また、この2月末から3月ごろというのが、季節が悪い。なぜ、このころに始めるのか。暗れている日でも寒く、時に冷たい雨が降る。とくに今年の冬は長い。いつぞやは冷たい雨の日、すでに毛も生えたひなどりの死骸が石畳に落ちていてがっかりしたことがある。ちょうどこの木は庭の入口につながる石畳にそって生えているので、出入りの際には

まさに巢の下を通ることになる。あまり大きな音をたてて驚かしてはいけない、もっと悪いことはじっと見たりすることだ、という話なので、今はなるべく静かに上を見ないように出入りしている。

鳥といえば雀について面白い経験をしたことがある。散歩のコースとしてしばしば北の丸公園に出かけるが、あるとき公園まで出てみたら細かい雨が降っていた。しかたがないので公園の入口にあるあずまの椅子にかけて公園を眺めていた。公園には人もいず静かである。するとそこに雀が何羽かやってきた。いつもはそれほど近くまでは来ないのだが、この日はすぐそばまでやってきて、ちょうど左手を置いている椅子の手すりのところにもやってくる。つまり左手の指のすぐ先である。この日、どういわけか手に桜餅みたいなものを持っていらしい。見るとたまたま手の指についていた桜餅の端きれに関心があるようだ。それでは、という感じで少しちぎって指の先に乗せてやると、何とそれを食べにくる。なくなると指の上にとまっている。雀と人間はあまり仲が良くないと聞いている。雀は米を食うので害鳥というわけだ。(これには鳥追いの物語を始め長い歴史がある。毛沢東の号令で中国の10億の民が一斉に雀を退治する話もある。もっともこれは逆に害虫が増えて悲惨な結果になるという結末となるが)と思うと実に不思議だ。面白いのは指についた餅の切れっぱしを雀がつつくと、必ずといってつついた雀は食べられない。なぜかという餅だから、この小さな端切れが、つついた雀のくちばしの上にくっついてしまうのである。当の雀はあわてて首を振りまわす。それを見ていて別の雀がやってきてこのくちばしの上に乗った餅の端きれをいただく。このやり取りがおもしろく、指の先に餅の切れ端をつけては面白く観察した。その後、もう一度と思い、パンの切れ端などを持って公園に出かけるが、二度とこのようなことはなかった。あの日は、雨が降っていたせいか。雀がこのように親しく指にとまるものか、今でもあの光景が不思議である。

悲惨な物語もある。実はこの事務所のあるビルの一階の部屋にはゴキブリがすんでいる。5センチくらいゴキブリの成虫である。なぜ住んでいるとわかるか、というとたまにゴキブリがほとんど瀕死の状態ではい出してくる。たぶんゴキブリとしては、この事務所に住み着いたが食べるものが全くない。聞くとところによると何億年という人類の発生よりはるか以前より、ゴキブリは今の形で変わらず生き続けており、その生命力は床の上の食べ物のしみ一つで一か月も生き延びられるほどだという。しかし、何しろこの事務所は誠に殺風景で、ここでものを食べることはほとんどないのでおおよそ食べ物のかげらもない。おそらくこの事務所に進出してきたゴキブリも、さすがに食べ物がなくほとんど意識もうろうの状態で這い出てくるらしい。ということでゴキブリが居ることは知っていたが、ある日ビールを飲んだカップを洗わなければいけないと思いつきながらそのままにして帰宅した。いつもはワイングラスのような足のあるグラスで飲んでいたのであるが、たまたまこのグラスをひっくりかえして壊してしまったので、この日は紅茶カップで代用した。帰るときカップの底の隅に少しビールの数滴が残っているのが気になったが、そのまま帰宅した。翌日、事務所に出てみて、その紅茶カップをのぞいてみると大きなゴキブリが入っているのを見て驚いた。ゴキブリはすでにひっくり返り、力なく手足をばたつかせている。もう起き上がることも、勿論このカップの内側の壁を這い上ることもできないらしい。これは驚きだった。一体どうして？ おそらく当のゴキブリはカップに残った数滴のビールのにおいを嗅ぎ分けひきつけられたに違いない。一体どうやって。そこで想像する一全く暗い事務所の夜、ゴキブリはわずかなビールの数滴のにおいをかぎ分けたのだ。このにおいはどこからくるのか、机の上。どうやってたどり着いたのか。わずかなにおいを頼りに床を進みこの大きな机のはじをよじ登る。においは多少強くなる。書類が積み重なった机の上を進み、ついに白い陶器のカップに到達する。しかし、少し外に反り返ったカップは簡単には登れない。おそらくカップの柄のところに辿りつき、そこから這い登ったのだ。落下するようにカップの中に入り、ついに数滴のビールの残りを飲んだ。どんな感じで飲んだのか。おいしかったか。そして、しらじら明けの日が窓に見える頃、何とかこのカップから脱出しようとして果たさず力尽きたのだ。というようなことを想像してしまう。どうやってゴキブリはこのわずかな数滴のビールに辿りついたのか一と考えるとなにか厳肅な気分になってしまう。暗間のなかにわずかに漂うビールのにおいー生物はそれを感じ取れることができるのだ。そしてゴキブリが一何と素晴らしい生物と考えてしまう。

カテゴリー: 未分類 | パーマリンク

Gallery Aki Blog

*Proudly powered by WordPress.*

## Gallery Aki Blog

ギャラリー安樹のブログへようこそ！

## インド エピソード

投稿日: 2012年3月10日 作成者: admin

インドについて面白い—不思議な経験をしたので簡単に紹介したい。少し前のことであるが、アジア経済の現状と展望というセミナーに出席した。ほぼアジア全域からおもな研究者・政策当事者などが参加したなかなか本格的な会議である。このセミナーでの議論の要点、大体の結論は—、アジアは貿易の拡大で稼いだ資金を国内に投資していない。海外に還流させている—その一番の柱はアメリカへの還流、つまりドル資産の保有、増加である。(最近では円資産が含まれるようになってきたかと思われるが)。これを逆に言うと、アジアではいまだに鉄道・道路や橋など、つまり経済の基礎インフラの整備、充実に必要な投資が進んでいない。アジアはもっと、自分自身に投資せよ—ということであった。(経済学的にはアジア諸国がもっとみずから消費し輸入を拡大しても同じことであるが)。

このとき、たまたま小生の隣に座っていた人が明らかに外国人で、会議が終わってからしばらく話をした。インド人であるということが分かった。話してみると、結構日本で仕事があるそうである。インド人の専門家となれば英語も自由であろうし、わからないでもない。ということではしばらく話しあったが、彼の意見はこうである。自分の出身の村に10年たっても橋一つできない。第一橋を造るとなると、まずそのあたりの土地が誰のものかいろんな争議が出てくる。インドは民主主義国だから、これらの争いは全て民主的に解決しなければならずいつ果てるともわからない。併せて、この調整には、まずは、地方政府と連邦政府の権限の調整という難問が絡んでくる。これがまた実に複雑で、同時にというか結果として、山ほど汚職が絡んでくる。そうこうするうちに、いろんな人がこの土地に流れ込んできて、時間とともに問題が解決するどころか、さらにいっそう複雑になるばかり。要するに10年たってもなにもできない。結局、彼によれば、インドには帰らないこととし、もしこれから10年以内に自分の村に橋が一本できたら、日本で静かに乾杯をするつもりだそうだ。

ご存じの人も多いかとおもうが、1990年代の初め世界銀行は、アジアのインフラ投資の促進に関する特別報告書を発表している。時あたかも冷戦が終わり解放された(市場のリスクをとる)民間資金が大量に流れ出し、この民間資金と膨大なアジアのインフラ投資需要とがマッチすれば大きな成果が期待されるというわけだ。この流れに乗ろうとアジアのインフラビジネスに乗り出した人も多い(その後かれらはどうなっただろうかと思う)。そして、はや15年以上を経て冒頭の(反省)会議となったわけで、結果はほとんど何も進まなかった。会議のフィリピンからの女性講師の一人は 一時盛んに 叫ばれた プロジェクト・ファイナンスの手法—BOO, BOT, BTO—「これらは一体どこへ行った」とやや自嘲的にかつ皮肉なコメントを述べ、参加者の含み笑いをさそっていた。そう言えば、筆者もかつて国際機関の仕事上、インドのしかるべき人たちと鉄道や通信、道路の話をした経験を持つが、あれはいったいどこへいったのか。

世界銀行では、本体業務の貸付以外にいわゆる技術援助の分野で、その年もっとも援助効果が高かったと評価されるプロジェクトを表彰するという慣行があった。ある年の一位入賞は、タイにおける Title search プログラムであったことを思い出す。Title (土地所有権) search (検索)とは、要するに誰がこの土地を持っているかその所有関係を明確にするためのシステムを作る技術援助である。このようなことを思い出すと、冒頭のような話も想像がつく。

これは一つのエピソードにすぎないが、このインドのエピソードはアジアのビジネスを考えるとよく検討するに値する。アジアの国についてはよく勉強する必要があり、「アジアは一つ」、日本はアジアの一つというようなわけにはいかない。先般の日経トップ記事によれば、インドのインフラ投資に協力し、これをすすめるため日本は官民連携する、いまやその時だ、という趣旨の記事が出ている。これからさらに10年もして再び冒頭のような反省会とならないことを願う。

カテゴリ: 未分類 [パーマリンク](#)

Gallery Aki Blog

Proudly powered by WordPress.

## Gallery Aki Blog

ギャラリー安田のブログへようこそ！

## コダック

投稿日: 2012年3月13日 作成者: admin

アメリカのコダック社が破たんしたと報じられた。コダックと言えば富士フィルムとの争いがある。当時コダックは、日本市場への進出が思うほどには進まないことについて、日本には制限的商慣行があり公平競争の原則に反するという趣旨の争いを起こした。富士フィルムがこれに全面的に対決、WTOでの協議に持ち込まれた。当時、筆者はアメリカに居て富士フィルムの関係の人と会ったことがあるが、個人的な心情として反発を感じ、強く富士フィルムを(精神的に)応援した。あの黄色い箱のコダックフィルム—確かに色鮮やかで特別な感じを持っていた。いまでは忘れられたかと思うが、当時、富士フィルムはやや背い、一方 サクラフィルム(こういうフィルムがあったのだ)はやや赤みがかった。これに比べるとコダックは違う。というように、むしろあこがれの製品という感じは持っていたが、これを日本人が買うのに何の規制もあるわけがないし、受けたこともないではないか。

そのコダックが倒れたというのは印象的である。というかやっぱりと思うし、正直言ってそれ見たことかという感情にもとられる。名門倒れる！一体コダックは何を間違えたのか、選択と集中はどうした、とすぐ聞きたくなるが、報道によると実はコダックも強いリーダーの下で選択と集中を進めたそうである。しかし、その選択を間違えたつまりフィルムこそ将来の道と考えて付属物は切り離したらしい。実のところ、いま隆盛のデジタルカメラの技術はコダックが開発したらしく、これについては、現在もおこのデジタル技術の特許を巡って富士と争っているらしい。

ところで、アメリカ時代コダックには便利した。なぜか。これはカメラフィルムの方ではなくてインスタント(カラー)カメラの方である。これは実に便利である。パーティ等でちょっと記念に思う時にはパシャリとやって、数分のうちに渡せる。相手の住所を聞いて送るような面倒もなく、第一もう会わないかもしれない、あるいはめったに会わない人たちと、写真の送付・礼状の返送など厄介なことは一切なくなる。数分後には写真を相手に渡し、皆とシェアして話題にすることもできる。もともとそれほど画質にこだわるほどのことはなく、ちょっとした記念には十分である。なぜカメラがこの方向に発展しなかったのか。いまデジタルカメラ隆盛で、精密きわまりなく驚くべき進化を遂げているが、上のような観点からみるとまったく落第で、上記の基本的な使い方の面倒さはフィルムカメラと何ら変わらない、ようするにオールドファッションである。一時、デジタルカメラ用に小型プリンター付きというのが出て、筆者も小型プリンターを持ち歩いたことがあるが、結局止めてしまった。今日はちょっとしたパーティ、カメラを—と思うが、撮った後のややこしさを考えて持っていくのは止めようと思った人は、筆者も含め多いに違いない。上質なインスタントカメラの潜在需要は大きいと思うが—。それにしてもコダックのインスタントは上記のように、多少実用に堪えるものではあったが、何しろ見栄えがわるい。学校の工作で作った箱の域を出ておらず興ざめではある(もっとも、最近は何か名刺大のプリントが出てくるインスタントもあるが、これも写真が小さく、レベルである)。

以上は余談である。コダックの破たんて町は閑散としているかと思いきや、最近の報道などをみると、アメリカ ロチェスターの町は実は大変なにぎわいと聞く。何しろコダックの破たんて安いオフィススペースがどんどん利用可能になり、いわゆるベンチャーがどっと流れ込んできたという。もともとコダックにあり、隠されていた高度な技術も独立を求めて(いわゆるスピノフ)大賑わいという感じだそうである。そう言えば かつてアメリカの自動車3社が不振となった時、これで自動車の町デトロイトもラスト・ベルト(錆鉄地帯)となるかと思っていたら、やはり経済関係月刊誌によるとデトロイトも一気に安いオフィスが利用可能になりにぎわっているとか。おまけに、従来の自動車とは違うコンセプトである電気自動車関連の企業がシリコンバレーで活発化—とも聞く。このような記事を読むと、アメリカの経済・ビジネスのダイナミズムとはそういうものかと感じる。なにか、大きな立派な組織、わが社は永遠なり、というような感じで、あまり組織そのものあるいは組織が生き残ること自体に感情移入してしまうのも適切ではないようだ。

これには裏の話もある。つまり、一方で、富士フィルムの方はどうか。こちらはまさに組織は存続したわけであるが、その内容を見るといまやフィルム会社というよりもデジタルカメラ、医療品などの分野が拡大し、単純なフィルム会社からは大きく変身している。日本の経済・ビジネスのダイナミズムについては、このような大きな組織の変身も願う必要がある。以前、日本では起業が少ないとして、アメリカの起業統計との対比をよく見せられ、起業家のためのセミナー・支援な

どが叫ばれたが、上に述べたような「組織の変身」ということも考慮すると単純に比較すべきではないことが分かる。

カテゴリ: 未分類 [パニマリンク](#)

**Gallery Aki Blog**  
*Proudly powered by WordPress.*

## Gallery Aki Blog

ギャラリー・アキのブログへようこそ！

## 議事録

投稿日: 2012年3月26日 作成者: admin

今回の福島原発事故の対応について、その初期における政府並びに関係者の会議議事録が残されていないことが大きな問題になっている。一方、報道によるとアメリカの原子力規制委員会における検討の様子は逐一議事録化されていたようだ。結果、ほぼ2000ページに及ぶ議事録が作られ公開されたい。NHKのテレビでは、その写しとみられる文書を画像に載せていたが、確かに膨大な議事録が残されたようだ。中には、委員長に対して、係員が少し疲れたでしょうから休まれてはどうか、と聞くところ。これに対して委員長が、いやもう少し仕事をする、とりあえずジュースでも飲む——とか言うようなやりとりまで記録されているらしい。こういう報道を見るとやはり政策決定に及ぶような重要な会議について、後世の検討あるいは批判に耐えるような記録を残しておくという考え方は、どうもアメリカのほうが一歩先を行くようである。眼をもう少し広く持つと、このような議事録を残すということは、後世の歴史的な検討を見据えたものであり、いわば歴史観の違い、あるいは歴史に対する姿勢の違いが反映されているという論調もある。

ということであるが、筆者は個人的には、議事録「なんか」残さなかった日本の当時の中枢の関係者には同情を感じ、かつ理解もする。おそらく議事録なんか考える暇もなく、自分の果たすべき任務(多分に与えられた役割ということになるが)、組織への忠実な貢献に没頭していたのではないかと想像する。その中で、何だ、一歩退いたような顔をして議事録をとる！！——という感じがよくわかる。一方、アメリカの議事録も、録音された英語の自動・機械的文書化(?)装置があるらしく、要するに自動化されているに過ぎないという見方もできる(勿論、これで思いたすのはニクソン大統領の会議議事録である。記事などによると、ニクソン大統領の場合、当時、大統領室のドアが開かれると背後に隠されたテープが自動的に回り始め、大統領室内の会談内容は全て自動的に記録されることになっていた由。もっとも、これがウォーターゲート事件でニクソン自身を苦しめることになるが、この記録の最も肝心な数分間は、これをタイプ化した秘書がペダルを踏み間違えたとかで消去されていることが問題になったことはよく知られている)。

翻って考えると、この問題は、単に記録を取り忘れたということではなく、要するに一種のビジネス文化の違いがその背景にある。これで思い出すのは、筆者が国際機関で勤務していたころの一つの経験である。当時部長職にあった筆者は、ある政策的な課題で部内の意見の違いに悩まされていた。いわば部下にあたる関連する課長の意見が対立して進まない。課長の一人はアメリカ人、もう一人はスコットランド人(ブリチッシュ・パスポートではあるが、自分はスコットランド人ということで、実にわかりにくいスコッティッシュ・イングリッシュをしゃべる)。そこで最終的な会議(当然筆者が主催する)の前に「根回し」である。同じく筆者の部下にあたる次長級の人(こちらはマレーシャ人)が、筆者の意向にそっていろいろやってくれた。各課長の背後にはそれぞれまた意見を持つ専門家がいたので、彼らにも根回しが行われたようである。ということで、根回し成立——その間の報告も受けていたので各課長の言い分も理解し、さて会議となったわけであるが、ここで驚くことになる。ここでまた各課長は、全ての議論を繰り返し、決定は上司たる部長(つまり筆者)によって行われるべしという態度を明確にした。筆者としてはこれは意外であり、ルール違反のような気がした。しかし、かれらの議論を聞き、またその後いろいろ情報を集めてみると、彼らの考え方が次第に分かってきた。要するに彼らにとっては、現在働いている組織への忠誠、あるいはその組織の一部として妥協を図るということの重要さもさることながら、彼らにはやはり専門家としてのキャリア・デベロップメントがある。場合によってはこの組織をやめるかもしれないし、将来のキャリアを展望すると妥協はするが無言では済まされない。自分の意見はきちんとテーブルに載せておく必要がある、という考え方である。筆者が経験した限りでの日本の組織ではこういうことは少ない。会議は部長、局長、役員レベルと上に行けばいくほど(さまざまなレベルでの根回し受けて)静かになり、かつ静かであることが期待されている。

要するに、議事録を残すことの歴史的な意味・重要さということよりも、まず、このようなビジネス風土の違いがあるということを理解すべきではないかと考える。記録を残せと言っても、それぞれが自分のキャリア・デベロップメントを考えて議論するというようなビジネス風土(あるいはシステム)がない限り、記録は定着もしないだろう。仮に残されたとしても、あまりはつきりしない、妙な(後で読むと不思議な、つまり論点、議論と誰の決断かがはつきりしない)議事録が残されるだけではないかと思う。



ところで、後日談であるが、その後いろいろ経験したところではアメリカ、イギリスなどではヒストリアン・ライターという職業があるらしく、また社会的にも高く認知されている。要するに、会社や組織の歴史を一人の独立したヒストリアンとして調査し(資料収集や必要に応じて職員の面接も行う)、まとめるという商売である。一般に日本では、社史ともなると優秀な職員による社史編集室がとりまとめ、大体において歴代社長の業績をたたえる記録となりやすいが、このようなライターは独立に歴史を描く(必ずと言っていいほど、序文などで自分はindependentであることをしきりに強調している)。そして、このようなライターの立場やその社会的な役割が認められかつ尊敬されている。

今回、当初の混乱の中で議事録を残さなかった人たちには同情を禁じ得ない。あまり責められないし、ここでたとえ議事録を残すことを形式的に決めたとしても、もっと別の観点からの考え方や、ビジネス風土が変わらなければ意味のある一歩前進は難しいと考える。が、しかし、同時に、このような議事録作成が定着してくることになれば、単に組織への忠誠、その一員として役割を果たすという観点ばかりではなく、転職も含めて自分のキャリア・デベロップメントを展望しながら仕事をするというビジネス風土ができることになるかもしれない。

カテゴリ: [未分類](#) [パーマリンク](#)

Gallery Aki Blog  
Proudly powered by [WordPress](#).

Gallery Aki Blog

ギャラリー空想のブログへようこそ！

## クイズ王

投稿日 2012年3月26日 作成者: admin

先般テレビの民放で驚くべき番組を見た。勝ち抜きクイズ王というわけで難問が続出。これを一次予選から、勝ち抜いていく。この一次・二次のクイズもものすごいが、最終勝負(バトルと言っていたが)は西の某大学医学部生と、東の某大学医学部生の対決となる。このレベルにくると実に想像を絶する。あまり見たことのないような漢字3文字で書かれた不思議に植物の名前、13世紀ころのモンゴル汗国の名前、かと思えば、あまり聞いたことのないようなサッカーチームの選手の名前を述べよ——という具合。加えて、東京ドームをダイヤモンドで埋めたらいくらになるか、とか短距離のポルトがマラソンを走り続けたとしたら何分、何秒で走るかなどの計算問題もあり、実に驚く。見ている方が疲れるような文字通りのクイズ・バトルである。これを勝ち抜いた東の某大学の医学部生にはまったく感服せざるを得ない(落ち着いて処理していくその態度も含めて)。まさに驚くべき才能。

ということで、テレビ番組にしては興奮のひと時であったが——しかし、とも思う。これらのことは原理的には難しいことではない。先般、某会社の電子辞書を買ったが、小さいものである。しかし、その中に広辞苑が全部入っている一ばかりでなく、かなり高水準の英和、和英、加えて教養・百科・実用辞典とある。さらに、何とこれらの英単語の発音まで正確に出てくるほか、簡単な英会話の一つの単語をキーワードにすれば幾通りにも表示される。これには驚かされる。手元の本棚の広辞苑を見ると驚くべき厚さ一、これが全部入っているとは！どうも説明・仕様書などを見ると、実はこれらの膨大な知識もわずか2-3センチのチップスに収まるらしい。ということはたぶん脳内に500円玉ほどのスペースがあれば、これらすべてを覚えることは可能なのか？勿論、ポルトがマラソンの42.195キロを走る時間は、手元の計算機を使えば簡単明瞭である。このクイズ王の才能にはほとんど敬服すべきではあるが——。

ということで思い至ったが、最近、筆者の長年の友人であった某大学教授が亡くなられた。理系の出身で理学博士。どういふわけか親しくしていただき、定期的にいろいろな意見交換の機会を持った。いつもその論点の斬新さに刺激された経験を持つが、要するに、先生の議論のポイントはただ一つ。「考えろ」だったように思う。とにかく、考えろ——学生の使命は考えること、大学の使命は考えること、知識人の使命は考えること。今にして思い出すが、ある時の話——

上野公園に犬を連れだした西郷隆盛の銅像が建っている。そこで、この犬はシバ犬か、秋田犬か——こういうことを聞くのは「雑学」と称する。しかし、このとき、西郷隆盛は偉いかどうか、もし偉いとしたらなにが偉いのか、と聞いたらどうか。あなたの意見は？どう答える？

こういうクイズが成り立つのかどうか分からないが、このやりとりは今も忘れられない。手元に先生の生前の講演の資料があるが、この中にこんなことが書かれている。フランスの大学の入学試験問題 ——

デカルトの、コギト エルゴ スム とアメリカの大統領選挙 の関係を論ぜよ。

これはほぼ4時間の論文作成による試験だそうである。クイズ王もものすごい才能というほかはないが、同時にこの亡くなられた友人の先生の言葉も思い出す。

カテゴリ: 未分類 | パーマリンク

Gallery Aki Blog

Proudly powered by WordPress.

## Gallery Aki Blog

ギャラリー安樹のブログへようこそ！

## 釣り 日本とアメリカ

投稿日: 2012年4月10日 作成者: admin

アウトドアは、ほとんど海釣りである。釣りのことを語り始めると開高健のシリーズを見るまでもなくendlessとなる。が、ここではアメリカの海釣り(の一端)を紹介したい。ワシントンDCから殆んどまっすぐ東に車で約3時間。チェサピックベイ(と言っても大きな川であるが)の大橋をこえて、デラウェア州に入り、東海岸に出ると、このかわいいは絶好の釣り場である。むかしオランダ人まっすぐ入植したという港町(ルイズ)があり、新婚旅行にも使われるとも言うちょっと見かけの良いホテルなど、どこかヨーロッパ風のたたずまいがある。大体は、ワシントンを出て夕方には、この街のAnglers Innに入り、翌日朝7時に船が出て夕方戻る一日コース。その日のうちに、夕間の中を釣果を積み込んで車を飛ばせ、まっすぐワシントンに帰り、なんとか遅い夕食に間に合わせる。

アメリカの釣りには規制がある。つまり、釣りあげることができる魚——これを「キーパー」という——の大きさは制限されている。それ以外はリリースしなければならない。この境界の最大の大型は、ストライパーと言われる大型のスズキである。これについては、ほぼ90センチ以下はリリースしなければならない。90センチと言えはかなり大きく、釣りあげた当人はかなり興奮しているが、船の大型クーラーにはメモリがついており(ただシインチ)同乗している船員(これをメイト=お手伝いと言う)がおもむろに長さを図り、僅かでも足りないとなると、こちらの奮闘むなく海に戻される。魚によっては一日の数に制限がある場合もあり、例えばシーバスは最近資源が減っているとかで一人2匹までである。ヒラメも相当な大型が釣れるが、これにも規制があり、ほぼ70センチ以下はキーパーにはならない。さらに、一人当たり5匹までの制限があるが、これはあまり気にはならない。(二人で7匹の経験はあるが)。

上記の大型ストライパーは大きいものは1.5メートルにはなり、大変人気がある(なお、餌は20センチくらいの生きたウナギを使う)。結果、一時乱獲されたようで、ちょうど筆者がアメリカにいた1990年頃までの10年間はチェサピック川の水域では捕獲が全面的に禁止されていたらしい(この魚はスズキ系なので汽水領域にも入ってくる)。ということで解禁後も監視が厳しい。川で釣る時は、いわば川釣りのためライセンスを買わなければならない(どういうわけか船で海に出るときは必要がない)。近くの釣り道具屋で買えるが、一日券、一週間券などがあり、釣っている時は帽子に挟んで見えるようにする。川で釣るとき釣機には定期的に監視員(レンジャー)が来るからである。釣りに夢中になっているとひょっと後ろから声がかかる。罰金はかなりきつらしく規定に外れた魚、一匹につきなんと300ドルくらいと聞いていた。現につかまってもめているところを望見したことがあるし、危ない思いをしたこともある。上記の魚は、その名の通り成魚となると横に見事な筋が何本か入り実に美しい。入漁券を買う釣り道具屋には、この魚の見事な製が展示されているので、いつも、これには注意！とその姿を目で確認していたのだが、大体20-30センチくらいの幼魚(というには大きい)では、この筋がはっきりせず、つい別の魚とってしまうという危険があり、実際危ない思いをした。一方、規制のない魚もあり、メバルのようなブラックシーバスや、小さい鯛のようなものは自由にキープできる。日本ではイシモチといわれるクロカーも同様。しかし、大体外人連中は20センチくらいのもは(こちらは塩焼きにでも思っていると)ノーミートとかいって関心を示さない。細くとがった箸で魚をつつく、眼の裏を食べるという文化を持たないから仕方がない。なお、大型で規制がないのは、シマアジに似たブルーフィッシュで、これは激しくファイトしてくるので楽しめる。(たとえば、前記の人気のストライパーはものすごい引きを示すが、浮上してくると急に静かになり妙に往生際がよい)。しかし、だいたい釣り場や船の中には Don't be a fish hog. の表示があり、あまり夢中になって釣りあげ過ぎるなという雰囲気がある。

港に帰ってくると魚の下処理のサービスがある。一匹75セントくらいであるが、これは極めて助かる。しかし、3枚おろし(フィレと言う)を頼むとちょっと驚かされる。まるであなたのような包丁であつという間に頭とひれ(つまりカマのおいしいところ)を捨ててしまう。結局1メートルを超えるストライパーも僅か30センチほどのわずかな身になってしまう。ということで、こちらはあとの塩焼き、お刺身などを考えてスケーリング(うろことり)しか頼まないことにしていた。

アメリカの釣りは、こんな感じであるが、一般に船はかなり大型で冷暖房のキャビンもある。上記のメイトと言われるお手伝いも、実に親切で糸のもつれやトラブルはすすんで助けてくれる(ただしチップをはずむ要あり)。さらに乗船の際、各人5-10ドルを払ってロツタリー(懸賞)に参加する。一日が終わった時に最も大物を釣った人がこの賞金をいただく。という

ことで、大物が釣れるととなり近所ワイワイと大騒ぎをする。

日本の東京湾にも釣り宿は多い。しかし、雰囲気はかなり異なる。船は比較的小さいがエンジンは強烈。軍艦のような勢いで釣り場に向かう。ほぼ1時間弱で釣り場に到着するというような船宿同士の競争原理が働いているらしい。また、釣りの雰囲気は厳しい道場である。釣りものによって解禁というか時期の規制はあるようだが、大きさの規制はない。あるとき、カワハギ釣りでほとんど切身サイズと思われる小さなものが釣れたのでついリリースしたら、船上のマイクを通じて「小さくてもカワハギはカワハギだ。何のために釣りに来ているのだ！」と船長から怒鳴られてびっくりした。いらい小物のリリースは見えないようにこっそりやることとしている。ということはあるが、この世界は要するに腕の世界、厳しい職人の世界である。船長も職人一同にかく釣れるところへ連れて行かなければならない—釣り人も職人。したがって一般に船の中は静かである。黙々と腕を競う。大物が釣れても奇声を上げるのは(筆者を除いて)まずいない。そして船長はキャビンからじっと見ている。釣れないと判断すると移動である。そして次の釣り場にくるとピッと笛が鳴り釣り開始となる。

釣り人各自まさに腕を競うわけであるから、基本的に上記のメイトはいない。さまざまなトラブル(糸の絡みなど)は自力で解決しなければならない。そういう腕のない釣り人は下級である。結果としてどうしても数を競う(船長も数が出ないのでは腕を疑われる)。釣りの言葉に「一束」というのがある。百匹という意味である。釣り新聞などでは、「一束」も夢ではないと宣伝する。初対面の釣り人同士では、「先日はキスで95匹出しましたよ」というような具合になる。なにしろ日本では数—これは船長の努力(当然その腕)と釣り人の業とが一体となった独特の、つまり厳しいけれども腕に応じて数が出るという公平な適者生存の世界である。釣り人が意地悪ということは全くないが、下手に仕掛けを隣の人に絡ませるようでは、要するに一格下であり、「おとといこい」というわけで(年齢ではないが)長幼の序をわきまえないといけない。

ついでながら、日本の場合、釣りものの下処理のサービスはまずない。ちょっとした処理をしてくれる時もあるが、これは当然ながらという感じで無料。つまり、あまりサービスにお金を払うという習慣がないようだ。しかし、最近では釣りに若い女性の参加もあり、魚の処理も含めて(指導やお手伝いなども含めて)サービスを提供し、一方、これにはきちんと料金をとるというようにしたほうが合理的であり望ましい。そうなれば、釣りももっと多くの人たちに親しみやすいものになるだろう。これからの釣りを展望した釣り業界に対する筆者の提言である。

釣りというのはきりがない。先日、長年つきあいのある東京湾の釣り船の船長と並んで釣っていた時、どういうわけかおにカサゴが釣れた。船長はそれは、取扱注意ですよとアドバイスしてくれたが、その時、件の老練な船長いわく「明日の乗り合い船の休暇の日は、外房にそれを釣りに行くんですよ」と言う。これには本当に驚いた。船頭の休暇の趣味が釣りは！！「6人仲間がそろいましたので、普通の料金で船を出せるんですよ」となにやら楽しげである。

アメリカの釣り船でもやはり時間と暇の関係でお年寄りが多い。あるとき、(勿論よくはわからないが)80過ぎとも見えるお年寄りの一団がいた。そのうちの一人が、竿を海に垂らしたまま、寄り集まった仲間達と談笑している。その時突然、竿が激しく動く。Fish on! というわけで、そのお年寄りはあわてて取り込みにはいる(このときの魚は岩場に住むトウトグ。大型カワハギに似た魚。餌は手頃な川ガニをぶちぎりにしてそのままつける。身は恐るべき美味。ひとり2匹までの制限あり)。あとで、自分の年甲斐もないあわてぶり、熱狂ぶりが照れくさくなったらしく、「全く釣りは一体いつになったら満足するのか、きりがない—endless」とつぶやいたことが耳に残る。この話—ようするにきりがないので、この辺で。

カテゴリー: 未分類 [パーマリンク](#)

Gallery Aki Blog  
Proudly powered by WordPress.

## Gallery Aki Blog

ギャラリー安田のブログへようこそ！

## IMF

投稿日 2012年4月23日 作成者 admin

IMFという言葉を知ったことがあるだろうか。正式な英文は、International Monetary Fund である。日本語訳は国際通貨基金と言われる。聞いたことがあるだろうか——ではない、最近やたらとその名前が出てくる。特に、このところ、話題をあつめたギリシャ、欧州危機に関連して連日のように(少なくとも経済新聞では)新聞記事に登場している。フランス人とかあの女性、ラガルド専務理事の写真も見かける。なにやら元気がいいがあれはいったい何者か——むしろ、このような感じであろうと思われる。最近、トム・クルーズのミッション・インポッシブル・シリーズの新作版を見たが、ここで、この国際的な特殊任務の総元締めの名がIMFとなっていたのには多少笑ってしまった。トム・クルーズがIMF! と言うのである。国際的に情報網を張り巡らし、なにやら秘密裏に世界を動かしているというようなイメージから国際通貨基金の「IMF」がパロディ化されたように見えた(もっとも、この映画では、件のトムクルーズ率いる一団が、その大元締めであるIMFの支援を得られなくなるという設定で、このミッションのリスク感を高めるというようなシナリオであったが)。

国際収支の中の一項目である「経常収支」の赤字が続くと、国全体としては困ることになる。なぜなら、国内では調達が難しいような、その国の発展あるいは国民生活に必要な品物・あるいはサービスを輸入することが難しくなるからである。むかし、清朝のころ、中国の様々な物産—絹・陶磁器・お茶などに強い需要を感じていたイギリスが中国に貿易ミッションを送った時、当時の清の乾隆帝が、「中国は事大物博」つまり中国人が必要とするものは何でも中国にあり、イギリスから輸入したいと思うものは何もない——とイギリスのミッションを追い返したと伝えられている。なるほどという気がするが、これは間違いである。ヒマラヤの山程の金を持っていても一人の人間の欲望を叶えることは出来ないという言葉が(インドかどこかに)あるそうだが、たしかに人間の嗜好の変化なども考えると中国といえども十分に事大物博とはいかないだろう、自分の国では生産できないような「足りないもの」があるはずで、やはり貿易は必要だ。この意味で乾隆帝は間違っていた——と考えるのも、実は「基本的には」誤りである。現在の国際経済学では、仮に一国にすべての製品・サービスがそろっていても、他国とどこかに生産性の比較劣位がある。であるかぎり、比較優位の産業に切り替えて国際貿易をした方が得である。乾隆帝は十分裕福で満ち足りていたかもしれないが、他国との貿易は乾隆帝をさらに豊かにしたはずである。

資本取引がなければ経常収支の赤字はあり得ない。輸入して支払う金(外貨)がないときには、うまく話をつければ3ヶ月後支払い、などの「つけ」にしてもらえるだろう。この「つけ」こそ資本取引であり、「つけ(勿論借り入れてもいいわけであるが)」が認められないくらい信用がなければ、個人の経験でもわかるが、なんと致しがたく、輸出で稼いだ分しか輸入できないわけで、経常収支は絶対には赤字にならない。「つけ」を認めてもらえるということは、こちら(輸入国の産業・経済)に見込みがあるからで、したがって、有望な発展途上で経済が成長している状態では経常収支は赤字になるのが普通であり、必ずしも問題にはならない。なお、このような貿易とは関係なく株の売買などにとまなう資本の出入りは、複式簿記の原理から経常収支とは簿記上何の関係もない。(借入とは借入証文を輸出して同時に同額の外貨を輸入すると記帳されるので、このような資本取引の収支尻はつねに均衡する)。そもそも、国際収支統計の原則である複式簿記の関係から見ると、経常収支の赤字・黒字ということはあるが、国際収支の赤字・黒字と言うこと自体がナンセンスある。このような国際収支統計に関する理解は、今ではかなり一般化したものであるが、以前は必ずしも十分理解されていたわけではないようで、元東大の小宮教授が文化勲章受賞の際、この国際収支の関係を天皇陛下に御進講する回想の場面(「私の履歴書」)がある。陛下もお聞きになったのだ。

そこで、なんらかの理由である国の経常収支が赤字続きとなると必要な輸入ができなくなるか、少なくとも輸入を縮小する以外になくなる。これは当該国の国民にとってみならず、国際貿易・世界経済の全体としての発展にも望ましいことではない——そこでIMFの登場となるわけである。IMFは輸入継続に必要な外貨の「両替」に応じてくれる(たとえば、赤字国がタイならば自分で自由に調達できるパーツをIMFに渡すと、決められた比率で円やドルに両替してくれる)。結果、IMFにはパーツなどの通貨がたまり円やドルは不足してくる。IMFは協定上外貨の借り入れはできない(いくつかの国との特別な借入協定はあるが、これは限られている。と同時に、民間市場からの借り入れは一切できない)ので、結局、IMFの支援活

動は加盟国から拠出された円やドルなどの範囲内でしかできない。IMFへの拠出拡大が定期的に繰り返される所以である。最近でも、日本はこの拠出金増加要請に応じ4.7兆円の追加拠出をすると報じられている。なお、この点、世界銀行は全く異なる。その信用を生かして世銀債発行による市場からの資金(円やドルに限らず必要な様々な資金)の調達が可能である。よって世銀の増資はあまり聞いたことがない。

さて、IMFが円やドルなどとの両替に応じるときは必ず相手国に政策的な注文をつける。いつまでも両替したままでは困る、いずれパーツなどの通貨は引き取ってもらって円やドルに直してもらわないと、随時他の国を支援することができなくなるからである。これがIMFから提示されるプログラムである。経常収支赤字国はなるべく早く黒字国に転換してもらわなければならない。経済学的には、経常収支の赤字はほぼ財政収支の赤字を反映したものである。この赤字を抑制するため、結局は、福祉などの社会政策の抑制やガソリン税など生活に関連するような増税が勧告され、大きな政治問題化する。ラガルド専務理事が頻りに紙面に登場する所以である。最近ではIMFの政策勧告は短期的なものにとどまらず、金融制度等も含めた制度的・経済の構造的な分野にも及んでいる。本来は、経常収支の短期的な赤字乗り切りのためのプログラムのはずであるが、なぜこのように当該国の制度や経済構造の変革についてまで勧告がなされるのか。その根拠は何か――という点はこの点は協定上は必ずしも明確ではない。おおざっぱには、協定の1条で雇用の確保が目的の一つに掲げられていることなどが引用されることがあるが、これもあまり明確とは言えず、このような一国の経済制度・構造の変革に及ぶ勧告にまで、その守備範囲が広がってきたのは、実際上の必要にともなう沿革的、自然発生的、あるいは、なし崩し的な拡大(mission creeping)によると言われている。とはいえ、IMFの推奨する勧告は強力で、最近のヨーロッパ危機の例にも見られるように、当該国がまずIMFの勧告を受け入れなければ、他の国の支援も受けられないと言ったような国際的な仕組みが事実上でできている。このように、IMFは国際的な支援網の中心となるのでその立場、勧告は強力である。

であるがゆえに、ここには一つの疑問がある。IMFの政策勧告がなぜそのように強い権威をもつのか？本当にその勧告は正しいのか。ということを考えてみたいが――これは以下次に続く――

注 国際収支、IMFプログラムなどについては、たとえば [google 検索「国際金融をめぐる13章」](#)を参照。

カテゴリー: 未分類 [パーマリンク](#)

Gallery Aki Blog  
Proudly powered by [WordPress](#).

## Gallery Aki Blog

ギャラリー安樹のブログへようこそ！

## IMF 続き

投稿日: 2012年4月23日 作成者: admin

IMFからの勧告を受け入れることが、その他の国を含めた国際的な支援網ができることになると、IMFとの交渉は、まさにその国にとって国際的な支援獲得の第一歩であり中心をなす。ということはIMFの立場は強力である。あまり強力なので、国によっては危機に直面してもなかなかIMFに寄りつかず、いわゆる弥縫策に走りかえって問題をこじらせるとも言われているほどである。そこで当然出てくる疑問は、何故、IMFがそれほどのパワー—いかにすれば権威を持つのかである。これはよく考えてみる価値がある。

IMFの勧告する政策は正しいのか。IMFの担当者エコノミストは、大体は経済学博士号を持つような専門家が多い。しかし、これが権威の元になるかと言うと、曖昧なものである。経済学の知見は時代により変遷する。経済学の論調も、かつてニクソンが「いまや皆がケインジアンだ」といったといわれる1970年代とは大きく変わっている。筆者は1990年代の初め、IMFのなかで過ごした経験があるが、ケインジアン的な発想はもはや「時代遅れ」と言われていた。次に、そもそも経済学自体が、アメリカ産ではないか、ということもあり、IMF批判の一つの大きなポイントとして、要するに、IMFはアメリカの手先であり、(世界制覇あるいは覇権の維持をねらう)アメリカの陰謀を担ぐ(まさに前記 ミッション・インポシブルを思わせる)エイジェントに過ぎないといういわゆる陰謀説もかなり有力である。しかし、もうすこし別の観点もある。IMFは何と言っても加盟国が合意の上参加した「国際機関」である以上、その発言は加盟国によって当然尊重されてしかるべきである、という考え方である。たとえば国連などもその一つで、参加各国から払われる敬意と尊重精神が前提になっているではないか。であればIMFも同じであるはずだ。しかし、この議論には一つの重大な問題がある。国際機関の「内政不干渉の原則」である。国際機関と言えども内政には関与できないはずだ—これはこれら国際機関の存立の大前提である。これはなにも政治的な分野だけではなく経済関係についてもあてはまる原則であり、例えば、ロバート・ギルピンは「各国の経済は為替レートの言う一本の糸でつながれたブラック・ボックスである、として考えるべきもの」(「世界システムの政治経済学」)と述べている。各国のブラック・ボックスの中はまさに、内政であり国際機関といえどもみだりに介入はできないはずだ。これはちょっと、分かりにくいだが、たとえば、かつての日本の郵貯制度についてのIMFの批判などをどう考えるか。これなどは、その国の歴史的、社会的な事情を踏まえた制度であり、国際機関といえどもみだりに介入は許されない、という議論が有力だったはずだ。この議論をもう少し一般化すれば、各国の経済政策と言っても、それぞれ各国の歴史的、社会的、あるいは文化的な背景をもつさまざまな制度と結びついており、そもそも、IMFのような国際機関が「よくその国の事情を分かりもしないで」政策的な介入をしていくことは許しがたい、間違いである、ということになる。

このような疑問を抱くとすれば、そもそもまずはIMFの支援を取り付けなければならないという仕組みから脱却すべきだという議論もある。金はある、それならIMF抜きでやろうではないか—この流れが地域(たとえばアジア)版IMF構想である。どのみちワシントンのIMFは、アジア諸国のことはよくわかっていない、ならば、アジア諸国だけのIMFを造ろうと言うわけで、実際アジア通貨危機の際は、そのような提案・動きがあったが、アメリカの反対で流れたと言われる。最近アジア諸国の中央銀行間における外貨資金支援ネットワーク(チェンマイ・イニシアティブ)の拡充が合意されたが、その際にも、これでIMFとの合意抜きで、アジア諸国が互いに助け合うアジア独自の支援策が広がったという趣旨の報道がなされている。また、欧州版IMF構想も報じられているが、これは進んでいないようである。

といいながら、筆者はIMFの中で様々な国、いわゆる先進諸国はもちろん途上国を含めて多数の国の経済政策の議論に参加した。さまざまな議論を思い出すが、結局、その際の議論から学んだことは、要するに次の2つである。

経験則1. 自国の歴史や文化は独特であり、これらを十分理解し尊重して議論すべきだという主張は、必ずと言っていいほど既得権益擁護につながっており、改革の引き延ばしの口実に使われる。つまりは内政不干渉ではないかと言うような批判を受ける分野は、実は既得権益と深く結び付いていることが多い。仮に、これらの既得権益の打破が求められるとするならば、まさにIMFのような場でオープンに議論されることは大いに意味がある。

経験則2. 必要な改革は現在の混乱が収まってからやるべきである。とりあえずは混乱收拾が先決である、という議論は

ほとんどまやかに近い。混乱が収まってしまうと、必ずと言って改革のインセンティブを失う。危機と混乱の渦中こそ改革を進める好機である。

もしこれらの経験が意味を持つとすれば、IMFのような国際機関においては、知られている経済学の知見を踏まえながら、オープンな議論をおこなうことこそもっとも重要であり、この点こそIMF存立の基盤だと考える。この点、IMFの理事会の議論は長く非公開であったが、いまではその殆んどが公開され、インターネットでも見るようになってきている。言い換えれば、いわゆる仲間内の議論、既得権益の擁護に終わるような議論を越えた議論こそもっとも貴重であり、まさにIMFのよって立つ基盤ともいえる。日本としても、たとえば、地球の裏側から、日本に行ったこともない(あるいは日本人と話したこともない)と言うような人たちの提起する議論こそ聞くべきである。このような国に或いは人たちにきちんと説明できないようなことはどこか疑わしい。既得権益擁護のにおいがする。であるとすれば、——ここがじつは筆者の議論のポイントであるが——IMFアジア版などと言う議論はナンセンスである。これでは仲間同士の権益擁護あるいは隠ぺい機関に墮する危険が大いにある。地域版IMF(カントリー・クラブ化)構想には反対である。これではIMFの存在意義(唯一のと言ってもよい)が失われるだけだ。

カテゴリー 未分類 [パーマリンク](#)

Gallery Aki Blog

Proudly powered by [WordPress](#).



## Gallery Aki Blog

ギャラリー・安掛のブログへようこそ！

## 想定外

投稿日: 2012年5月14日 作成者: admin

この震災を受けて、想定外という言葉は評判が悪い。いまごろになって想定外とはなにごとか。そんなことを言われては、国民として安心して暮らせない、というわけである。しかし、よく考えてみればどんな技術も一定の想定にもとづいていることは容易に想像できる。たとえば、車の車体も一定の想定された衝撃・力に耐えられるように設計されているはずだ。思い出すのだが、以前、海外の大使館勤務の際、ベンツと日本車の比較論になったことがある。海外大使館ではベンツ愛好者が比較的多い。やはりエンジンが違う。高速道路で、追い越しをかけるときのレスポンスにはやはり日本車は追いつかない、という議論になったが(今では古い議論であるが)、一体何が違うのか—このとき、理系出身の大使館書記官が、「エンジンと言うのは要するにこれまでの経験を凝集したものだ」と言ったことが忘れられない。経験とは逆にいえば、失敗の歴史であり、技術とはこれら失敗つまり想定外の結果を踏まえ、これを組み込みむしろそれを積み上げてきた結果である、というわけである。いまはよくてもいずれ「想定外」のことが起きるかもしれない。技術はそれを「経験して」次に進む。

であれば想定外とは何事か、無責任、人災だ—ということとは当たらないことになる。想定外のことは常に起こりうる。とすれば、第一になるべく当初の想定レベルを上げておく(ここには当然経費などの一定の壁がある)そして、第二に、もし、まったく想定外のことが起きた時にいかに緊急的に対処するか、が問題である。

第一についていえば、最近の「はやぶさ、遥かなる帰還」(集英社文庫)が刺激的である。実に驚きの連続。まさに想定外が次々に出てくる。特に最後の地球帰還の際、これまで緊急的に使っていた姿勢制御のエンジン(実は姿勢制御装置は本来別系統で、その想定外の故障に対応してエンジンを使ってきたわけであるが)は、4つのうち3つが故障、ついに一つになり理論的に帰還不可能となる。まさにこれで終わりかと思うと、「実は打ち上げ前に、こういった状況もあろうかと想定して、バイパスダイオードを入れています」言う場面が出てくる。実にほっとする場面だが、この場合は想定外か、ありうるかと予想していたとなると想定内とも言えないこともない。最後は燃料の直接噴射(イオン化ではない)で帰還姿勢に入ることになるが、直接噴射では燃料を猛烈に食うので予定された燃料では全く足りない計算になる。ここでも、「あの時そこから連絡が来て燃料は指定された、つまり想定されていた量よりかなり多く、入れられるだけ入れて置いたはずだ」と言うことになり胸をなでおろす。これらなどは想定内というのか想定外と言うのかは微妙なところである。

第二についていえば、たとえば、トム・ハンクス主演の映画「アポロ13号」を思い出す。アポロ13号は燃料電池の爆発事故(業者が電池のフューズを間違えて入れたということが原因とされている)により、急速に予備電池の消耗が始まる。当然、必要最小限度の機器だけを作動させ、それ以外の電源は切られるが、それでも機内の炭酸ガスの量は次第に上昇し、酸素不足、乗員の生命の危険へとつながる。そこでどうするか。このときエド・ハリスが演じるNASA局長が、絶対に乗員の生還を期すと決意し、居合わせた職員に利用可能な部品・機材をすべて使って何とか酸素量を確保する仕組みを作れと命じる場面がある。宇宙船の中で利用可能な部品、材料、蛇腹のホースなどなにかがらくためいたものも含めて一抱えの材料をテーブルの上に投げ出し、科学者たちにこれが使える材料すべてだ、これで生き延びる装置を考えると叫ぶ。これなどはまさに完全に想定外の対応である。これらの想定外を乗り越えてカプセルが天空から降りてくる。海に漂うカプセルのハッチを開けたトム・ハンクスが、迎いのボートの艦長に「ミッション サイン オフ」と言う場面は忘れられない。

これらを見ると技術と言うものは、一定の想定と、ある種の偶然と、加えて独創的な緊急対応とが奇妙にむすびついて、結果として発展していくものだという感じがよくわかる。実は、はやぶさの帰還が話題になった時、筆者は上野の科学博物館に出かけた。はやぶさの模型と言うか何か金箔がはられたような実物大の展示がありつくづく眺めたが、ちょうどはやぶさが衛星資料の採集に失敗したことが明らかとなったこともあり、偶然 NHKテレビの現場取材を受けた。アナウンサーから、「これでは日本の技術レベルが世界から疑われることになるとは思いませんか」と聞かれたので、「これだけ難しいミッションを考えると全くそうはおもわない。これで日本は他国にない経験をしたのだから、むしろこれで一歩他国をぬき進んだと言えるはずだ」と答えておいたが、後でテレビを見たら放映されていなかった。

想定外は必ずありうるのだ。そしてこれは誰でも常識的に知っている。しかし、なぜ「想定外」がそれほど評判が悪いのか。今回の原発事故の後、大前研一氏のHPIに掲載されている幾つかの提言を見た。実に参考になるが、その中の一つ(初期のころ)で、次のように述べているのを見た。「アメリカのスリーマイル事故での政府の対応は、半径8マイル以内の住民について、一定年齢以下の幼児は強制的に退去させるが、あとは自己判断・リスク判断、つまり自主避難に任せる対応を取った。日本でも管政権はこの手法によるべきだったと――」しかし、自己リスクと言われても、筆者を含めて実に困惑する。ということをよく考えてみると、筆者を含めてこの「自己リスク」に慣れていないのだ。これまでなんとなく日本は安心で、安全な社会に住んでいたと信じていた。それが自分で判断してリスクを取れと！これはどうしても違和感がある。これが翻って、いまさら想定外と言われても、というように、想定外という言葉がなるほど無責任に聞こえる理由だ。たしかに想定外がありうることはよく考えるとその通りなのだが、――なんとなく信じていた安心・安全社会から突然放り出されたような感覚が、想定外という言葉に付きまとう。

このように考えると、今回の原子力事故について想定外と言う言葉により、実は筆者も含めて、日本人は初めて奇妙なところへ放り出されたような、誰を頼りにする？とでもいうような不安感、違和感に突然襲われたのも無理はない。何しろなんとなく安心・安全社会で、何よりも自分の仕事も、基本的には終身雇用、年功序列で、そもそもキャリア・デベロップメントをはかり、リスクを取った記憶もない。政府も警察も、なんとなくちゃんとやってくれているような気がする。お医者さんも信頼している。最近ではセコンド・オピニオンを聴いたうえで自分で判断しろともいわれるが、これもなんとなくやりづらい。第一これはお医者さんに失礼な気がする。今の仕事(確かに会社にはいったときは選んだ様な気がする)入ってからは、人事部・上司の言われるように動いただけで(勿論それぞれ与えられた仕事に全力を挙げた自信はあるが)この仕事を選んだ自己判断とは程遠い。

今回の事故の後、実際に、日本を脱出しようかと考えた人もいるはずだ。とするとどこへいくか、これはいわゆる亡命であり自己リスク判断の最たるものである。しかし、このような自己判断は――どの国を選ぶかなどと言う恐るべき、普通の日本人には想像出来ない判断であり、そのような経験もない(勿論、世界にはこの判断をしてリスクを取りながら生きた人たちは無数にいる)。しかし、筆者の知人でやはり日本の原発による危険を判断し、子供の教育期間はオーストラリアに移すということを実行した人がいる。このような判断に日本人はなじみがない。

要するに想定外は当然ありうる。とすれば、これからは、何時、自己リスクと言われるかわからない。そういう新しい覚悟・生き方が必要だ――と今回の事故は教えている。

であるならば、もっと情報がほしい、情報と言っても一方的なものではなくまた、きれいに整えられたニュース解説風のものでなくいろいろとちがった意見も聞きたい。そして自分で判断するという訓練が必要だ。

カテゴリー [未分類](#) [パーマリンク](#)

Gallery Aki Blog  
Proudly powered by [WordPress](#).

## Gallery Aki Blog

ギャラリー安田のブログへようこそ！

## 秋入学

投稿日: 2012年5月16日 作成者: admin

東大が中心となって大学の秋入学について検討会を立ち上げたことが報じられている。今後5年くらいかけて検討を進めるとかであるが、一体何をそんな検討しているのか。という気になるが、しかし、一度よく考えてみる必要がある。

まず、何より、日本人学生の海外留学であるが、これは軽々に行うべきではない。できれば海外留学はしないほうがよい。これはかつて大学で学生の指導にあたった経験もある筆者のアドバイスである。学部の学生は海外留学などを考える前に、とにかく日本の新卒、一斉採用の群れの中に紛れ込むことが先決である。日本ではいったん日本社会に潜り込む機会を逃すと二度と日本の社会では暮らせなくなる。この現実を十分認識すべきである。以前もこの欄で書いたことの繰り返しになるが、筆者は海外勤務の際(実際はワシントンDCであるが)、多くの日本人留学生の面談を受けた。そのほとんどは、勇躍海外留学を試みたが日本に就職先がない、日本に帰れないという相談である。とりあえずは大学院に入り、博士号などとやっているうちにもう30歳近くなる。こうなるとまず日本のビジネス界に入ることは不可能に近い。海外での孤独と勉学を乗り越えてきた人たち、という意味では優秀なはずの人たちなのに、日本に就職先がない。帰れない——これには本当に困ったし、また残念、もったいないとも思うが、これが現実である。仮に博士号までとどり着けば、多少日本のアカデミズムの世界に道がありそうであるが、この可能性も針の穴のように小さい。ようするに海外留学などを考える前に、とにかく日本の新卒の群れの中に紛れ込み、なんとか、まずは日本のビジネス社会に潜り込むことが先決である。どうしても留学したければ就職してから社内選考を経て行くという道がある。これがもっとも賢明な道であり、同じ海外にいる留学生でも、こうしてその「根」をすでに日本に持っている人と「根なし草」となってしまった留学生とは雲泥の差がある。

このようにその国のシステムに乗った人と外れた人の違いについては、フランスでも大きな違いがあるらしい。高級官僚をはじめとする役人、ビッグビジネスなどに就職を果たした人——これをインナーという(フランス語ではないがinnerか?)。不幸にしてこのようなシステムに潜り込めなかった人はouterと言われるらしい。innerとなれば職の安定(簡単にはクビにならない)、年金、医療保険、住宅などでほとんど生涯にわたっていろいろな保証が行きわたっている。しかし、仮にouterとなってしまうと一生悲惨である。ということで、フランスでは、当然ながら若者の就職は難しくなる。若者の失業率25%などと言われると、この深刻さが、そしてinnerに潜り込むことの難しさがよくわかる。ヨーロッパではどこでも多少似たような事情らしく、筆者のスペイン人の友人は、子供が弁護士資格をとったがそれでも就職先がないと嘆いている(最近の報道では、詳しいことはわからないが、スペインの若者の失業率は50%に及ぶ由である)。

日本ではこのような差別に近い状況はあまり意識されないが、実態はこれに近い。就職の主流はとにかく新卒、一斉採用であり、これに紛れ込まないと生涯、宇宙間に漂う衛星のようなことになってしまう。勿論、海外留学して日本には帰らない、海外で活路を開くという「考え方」もある。しかし、アメリカの場合についていえば、これはほとんど不可能である。つまり、アメリカの「永住・就労ビザ」は極めて厳しい。一つのアドバイスとして留学を考える前に、このビザ制度を十分研究し、承知しておいたほうがよい。勿論、学生の間は、学生ビザがあり大学の証明により滞在できる(就労はできないことは当然)。博士号でも取って自分が優秀な人間であり専門家であることを示せば等と思うかもしれないが、この可能性もまずない。アメリカもポスト・ドク問題は深刻である。つまり、学生の身分が終わればアメリカを出なければならぬ。でなければ、ただちに不法移民の群れの中に入る。仮にアメリカの企業が何らかの専門性を認めてくれて、将来の永住を展望しつつ一定期間雇ってくれる(これをビザ・サポート・プログラムという)場合もあるかもしれないが、この場合雇われたほうは、やはり弱く、不安定な立場に立つことを覚悟しなければならぬ(どうしてもいわば生殺与奪の権を上司が握っていると言うような関係になる)、勿論、これでも将来の永住ビザの約束があるわけでもない。特に、この点は、自分は、一般労働者ではない専門知識を持った知的な人材であるはずだと考えやすい大学留学生がはまりやすい陥穽である。理論的に考えてもアメリカは留学生を育て上げるためにかなりの費用を使っているはずで、その結果優秀な専門家が育ったのなら、これを追い返さないで、アメリカで使う方が得なのではないかと言いたくなるが、それは所詮、書生論である。

このような事情の中でも一つ抜け道がある。それはビザ・ロタリー(くじ引き)である。アメリカ政府は、毎年これらのビザ取得希望の圧力を考慮し、永住ビザの「くじ引き」を実施する。たしか、年間4万人くらいと記憶するが、これは本当に日本

の宝くじみたいなもので、これに当たった人はビザなし時代の苦労を思い出し、まさに泣き笑いというところである。というような事情を反映して、実はビザ詐欺も多い。何とかうまく永住ビザをとってあげると甘言を弄して数百ドルを巻き上げる。わずかな希望からお金を払うと、あとは一切連絡不明となるというケースである。

ついでながら、日本の会社の事務所などで日本人の秘書を置いておきたいというよくあるケースも原則難しい。秘書のような仕事はアメリカ人でもできるはずであり、市場から採用するべきである、なぜ日本人でなければならないのかの説明を求められる。仮に認められても短期であり、定期的に移民局がやってきて日本人秘書が本当に必要か審査がある。これらのビザの事情は、9.11事件以後、さらに格段に厳しくなっていることも知っている必要がある。

尤も、抜け道がないわけでもなさそうである。なんとかアメリカに潜り込み(たとえば90日の短期観光ビザで)、その後は知人・親戚の家に潜り込み生きながらえて5年たてば(勿論この間は不法入国者で職もままならない)、實際上、既成事実として永住ビザが発給されるという途があるらしい。ということで、フィリッピンの知人がアメリカに渡って行った例もある(その後は知らない)。しかし、このように公然と説明し、いわば堂々とアメリカへ行くところを見ると、この途はそれほど危険でないのかもしれないと思う。あとは、アメリカ国籍を持つ人とのいわゆる結婚詐欺めいた道である。このように見えるケースもいくつか知っている。

もうすこし、一般的に考えると、アメリカには世界の人が行きたがっているという厳然たる事実を十分認識しなければならない。筆者は国際機関の関係で、いろいろな途上国、いわゆる後進国と言われる国の人たちと会ったが、その際、いずれはお金をためてアメリカに、せめて親戚のひとり位、あるいは、せめてこの優秀な息子は何とかアメリカにと思い、それを夢見て(ほとんどは果たせぬ夢であるが)暮らしている多数の人たちを見た(おそらく世界中で数億人は下らないのではないかと想像する)。アメリカにはこのように世界から人が、そしてそのいくらかは素晴らしい人材が、押し寄せる。ビザが厳しくなるのは当然であろう。

余談であるが、先日友人と話していたら、その友人がアメリカ入国審査の際かなり厳しくいろいろ聞かれたらしい。友人いわく――アメリカは何を考えているのか、そんなことならもう来てやらないゾーと思ったということであるが、これは思い間違いである。アメリカには上記のように頼まなくても人は来る。ビザの審査は厳しく、担当官には一定の権限がある。きちんと相手の目を見て、質問には明確に誠意をもって答えなければならない。先般の9.11事件の際、その後いろいろな調査が行われたが、それによると、まさに実行犯となる人の一人がビザ審査で不合格となりあわや水際で入国が阻止された例があるらしい。そのテレビ報道では、当該の入国審査官は、申請者の態度にアメリカへの愛が感じ取れなかったというような証言をしている。(アメリカ以外の国あるいは発展途上国への留学については詳しくないが、いずれにせよ軽々には考えず十分調べたほうがよい)。

仮に若いうち短期でも留学したいと言うならば、交換学生という道がある。これは海外の大学との単位、交換認定制度を使う方法である。これなら普通に日本の大学を卒業して、新卒・一斉採用の群れに紛れ込むことができる。勿論、交換であるから海外からも学生が大学で単位を取りに日本にもやってくるだろう。これにより海外の学生、将来の知識人候補者との交流も可能となり、実り多いともいえる。しかし、こういうことであれば、先日の日経新聞では、例えば早稲田大学は、すでにいくつかの海外の大学と提携して、この単位互換制度をすでにかなり前から実施しているとかで、なにも秋入学に変える理由もないと述べていた。このように考えるとこの秋入学というのはなにを意味するのか、首をかしげる大学もあるのは当然である。

もうひとつの道――それは日本の大学在学中にいわば「休学」のような形をとり、日本の大学に在籍のまま、どこか海外の大学で学位を取って日本へ帰ってくる方法がある。これなら、うまく日本の新卒・一斉就職の群れに紛れ込めるかもしれない。(従来の春入学の大学であるが、なにか奨学金プログラムに合格し、この形で2年ほど休学・海外留学をしたケースを知っている。この場合は帰国して新卒採用に入れたが、結果をみると、要するに2年遅れで入社したことと何ら変わりはない。新卒・一斉採用に入れた以上この扱いは当然であろう)。

秋入学となれば当然5.6月ごろに卒業期で、そのころ卒業生が新卒・一斉就職の中に出てくる。しかし、そのころには春入学を維持している大学の学生は就職を終えているはずだ。秋入学生はこの点不利になるのではないか。

東大によれば、秋入学はグローバルな人材の養成を狙うとも言われているので、とりあえず海外留学との関係を考えてみたが、一体何を狙うものなのかよく考えてみなければならない。成程、その検討に5年はかかると言うのもわからないではない。――続く

追記 最近の日経記事によると、最近、アメリカでも優秀な人材を確保するという観点からビザ制度の思い切った改革がおこなわれたと報じられている。これによると、大学学部での成績優秀者(その基準など詳細不明)については、卒業後滞在ビザが6年間延長されることとなったそうである。卒業後、この6年間の間に良い雇用先が見つかり、そのサポート(つまり上司の理解と温情)が得られれば、永住ビザ取得の途が開かれるかもしれない、その可能性が高まるということである。しかし、もし見つからなければ(仮に見つかっても永住ビザまでサポートしてもらえない結果となれば)、日本に帰国せざるを得ないことは十分承知しておかなければならない。そして日本に帰れば、就職説明会の会場はリクルートルックの大学卒業予定者(三年生)の群れであふれていることを十分承知していなければならない。

カテゴリー 未分類 [パーマリンク](#)

Gallery Aki Blog  
Proudly powered by WordPress.

## Gallery Aki Blog

ギャラリー安田のブログへようこそ！

## 秋入学 続き—学寮制

投稿日: 2012年5月28日 作成者: admin

神田の学士会館に立ち寄ってみると、各7大学の広報誌が置いてある。その中の東大内広報では、例の秋入学の「中間まとめ」を取り上げている。秋入学への変更は何をねらうのか？一言でいえば、「よりグローバルでよりタフ」な人材を養成するという目的のための一歩としたいということのようだ。このグローバル化を示す一つの指標として、学部段階での受け入れ留学生比率が、資料として提示されている。見ると東大の学部では、ほぼ2%弱のところ、アメリカをはじめとする海外の大学ではほぼ25%程度となっている(よくはわからないが東大も大学院となるとほぼこの25-6%を達しているようだ)。イメージとしては、要するに、大体、学部学生の4人に一人は外国からの留学生と言うようなイメージらしく、こうなればこれらの留学生との交流を通じて、多少はグローバルな考え方を肌で感じ、さらにこれらの留学生と切磋琢磨すればタフな人材が生まれてくるだろうというような期待が込められているらしい。この理想には全く共感する。

そこで、この目的のための一環として、ぜひ「学寮制度」の充実を望みたい。筆者の大学の経験では、クラス(講義)が終れば、学生はあっという間に散ってしまう。下宿に帰ればただ一人である。田舎出身の筆者には東京人との交流すらままならなかった。漱石の「三四郎」(高校時代のあこがれの小説)のようにうまく、たまたまだれかの先生のグループにでも入り込めれば話は違いかもかもしれないが、こういうことは小説でしかおこらない。今では、東大への進学有名高等学校とかがあり、かつての日比谷高等学校のように、おなじ高校出身グループ同士の交流があるのかもしれないが、かつての筆者のように田舎からのひとり上京生には東京人との交流すらままならず、そのうち学部の2年くらいはあっという間に過ぎてしまう。

留学生も含めた学寮制度の完備、充実はぜひ必要だが、これは、イギリスのケンブリッジやオックスフォードなどの学寮のイメージと重なる。これらについては経験がないので、あまり分らないが、BBC放送などの海外番組などを見ると、この学寮生の生活はまさにタフなものらしい。身の回りのことはすべて自分でこなすことは当然であるが、寮内での厳しい上下関係、ルーム・メイトとの関係、(ルームメイトが突然部屋につれてくる友人諸兄との関係)、それらの雑音に悩まされながらさらにクラブ活動をこなして、試験を乗り切っていく生活、—ある番組ではこれらの男子寮の生活を案内しながら、案内の学生が「男として生き抜くのは大変なのです」と述べるころがあるが、実感がわいてくる。東京の下宿から大学にかよう学生、いわんや母親の料理を食べながら自宅から「通学する」東大生では、まずは論外であり、およそタフにはなれない。多少、プログラムに参加したことがあるハーバードでも学寮は完備しており、そもそも、ボストンは東京からみれば小さな町で、そのかなりの部分は学生街と言う感じである。そしてこの学寮生活が何よりの思い出であり、精神的タフさを養成する。この点、話に聞かかつての旧高等学校の寮生活をも連想する。実際、かつての寮生活の精神的経験と、シュトルム・ウント・ドラング(疾風怒濤)と言われるようなややロマンチックな言葉が使われる練磨が、その後の日本の指導層に大きな影響を与えたという指摘もある(余談ながら、芥川龍之介はなにか特例制度を使い、第一高等学校には自宅から通ったそうであるが)。

ちょっと、話がそれるが、日本の高等学校卒業でアメリカの大学に応募すると、在学中の学費・生活のサポートをどうするか資金的な計画とそれを証明するような資料を求められる。この資料では、資金源のリストがまず掲載されているが、奨学金とかいろいろ項目があるが、当然ながら最初に「親から」と言う項目がある。この項目にチェックすると、次の質問は、二つに分かれている。贈与か借入かである。借入? ?と驚く—日本人の感覚からすると筆者も含めて、学費は親が出すと言いたくなるが、これは必ずしも主流ではなく、仮に親からとしても「借り入れる」つまり必ず返済するという形にして、学生つまり、子供からみて経済的な独立を明らかにする(なお、筆者が経験したこの例はアメリカの私立大学の場合)。学部の場合と異なるが、筆者がハーバード・ビジネススクールのちょっとしたプログラムに参加したとき、まさにハーバード・ビジネススクール(大学院)に在籍している男子の学生と、たまたまバスの中で同席し、いろいろ話し合ったことがある。ここで聞いて多少驚いたが、ハーバードのビジネススクール在籍者は、そのほとんどが今の会社を辞め、次のステップアップとキャリア・デベロップメントを求めており、結果としてほぼ7-8万ドルの借金を抱えているとか(ビジネススクールの授業料だけでもかなり高くてぶん5万ドルはかかる)。ゆえに、彼いわく、必死である、よい成績で自分の能力を示し

たい、これがとりあえず借金を返す唯一の途である、眼の色が違う—ということで激励とともに別れた。そう言われると日本の会社から派遣されている学生(これはハーバード大学ビジネススクールとしては大歓迎である。授業料のとりはぐれは勿論ないし、卒業後の難しい就職のガイダンスも不要である。これほどおいしいお客はない)の立場は、基本的に違う(勿論、彼・彼女らも、もし落第しては恥だからそれなりに頑張っているようだが、眼の色となると、やはり違ってくる)。これは大学院の話で、学部学生とは異なるが—学費は親から出してもらい、お母さんの料理を食べ、自宅から通ってくる東大生と言うイメージはどうもタフとは思えない。

尤も、現実にと考えると、なかなか難しい問題が当然予想される。土地の問題などを別にしても、なにより東京と言う街はあまりに魅力的である。講義、クラスを終えると、学生はあっという間に消えてしまう—新宿へ、渋谷へ、代々木へ、と行くところはいくらでもあり、実に多様な活動が現に行われており、行くところに事欠かない。実際、筆者の経験でも入学式では会ったが、その後クラスでは見たことがないという人がたくさんいる。それでも卒業できるところが不思議であるが、ある意味では彼らのほうがグローバルでタフ(いろいろな人との経験を広げたのではないかと考えると)になったかもしれない。逆にいえば日本を目指してくる留学生は、この東京の活動に惹かれてくるのであって、果たして大学に惹かれたかどうか、つまり、学寮のなかに閉じこもって頑張るかどうか疑問である。要するに東大は東京の魅力以上に大学の魅力を出せるか？

ところで、この海外からの留学生の比率を高め大学のグローバル化を図るため、東大での英語の授業の割合を増やすことも論じられている(先般の日経5・24の記事)。しかし、日本を目指し、日本に留学してきた人たちは(ビジネス・スクールのような大学院系は別として)英語の講義を聴くだろうか。英語で講義が行われることを期待するだろうか。日本を目指した以上日本語を勉強し、日本の文化に触れ、習得することが中心となるはずだ。このように考えると日本の学部には海外からの留学生が少ないのは、当然ともいえる。日本の学問・文化の吸引力が問題のはずである。この点ヨーロッパ、たとえばドイツなど(フランスは言うまでもないとして)はどうなのだろうか。ドイツの大学に留学(学部)して、英語でおこなわれる講義をきいて単位をとると言うようなことが行われ、また、それがドイツの大学への留学の魅力を増しているのだろうか(この点、「中間まとめ」はあまりヨーロッパとの比較をしていないのは不思議である)。

なお、前回、秋入学に関して海外留学の否定的な側面を書いておいた。そこで指摘したように、学生時代に留学するならば、交換学生方式か、なにか「休学」の形をとり、戻ってきてからうまく日本の新卒・一斉採用の群れに紛れ込む方法を推奨したが、「中間まとめ」の「注」によると、「休学」は、今の東大(文科省の規定によるとのことであるので国立大学全体か)では、病気などの特別な理由以外認められない取り扱いの由である。ただし、中間報告でも、この休学制度の弾力化を進めるべきと指摘している。当然であろう。

秋入学にはたしかに考えさせられることが多い。—続く

カテゴリ: 未分類 [パーマリンク](#)

Gallery Aki Blog  
Proudly powered by WordPress.

## Gallery Aki Blog

ギャラリー安樹のブログへようこそ！

## 秋入学 続き—入学試験

投稿日: 2012年5月29日 作成者: admin

よりグローバルでよりタフ(東大校内広報 中間まとめ)な学生を作り出すために、学部段階で海外への留学生を増やすとともに東大への海外からの留学生を増大させる。このようなグローバルな環境、競争の中からよりタフな学生・人材が育つだろう—これが秋入学を一つのステップとする将来の東大像だ。

海外留学については、帰国後、うまく年功序列のシステムにもとづく日本の新卒・一斉採用に入れる工夫をするとして(いわゆる年功序列制度は確かに変わりつつあるが、これについては慎重にビジネス界の動きを見守るべきである。実はこの年功序列制度の変革は容易ではない)、次は、逆方向つまり海外からの留学生の受け入れである。これについては、勿論、交換留学あるいは単位相互認定制などの方法があるが、これならば現在でもかなり活発に行われているようであるし、早稲田大学の学長が先日の日経の記事で書いていた通り、このためにいまさら秋入学に変える理由はない。やはり、この流入の方を本格的に推進するとすれば、東大への入試を突破してくる留学生の受け入れの増加が必要である。これでは、本来の秋入学制度の意味を持たない。しかし、現実的に考えて、現在の東大の入試を突破してくる留学生はいらぬだろうか。英語(外国語)はかなり良い成績を出すとしても、国語・古文、日本史、世界史、物理、化学、数学Ⅰ・Ⅱを日本語で一次・二次と突破してくるとは思えないし、それほど日本に向かって頑張る理由もなさそうだ。しかし、「まとめ報告」によると、現在も、ある程度東大に海外からの留学生がいるそうであるから、そのいくらかというより主流は、現在の入試を突破してきたとすれば感心せざるを得ない(それほどまでして、日本の東大への留学を果たしたことはたしかに敬意に値する)。しかし、このような特別の志の学生がそれほどいないとすれば、そしてそれが、現在、学部に留学生が少ない原因であるとすれば、やはり秋入学への変更の意味を持たせるには、どうしても入試制度を考え直してみる必要がある。

そこで振り返って海外の大学の入学試験はどのようなのだろうか(つまりこちらから出かける方)。日本の高等学校を卒業後、アメリカ・ワシントンDCの私立大学へ入学した例を知っているが、このとき求められたものは、第一に高等学校からの成績証明書(英文による。実際、卒業した高等学校の校長印による証明書をもらったが、封書であったので何が書いてあったかは不明)、第二に英語の能力検定書。トッフェルの成績をもとめられたが、トッフェルのテストは、年に何回か開かれており、確か2回受けて、良いほうを提出する。第三に、なぜ海外留学を希望するかなどを中心とした簡単な英文のエッセイ(シングル・スペースでレターペーパー4-5枚の簡単なものである)。加えて、学費を支払えることを証明する資料であるが、これについては前回の秋入学で触れたので省略する。5月ごろ資料を提出すると8月には学部長のサイン入りで入学許可書が届く。そこでその年の9月の秋入学となる。要するに、日本の入試のような学カテストはなかった。

考えてみると、アメリカの私立大学では、入学者についてのアジア人枠のようなものがあり、要するに、この例は、このような大学の方針(大学の多様性)によるAO方式だったのかもしれない。州立などの場合は違うかもしれないし、またアメリカには大学入学についてSAT(大学進学適性試験)がある。しかし、やはり日本の共通一次、つづいて二次試験と言うような学カテスト中心のやり方とはかなり違うようだ。たまたま、マイケル・サンデルの本を読んでいると、「(「これからの正義の話しよう」)7章 早川書房)、ハーバード大学がある裁判に関連して提出した資料には、ハーバード大学では「成績とテストの点数のみが入学選考の基準だったことは一度もない」と書かれているようであり、そのあとにハーバード大学による文書として、「もし学業成績だけが唯一の、あるいは主要な尺度なら、ハーバード・カレッジの活力と知的卓越性は著しく損なわれることになる——。学生が経験する教育の質も低下するはずだ」と書かれていることが引用されている。アメリカの大学入学試験が全体としてどのような姿なのかは分からないが、少なくともハーバード・カレッジが、ここまで書いているとすると(——学業成績は主要な尺度でもない——)やはり基本的にアメリカの大学の入試は、日本のいわゆる学カテストとはかなり違うのではないかと思う。東大はこれにどう答えるのだろうか。それとも、すでに現在の在学留学生の一部はこのような東大のAO方式により入学したのだろうか。

このように考えると当然ながら現在の入試方式に疑問を感じる。東大が海外からの留学生を呼び込み、それこそ大学の文化に多様性をもたらそうとするならば、入学試験の見直しを避けて通れない。今回の秋入学の議論をきっかけに、あき



らかに大学教育に関する議論が活発になってきているが、先日の日経(2012年4月24日) 春秋欄 で入学試験制度に触れ「客観基準は万能ではない。試験の点数や高等学校の成績表は、生徒の一部を示すに過ぎない」と述べているのには多少驚いた。このような論調がすでに現れてきているのだ。

現在の大学の難易度は偏差値としてインターネットで簡単に見ることができる。これを見ると、東大(医学部)一見事に単独でトップにある。しかし、このようなピラミッドの頂点にたつことが本当に必要だろうか。学力は勿論必要だ。しかし、それはすくなくとも一定の水準は求められるということであり、であるとすればたとえば学力の指標は「台形型」で十分だ。どの道おそるべき英才、神童は出てくる(そして、これがそのまま革新的知的なリーダーになるわけでもないようだが)。これからの日本の抱える課題の多様さを考えるとむしろ多様な才能が必要だ。今の入学試験ではとうてい対応できないことは明らかである。いろいろな才能をとりこむという観点からは、よくいわれるようにストレートに短期にという考え方も不思議な考え方である。筆者は国際機関で働いた経験でさまざまな国からきた専門職の人たちと働いた経験があるが、いずれも優秀であるが、いろいろ話してみると一般的に、要するに驚くべきタフさである。高校時代は金がない、あるいは自立のためウエイター・ウエイレスとして働く(聞いているとこのアルバイトもなかなか重労働である)。なにか北洋漁業船(艦橋やレーンに氷がはりつきこれがある限度を過ぎると船はただちに転覆する。この氷を徹夜でたたき落とす仕事とか)で働き(実入りは良かったらしい)そして金をためて、結局、一流大学を突破してくる話など。現役、ストレート入学などと言うような言葉がそもそも意味をなさない。今後このような世界中にいるタフな連中とどのように戦っていくのか。これは、そもそもビジネス界に入る出口・就職の時点で、入学年次というようなことが重きをなさないこととつながっている。

秋入学で日本への留学生を増やしたいという狙いのためには、どうしても入学試験制度の変革が必要だ。そして、その議論が始まっていることを歓迎する。

カテゴリ 未分類 パーマリンク

Gallery Aki Blog

Proudly powered by WordPress.

## Gallery Aki Blog

ギャラリー・安田のブログへようこそ！

## 大人になる

投稿日: 2012年6月12日 作成者: admin

先日の日経に、興味あるエッセイが出ている(「結婚しても、子供ができて、人は大人になるわけではない」鎌田敏夫脚本家)。要するに大人になるということは、「自分の論理で考え」、自分で計画し、決断して生きていくことができるということのはずだ。という観点からみると、日本人は、自分の論理で考えたこともなく、むしろ組織の論理で考える。つまり、言われるままに勉強に励み、すすめられるままに結婚し、そして結果として子供ができて家族ができて、これで大人になったわけではない、という趣旨をのべている。対比して、ピストルで自衛することを辞さないアメリカ人の(女性が乳房の間に隠しもつピストルのホルスターが売れたという話もでてくる)例を挙げ、結局、日本人は大人にならないまま人生を終える。なにか、不祥事が起きて、誠に申し訳ないと謝るときも、決まって何人かの「複数」で一斉に頭を下げる姿も、責任が組織によってとられることを示している。こうして、組織に守られて生きていけるのは、脚本家のように全てを一人で決めなければならない立場と比べると、幸せなことだと結んでいる。

これを読んでいると考えさせられる。確かに、国際機関などでも、要するに「外人連中」は、なにかそれぞれ輪郭がはっきりしている。基本的によくしゃべり、何事にもつねに意見を持っていて、それを表明するにはばからぬ。と同時にこのような議論にも、なにか一定のルールと言うかマナーがあり、あまり一人が教条的・独断的にならないし、そのような態度は好まれない。反対意見もでてにぎやかである。これは、いわゆる専業主婦と思われるような女性についても同じようで、時に驚かされる。あるパーティで、要するに家庭の「主婦」に、あなたの勤務する国際機関が当面する最大の課題は何か一などと聞かれて戸惑ったことがある。論じるだけでなく、結構ボランティアなど出かけていき、またその経験が話題になる。そもそも、日本の場合(会社は自ら選ぶとしても、一旦はいると)転職も展望したキャリア・デベロップメントの意識が希薄である。ほとんどが、人事部の言われるままに異動・転動してきたというのが実態であろう。こういう基準からみると、筆者も含め日本人は、いつ大人になるのかと聞かれるとたしかに戸惑いを覚える。

ということで、このエッセイについて考えたが、疑問もある。筆者のサラリーマン時代も含めて振り返ってみると、日本人が大人になるとは、まずは何よりも長幼の序を確実に、かつ、瞬時に理解する能力を持つことである。日本の社会で——ビジネスを含めて——大人と言われるためには、だれが自分の先輩であり、自分はその場の中でどの位置にくるのかを判断、しかも、状況はいろいろ変わるので、その変化に応じて、ただちに判断しなければならない。このような判断により、その人のしゃべり「言葉の使い方」(勿論、体の姿勢)も変わってくるはずだ。これが正確にできないようでは、まず日本の大人失格である。日本のビジネス界では、ふつうあまり名前では呼ばないので、どうしても、相手を肩書で呼ぶことになるが、これがなかなかの難物である。身近の人は間違えないとしても、ちょっと離れた人など、——いまは部長だっけ、先日上席がついたのだっけ——たしかこの先輩は先日、専務理事になったはずだ——いや筆頭理事だったっけ——これは、勿論、瞬時に判断できなければならない。こういうことを間違えると日本では大人と認められない。である以上、日ごろから、このような変化や情報には常に気をくばっていなければならない。要するに、年に関係なく「生意気な奴」と思われると、とにかく厄介なことになる。しかし、この「生意気」と言うのか必ずしも定義がはっきりしないのが、そもそも悩みの種である(これを、英語で訳すと何と言うのかなどと時どき考える)。

勿論、以上のようなことは微妙で、常に変化し、要するに「空気」のようなものである。ということは空気が読めないようでは、日本では一人前の大人にはなれない。最近若い人たちの間でも、KYとか言って冗談半分に空気が読めないなどと言うようであるが、実際、これは冗談ではない。KYでは大人ではないのだ。

責任も複雑である。以前NHKの職員がなにか不祥事を起こしたとかで、NHKの会長がわびる場面があった。これはよくあることで——すこし違うが、生徒が学校を離れた校外で起こした事件や遭遇した被害などについても、校長や先生がお詫びする場面が多い——小学生が学外での水泳中におこした事故のため全て海での水泳は禁止、親同伴に限ることになっているような例もある——。要するに、やったのはお前だからお前が行って頭を下げろとは言わない。どういうわけか組織の長が頭を下げる。筆者はこのような状況・責任の在り方がある本で「一般監督責任」と書いたことがあるが、このように不思議な責任を取るようであれば組織の長とはなれない。それが、日本で大人になるということである。ということでも

分かるとおり、うまく書けないし定義もできない世界で生き抜くこと——つまり、日本で大人になるということは実は簡単なことではない。とすると、前記、エッセイの脚本家に、それほどうらやましがられることもなかろうと、筆者は考える。

ついでながら、職場で「あの人は帰国子女」などと言われて暮らしていくのはなかなか大変である。高等学校を卒業後アメリカで大学を終え、大学院レベルを卒業して、日本に帰国、就職した例を知っている。就職して半年ほどで上司と大変なトラブルになったらしい。殴りつけられるとでもいうような感じだったらしいが、どういうことだったのか、何が原因か。当人も話を聞いたことがあるが、あまり言いたがらないようであるし、はっきりしない。そもそも、当人も何が何だかわからないという感じで要領を得ないが、なにか、仕事のやり方について上司に進言したというようなことがあったらしい。実はまだ、いわゆる研修期間中だったらしく、要するに、「生意気な奴」と思われたのであろうと推察した。筆者も多少経験があるが、予想外の誤解や思わぬ嘲笑を受けることがあるので、要注意である。

これらは、要するに大人になるということの定義の違いであり、文化の違いであると思えば別にどちらが良いともいえぬ。しかし、と考えるが、かつて国際機関で勤務していたころ(アジア人のあいだでは別にして)、何かの雑談で、「おまえはarranged marriageか」と一度ならず聞かれるのには閉口した。こちらは、arranged marriageと言う訳し方は誤解である。訳すなら arranged meeting/partyと言うべきである。決めるかどうかは「両性の合意」に基づく、というような説明をしきりとした。彼らは一体何を言いたい、聞きたかったのか——上記エッセイを読んでから振り返ると、これは要するに「おまえは大人か」と聞かれていたのか——と理解すると多少愕然とする。これから日本人が、いろいろな国の人から理解を得ていかなければならないとすると、この問題は単なる定義の差、文化の差として済ますわけにもいかない。

相手が理解すべきなのか、日本が変わるべきなのか。と考えるとジョン・スチュアート・ミルの「自由論」(1859年、安政の大獄の年、に発表されたことになっている)を思い出さざるを得ない。第3章「幸福の追求としての個性」——意見の違いは有害ではなく、利益である——(光文社文庫 山岡洋一訳 p.128)。これが日本人でない「彼ら」の長い伝統を経た精神的な基盤なのか。上記エッセイを読みながら以上のようなことを考えた。

カテゴリー 未分類 パーマリンク

Gallery Aki Blog

Proudly powered by WordPress.

Gallery Aki Blog

キャラクター安物のブログへようこそ！

させていただく

投稿日: 2012年6月18日 作成者: admin

最近 ビジネスモデルを論じる本を読んだ。一つの製品があるコンセプトのもとに開発され、そのコンセプトが市場の好みと合致した時には爆発的に売れる。ところが、このコンセプトが正しいとばかり、これをむやみに追求していくとやがて一種の技術(あるいはコンセプト)過剰となり、最先端を行っているつもりが意外と商品のガラパゴス化をまねき売れ行きは低迷する。代わって新しいコンセプトの商品が出てくる。要するに、なぜ一つの商品が売れやがて衰退し次の商品が台頭してくるのか、このような問題に関する事実関係と、理論的な分析が続き興味深く読んだ――が、どういうわけか、それぞれポイントとなる各節の最後の文章が、必ずと言っていいほど「――と言うことではなからうか？」で結ばれている。これには困惑した。なるほど、なるほどと読んでいくと最後のところで「――ではなからうか？」となる。勿論、このような書き方については、一つには文章の綾というものがある。この方が、なにかへりくだった印象で、謙虚な筆者の人格が感じられ好感されるだろうと考えることは、文章を書く人間として確かに理解できる。また、もっと額面通り受け止めれば「――ではなからうか？」と結ぶことにより読者に考えさせているのだ、このように敢えて読者に考えさせるということは望ましいことだ、という理解もできる。しかし、やはり、実際に読んでいろいろ議論をたどったあと、「――ではなからうか？」と言われると突にがっかりする。

先般、テレビである教育問題について教育問題評論家(実際に現場の校長も経験している)が取材に応じて意見を述べていた。経験談も交えながら持論を展開していて興味深かったが、色々意見を述べた後、最後に「――ひょっとするとそういうことかもしれませんよ。」――と言ったのには驚きかたがっかりした。やはり、「――かも知れませんが」といわれても聞いているほうが困る。これもやはりあまり自説を強く出さないと、へりくだった一つの作法と言うことであろうと考えても困惑することには変わりはない。

これには一つには日本人の文章作法というかわゆる文化的な背景があるらしい。以前、文芸春秋を読んでいた時の対談記事で、次のような指摘があったことを思い出す。つまり、日本の文化的なバックグラウンドを前提にすると、普通、日本では、This is a book. とは言わない。つまり、ふつう、日本では「これは本ですネ」という。これが日本人の文章・言葉の綾であり一つの作法であるというわけだ。つまり、場合によっては(これはその場の空気による)、あるいはあなたが同意しないのであれば、本ではなく別のものであるということにしてもよい、という含みがある。

先日、夕食会である会社の社長とちょっと雑談する機会があった。社長の話―先日社内の意見つまり社員の意見を聞きたいと考え、社内広報誌を通じて意見の提出を求めた。広報室がまとめてきた原稿を読んでなんとなく釈然としなかった。というのは、いたるところ、文章の中に「――と思う。」と出てくる。「―と思う。」ではこちらは何とも言えない。そうですかと言うことで終わってしまう気がする。そこで、広報課に、一度試しに、これらの文章から「――と思う。」というところを全部削ってみてくれと注文を付けたそうである。確かに、―と思うでは、そこで思考は止まってしまふ。そう思ったのだからその通りである。しかし、仮に、ここで「――だ。」と書くことになるとかなり筆は重くなる。――だ、と書こうとすると、当然、そうではないのではないか、つまり反対意見の存在が、すくなくともその可能性が、頭に浮かんでくる。とすると、それに対するこちらの考えも一応は用意しておかなければならない。と言うような思考が働く。当然筆は重くなる。

余談ながら、以上の問題は、実は学生の論文指導などでも時に経験する。大学でのアカデミックな論文では、まず事実認定があり、理論の構築があり、最後に自分の推論と結論(――と思う部分)が来る。このとき気をつけないといけないのは、この三つが、いつたりきたり混乱することである。事実関係を述べているのか、自分の推論を述べているのか、混乱している。そこで、この関係が分かりやすいように、論文の文章を、このような事実―理論―推論のパーツに応じて色分けすることを指導した記憶がある(これがうまく行っていれば論文は赤から黄色になり最後は青くなるはずだ)。さらに加えて、この理論の部分は、天から降ってくるように独立していなければならない。間違えて事実認定から引き延ばした理論をつかうと、その理論検証のためにまたおなじ事実を使うといういわゆる循環論法に陥る。勿論、――と思う、では論文にはならない。会社の広報誌などの場合、学術論文ではないので、事情はかなり違うとは思いますが、――と思う、と書いたとたんに筆は軽くなることには十分気をつけなくてはならない。上記、社長がなにか意見が気楽過ぎると感じたのも無理はない。

と言う風に考えると、どうしても指摘しておきたいのは、あの「—させていただく」である。いったいつからこんなことになったのかわからないが、テレビでもコメントでも、—させていただくの氾濫である。「法案を提出させていただいた」「説明させていただいた」—体誰にさせていただくのか。以前ある政府独立委員会が「—告発させていただいた」と言ったのには本当に驚いた。この調子では 警察が犯人を逮捕させていただいたなどと言いだすのではないかというような冗談も浮かんでくる。これを英語で言うと言のどのだろうか考える。まず、if you please と言うことかと思うが、辞書などによると、これはやや皮肉を込めた意味合いがあるようでどうも違う。さらには Let me say —という表現も浮かんでくるが、少し語感が違う。最近では、総理も—させていただくの連発である。総理の場合は主権者にさせていただくという意味と思うが、しかし、リーダーになった以上。たとえば、—を提出・提案する、と言いきってもらいたいものだ。これは、政治的な場面にかぎらず一日テレビを聞いていると、対談・コメントと何度この—させていただくを聞くことか。このさせていただく、がなくなれば、なにか言論がすっきりするという気がしてならない。

勿論、ではないでしょうか、や、—と思う、させていただくは、日本のように人間関係が濃厚な(中根千枝氏の論によれば「場」の論理が強い)社会においては、必要な作法であり、むしろこれにより議論の場をスムーズにしている(そういえば筆者も使うことがあることは否めないし、むしろこれが適切な表現である場合もある)。別にそれほどあげつらうこともないともいえるが、やはり、一度、この—させていただく、を消したところで意見を聞いてみたい。

カテゴリー: 未分類 [パーマリンク](#)

Gallery Aki Blog

Proudly powered by [WordPress](#).

## Gallery Aki Blog

ギャラリー・アキのブログへようこそ！

## ポピュリズムと経済学

投稿日: 2012年6月26日 作成者: admin

今回の震災後4か月ほどたったところで、不思議なテレビ番組(民放)を見た。まず、画面に「震災後のがれき処理 3割」、「日本赤十字社に集まった寄付金の配布率 2割」、とでる。そこへ、某私立大学の教授と言う人が現れて、「震災のがれき処理は進んでいますか?」という。そうすると、学生役らしい男の子、女の子のいわゆるタレントたちが一斉に「進んでいない! ワー!」と叫ぶ。おなじく、「寄付金の配分は進んでいますか?」と当の教授が叫ぶと「進んでいない!」「ワー!」となる。しかし、これはおかしい。進んでいる進んでいないは、比較のはずだ。とすると、進んでいるかいないかを判断・語るには、なにか比較の基準が必要だ。一人で歩いていたら早いか遅いかわからないことと同じである。東北大震災後ほぼ4カ月くらいたったら、がれきの処理や寄付金の交付などはここまで行くべきであるという「基準」がないと語れない。かりに「進捗率」ではなくて「絶対量」を想像してみると、東北全域の膨大ながれきとなるはずだから4カ月で30%ならば「絶対量」としてはものすごい量のがれきが動いたともいえる。仮に淡路・阪神大震災の際のがれき処理の進捗率について、なにかデータを持っていて、これと比較したとも考えられるが、番組にはそこはなんなら述べられておらず(教授はそのようなデータを示さなかった)、仮ににそのようなデータを持っていたとしても、これを東北大震災(放射能の影響も別問題として出てくる)にそのまま適用するわけにもいかない。と考えるとこの「ー遅れている。ワー!」と言うのは何なのか。ポピュリズムである。ワー!と言って時の政府、管政権を批判する。

ポプリズムと民主主義とは深いつながりがある、と同時に厄介な問題でもある。何しろ民主主義は票の多い方が勝つという仕組みだから、当然ワーと人気が出ることと切り離せない。例えば社会に必要な改革や長期的に避けられない政策を訴えても、人気があれば何ともできないし、このような政策は大体において人気がない。

ポピュリズムと言えば南米の政治がよく引き合いに出される。マドンナが演じる「エビータ」という映画がある。ミュージカルのような構成であるが、時のペロン大統領が衆衆、労働者の前で演説中、ぱっと上着を脱ぎ捨て、シャツ姿になる。ワーとくる。ポピュリズムの始まりである。エビータ(マドンナ)が走る汽車の窓からお札をばらまく場面も出てくる。要するに、民主主義はいかにして人気投票を乗り越えられるか?(もっとも、ポピュリズムでばらまいても受け取った相手が、投票に来るかという問題はある。友人で選挙に出た人が嘆いていたが、要するに受けとったまま知らん顔して出てこないという問題があるそうだ。ポピュリズムも楽ではない)。

というように考えていたら、先日の日経のコラムでポピュリズムを論じていた。いかにこれを乗り越えるか? 要するに一般大衆がアカデミックなバックグラウンドを広げることだ。勿論、アカデミックな学問がそのまま答えを与えてくれることはない(これは全くないと言ってよい)が、少なくともこの「ワー!」を防げる。このコラムによると、民主党の政調会代理の仙石由人氏が、政治家について、もっと「政治学」や「経済学」「歴史学」を身につけるべきだ述べているそうで興味深い。政治家のみならず、要するに一般の人がもっと「概念化」の訓練を受け、これが常識化することが望まれる。

先日ある講演会で聞いていたら、いまはものすごい円高であると述べている。しかし、よく聞いていると、これは過去のある時点の円ドルレートを正常値、均衡値として比較した話である。その時点がなぜ均衡値なのか、説明はなかった。比較の時点を変えるといまは円安かもしれない。

あるレストランで食事をしていたら後ろの席でどうやらサラリーマンの2人連れがしきりと話をしている。なにか、キャッシュカードみたいなものの発行枚数のことらしい。何しろ4000万枚ですよ! これはすごい、としきりに感激にふけている。これはサラリーマンのお昼の雑談であるから別に気にするほどのものではないが、しかしと思う。4000万枚というが、これは1億枚よりは少ないだろう。多いか、少ないかそんなに情緒的にならないほうがよい。なにか、母数でも考えて比率でも出してみたら、もっとわかりやすいのではないか。

先般ある政治家の講演パーティに出た。演壇に立ったある論者は、日本の財政はまさに危機的であると力説すると、次の人が日本の財政にそのような問題はない。まだ財政政策を追加する余地はある。「そう思う人手を挙げて!」というわけで

会場は混乱の雰囲気、参加者はグラスを持って困惑顔——という状況を見た。これもフロートとストックの議論を分けると少し整理ができる。歳出、税収というフローで考えると日本の財政は恐るべき状態である。国債による借入れが税収より多いとは！しかし、バランスシートでストックを見ると、姿は変わってくる。国全体では資産超過の数字もある。(日銀資金循環統計)。ちなみに(この議論と直接関係はないが)、資産のうち外貨建てに限れば日本は外貨資産超過国になる。

今の日本の国債発行残高からすると、今の日本の赤ん坊は生まれた瞬間に約700万円の借金を抱えている、というキャンペーンがある。これもポピュリズムである。借りた方があるなら貸した方もあるはずである。今のところ日本の国債を日本人以外が持っている割合は少ないとされているので、これは日本の赤ん坊は生まれたときから700万円の金融資産(まず取りはぐれはない)を持っているともいえる(以前は国債残高に相当する1万円札を積み上げると富士山に達するなどという説明も使われたが、これはなんの意味もなさず冗談にもならない)。

かつてプラザ合意のころ、竹下蔵相(首相)から、——円高円高と言うがいったいつになったら円が500円になるのかね、というような会話が政治家の間で行われたものだ。その程度だったのですよーと言う話(多分冗談)をよく聞かされたされた。いまや変動相場制が当たり前になり、その意味では日本人もひろく市場にさらされるようになり、いわゆる普通の人たちの会話も経済学的になったと思うが、たしかに上記の仙石氏が述べるように、少なくとも経済学の基本的な考え方に、いわゆる一般の人(筆者も含めて)が、よりなじみを持つことが民主主義のために、要するにワーとならないために望ましい。

最近、海外留学を終えて帰ってきた人の経験談を含めた本を読んだが、一つ面白い指摘があった。アメリカ人一般の基本的学問的な素養は経済学であるという。この点(筆者も含めて)法律学が基本素養となっている日本とはすこし事情が違うようだ。トクビル(「アメリカのデモクラシー」岩波文庫 上・下 松本礼二訳)を含めて、アメリカのデモクラシーが一体何によって支えられているのかという問いは繰り返し論じられているが、一つには一般的なひろく普及している経済学の素養であるとする見方は興味深い。

カテゴリー: 未分類 [パーマリンク](#)

Gallery Aki Blog  
Proudly powered by WordPress.

## Gallery Aki Blog

ギャラリーアキのブログへようこそ！

## 日曜日ののど自慢大会

投稿日: 2012年7月17日 作成者: admin

日曜日正午ののど自慢大会は楽しみの一つである。歌のほうは勿論であるが、それぞれ各地域の名物、雰囲気なども伝わってくるところが面白い。かつてハワイでこののど自慢大会が開かれたことがあるが、いわゆる日系アメリカ人と日本人との微妙な違い(姿勢、態度、言葉づかい)も興味深かった。しかし、なんとといっても、歌の優劣で、聞いていてこれは駄目だというのあれば、これはいいじゃないかと思うと金2つとなる。歌のジャンルが、いわゆる歌謡曲から、ポップス、さらには邦楽まであるので、勿論、こちらもよくはわからない。しかし、分からないなりに勝手に評価を下す。これが楽しみである。これはいいと思うのに鐘はならない。アレ！と思う人が合格の鐘を鳴らす。このような経験は、たぶんこのNHKの番組を見た人は誰でも経験するに違いない。とするとこのとき不思議な感情が湧いてくる。この鐘、つまり審査はだれがやっているのか？もう少し厳密に言えば審査の基準はどうなっているのか、その合理性、客観性、中立性は？という疑問である。鐘は秋山さんと紹介されるので、一つの考え方は、秋山さんが決めているとも思うが、秋山さんは見たところイヤフォンをしており、実はこれを通じて指示が来る、つまり、この指示に従って鐘をたたきただけという説もある。

世界にはいろんな審査会がある。しかし、この審査の基準、少なくとも審査員が公表されていないというのは実に珍しい。筆者は毎年必ずと言ってよいほど定期的に(たまたま毎年年末であるが)上野で開かれるリヒャルト・シュトラウス記念のドイツリート選考会を傍聴する。これには必ず審査員が公表され、同席し(中央の最も音の良い場所にすわる)、観客からも見える。名前は公表されている。この点、紅白歌合戦はどういうわけか審査員が公開される。海外の番組を含めて色々な審査会があるが、この審査員が「見えない」と言うのはお目にかからない。審査員は、大体中央の聞きやすいところに位置し、少なくとも見える(場合によっては名前の発表もある)と言うのが国際的なスタンダードである。勿論、このような芸術関係は、全く中立・客観的に優劣を決めることは不可能に近い。が、それだからこそ、少なくとも誰が審査しているか(と言うことは判定の責任者と言うことになるが)はあらかじめ明らかにされる。仮に、こののど自慢に「外人」が入り込んだらどうなるのかなどとも考える。

このように考えをめぐらすと、このNHKののど自慢が不思議で仕方がない。なんとなくこれでおさまり誰も文句をつけない(訴訟・係争になったとも聞かない)。これで丸く収まり、みんな和やかであると言うことが不思議である。と言うようなことについて疑問を感じる人がほかにもいると見えて、NHKのホームページにQ&Aがある。これによると専門家である5-6人の審査員は別の部屋にいてモニターで審査し、鐘の数を伝えてくることになっているとか。しかし、別の部屋にいる必要はないし、モニターで見るといっても理解しにくい。会場の一番前にメモか何かを持って座っていればよい。少なくとも名前は毎週公表されてよい。

何事もだれか専門家が適宜うまく公平にやってくれているはずだ—それで安心と言う時代は終わったのだ。日本は変わらなければならない！NHKののど自慢の「見える化」を、透明性を！

年6場所の相撲を見るのは楽しみである。何しろ150キロにちかい巨体が猛烈な勢いで激突する(なにか立ち会いのときかなりテレビから離れていてもゴツンというような音が聞こえてくるが、あれは頭がぶつかる音だそうである)のであるから驚くべきスポーツである。年6場所と言うのもいかにも苛酷で、これでは怪我の治る暇もないように思う。結果としてお互いの星のつぶしあいはずさまじい。となるとここで一つ疑問が出てくる。毎回の「取り組み」は誰が決めるのか。何かパイアスはないのか。勿論、「番付」のほうは場所が終わるたびに委員会が開催されて発表される(これについては相撲協会のHPを見ると説明がある。当然、限られた場所・人数であるので番付が必ずしも完全に客観的な物とはなりえないことも説明されている)。問題は、毎日の「取り組み」である。なぜ、豊ノ島が初日に白鳳と当たるのかという疑問である。だれが決めているのか。少なくともその名前は公表されてしかるべきではないか。

かなり前であるが、この取り組みを決める場面がTVで放映されたことがある。なにか、畳の部屋のようなところに瘦せた感じのかなり年の人が胡坐をかきように座っている。その前に、畳のへりに沿うように、力士の名前がずらりと並んでいる。すると、その年配の人がサット、ほとんど眼にもとまらない速さで、その下に取り組み相手を張り付けていく。それを何



人かの人か首を伸ばすように見ているが、ほとんど何も言わない。これら専門家の間では取り組みの興味・関心・人気のポイント(あすはこの取り組みが見たい)、過去の取り組みの実績などを熟知しているようであり、公平性も踏まえてほとんど瞬時に明日の取り組みが決めていく—と言うような様子が見られる珍しいシーンだった。しかし、これは一体誰なのか。このような事が、場所の間、毎日どこかで誰かによって行われているのだ。相撲協会のHPが「番付け」について述べるように、完全に中立性や客観性が保証されることは難しいということは理解するとしても、少なくとも誰が決めているのかは知りたいし、公表されてもよいはずだ。たぶん相撲協会のしかるべき委員会が決めていると思うが、そのメンバーは？委員長つまり責任者は？以前に見た新聞の報道によると、この「取り組み」の分析をした人(外国の学者)がいるそうで、やはりある種のバイアスが算出された由。

相撲の世界も国際化が進んでいる。明日の取り組みを誰が決めているのか。相撲の「取り組み」決定プロセスの「透明化」を！

不思議な経験と言えもう一つ。総選挙が始まるとどう言うわけか渋谷で街頭演説の熱演が行われる。これが不思議なのである。このとき一度渋谷に立ち寄って見るとわかる。つまり、演者は大熱演であるが、何しろ選挙区はまったく違うわけであるから、聞いているこちらは全く何ともいたし方ないという立場に置かれる。言っている事になるほどとひざを打つても、何しろ選挙区は全く違うわけだからどうにもならない。反対！と思っても同じである。つまり、党大会というわけではないわけだから、熱演している当人も聞いている当人もお互いに全く関係がない—あり得ない。それを十分知りつつも、車の上では必死とみえるパフォーマンスが繰り広げられ、聞いているほうは、じっと、良く見ると白けた顔をして聞いている。これは一体何なのか。選挙演説の「合理化」を！

。

カテゴリー: 未分類 | パーマリンク

Gallery Aki Blog

Proudly powered by WordPress.

## Gallery Aki Blog

ギャラリー安樹のブログへようこそ!

## グローバルな人材—国際人

投稿日: 2012年8月31日 作成者: admin

最近新聞の経済面にしばしば表れる言葉はグローバルな人材という言葉である。特に日経は教育や人材育成に関する様々な報道に熱心なようである。かつては「国際的」と言うような言葉が使われたが、最近ではもっぱら「グローバル」という言葉が定着している。しばらく前は、この2つの言葉の使い方に戸惑いがあった、国際的とは、国家の国境を前提にこれを越えた関係を示す。これに対して、グローバルとは、もはや国境意識から離れ、個人の立場から世界的な視野を持つ状態と言うように、両者は意味合いが異なるのだというような注釈が行われていたが、今ではすっかりグローバルが普通になった(もっとも最近の日経で「官民挙げて国際人育成」と言う言葉が使われている)。

と言うことではあるが、この一体グローバルな人材とは何を意味するのか。と考えていたら先日の日経でちょっとした定義が出ていて参考になる。これによると、グローバルな人材とは、グローバルに活躍する企業の中で、さまざまな異文化を背景に持つ人たちと建設的な関係を作り維持し、そのような組織の成果の向上に貢献していける人材、ということのようであり、そう言われれば、なんとか努力してみようと言う気になる。しかし、実際に海外勤務や国際機関などの多国籍な職場で働きまた生活してみるととまどうことが多い。

ある時を思い出すのだが——すでに国際機関に長く勤務する日本人と出張旅行をしたことがある。このとき何かの手違いで国際線のファーストクラス待合室が使えないことになった(実は切符はビジネスクラスなのだが一種のサービスのよう形でファーストクラスの待合室が使えるアレンジになっていたはずであった)。大した問題ではないとも言えるが、実はファーストの待合室が使えるといろいろと便利

なことが多い、長旅の疲れも違う、と言うことで残念と言うことであったが、このとき、その同僚の日本人は航空会社の係員に激しく抗議を始めた。勿論、英語はほぼ完ぺきで、つまり手違いの非はそちらにある、それを認めよ——という趣旨である。このとき筆者には、ふと違和感があった。ここまでいわゆる権利主張に走るのはなにか日本人的ではないのではないか、いや、しかし、ここは変に妥協せず相手に抗議を申し立てるべきだ、少なくとも権利はきちんとregisterしておくべきだ、今後のこともある——いやしかし——、という具合である。これは些細な例であるが、仕事の上ではもっと様々な場面があり、多少一般化して言えば、グローバルな世界で勤務しあるいは生活していると、時に自分はいったいどのように行動すべきか(勿論、日本人として)と考える場面にどうしても遭遇する。やはり、何と言っても国際的な場面で行動しているのだからあまり「日本人として」という枠組みにとらわれず、もったになにか国際人として行動すべきではないか、という気分がわいてくるが、するとそれは何を意味しているのか、という疑問と言うか悩みである。

夏目漱石の思い出の記の中に、明治の大学に来ていた外国人教師から、もっとも尊敬と敬意を払われていたのは(たぶん漱石のような)外国語教師ではなく、古文や漢文など日本古来の学問に精通する先生方であったという記述がある。外国人から尊敬を受けるのは、下手に英語をしゃべるよりも日本古来の学問・文化・伝統を身に付けた立派な日本人なのだ——と言う趣旨に読めるし、これは現在にも通じる名言と言う気もする。何より日本人としての教養をしっかり身につけて、まずは日本人として尊敬される人にならなければならない——下手に英語などでできなくても、日本人らしく毅然として行動すべきだ——という感じが伝わってくる所で、確かになるほどと思う。しかし、実際に国際機関などに放りこまれると、そうもいかない。やはりなにか国際人らしく行動しなければいけないのではないかというような疑問にさらされる。(尤も筆者も経験した大使館勤務の場合は、多少事情は違う。大使館の肩書を背負う場合は、むしろ立派な典型的な日本人であることが期待されるからだ。もっともそれが何を意味するかは別問題である)。

先日、日本の総合商社の社長も会長も務めまさに国際的な活躍で成功を収めた人のちょっとしたパーティをかねた講演会があった。これは何としても聞いておきたい。聞いていると、確かに若き頃の活躍から始まり総合商社のトップとしての活躍ぶりには改めて感心する部分が多い。筆者としては上記のような疑問と言うか悩みに対するなにかヒントはないかということが最大の関心事であったが、この観点からふと気がついたのは、スピーチの中でしきりと「和魂洋才」と言う言葉が出てくる。これだなと直感した。やはり悩み、迷っていたのだ。そしてこの「和魂洋才」こそ立派な日本人として尊敬され

つつしかも国際的な活躍をするためのキーワードだったのだ。筆者にはこの言葉に込められた思い(実は悩みであったと思う)が痛いほど伝わった。しかし、スピーチの後、簡単なパーティ・会食だったので、筆者はたまたま同席した若い人たち(これから国際的な場にさらされる人たちに)、この「和魂洋才」をどのように理解するか議論を向けてみた。しかし、結論からいえば誰も何も分からないのである。「和魂」はやはり日本人的な道徳観だろう(これについては新渡戸稲造の「武士道」などが一つの参考になる。参考にはなるが、筆者も含めて武士道が今の若い日本人の行動指針になるかという問いに対しては、みんな首をかしげた)。しかし、洋才となるとますます分からなくなる。一つにはたとえば、橋や道路を造るために必要な物理・化学・数学等の実用科学知識のことではないかという意見もあったが、このように西洋の文明を限定的に理解し洋才としてそれだけを受け入れるというような考え方でやっていけるのか。たとえばギリシャ文明、さらにそれ以後の哲学の流れ、さらに、キリスト教、もっと身近な事を言えば民主主義などと言う考え方をどのように受け止めるのか。勿論、このようなことはビジネスには関係ないという意見もあるが、しかし、実際にはいろいろな場面でこのような価値観の違いにさらされるのが国際的なビジネスの場である——と言うようなことで、皆も分からなくなり、結局、期待して出席した筆者の疑問もなんとなくヒントを得られず終ってしまった。とにかく、これから国際的な場面で活躍していく若い人たちに「和魂洋才」で頑張れとは言いにくい。

国際機関でもっと日本人を増やすべきである、特にもっと管理職レベルにおいて、という議論がある。これは日本政府も機会あるごとに主張しているところであり、また、一流の国際経済関係の学者も論文などを通じて声高に主張しており、いわば正論ということになっている。言うところは、このように国際機関で日本人の比率が高まれば、日本の意見・あるいは考え方が、その経営にあるいは国際機関が行う勧告など業務のありか方に反映されるであろう。日本が金を出している以上これは当然だと言う論理である。

これほど日本人であることを国際的な場で前面に押し出した議論はなく、これは筆者が国際機関に勤務していた間(たまたま管理職的な立場であったが)常に悩まされた問題である。というのは、次のような現実的な問題がある。

1. それでは、この日本人的な意見・考え方とは何を意味しているのか。もう少しひろくあるいは曖昧に考えてアジア的な手法・考え方と言い換えてもいいが、そうなるとますますいったいそれは何なのか(アジアと言ってもインド、パキスタン、中国、韓国、フィリピン、インドネシア——例えば中国は、日本的などと言う考え方になじむはずもなく、フィリピンは全くと言っていいほど日本人的と言う考え方には理解はないと言うのが筆者の経験である)。
2. もし日本人職員が一団となって国際機関の経営や勧告に影響を及ぼすということになれば、一種の日本人派閥を形成することになるが、これは極めて危険であり、避けなければならない。

特に、後者2は要注意である。まず、仮に、このようにして日本人が集まっても、日本人同士の間でもさまざまに決定的な考え方の違いがある(大変な苦勞をして、独立してなんとか国際社会で専門的な地位を獲得し国際機関に就職を果たした有能で独立精神の旺盛な人達。たまたま日本国籍であったとしてもその考え方は全く異なる例は多いし、実際にそのような人たちを見てきた)。確かに国際機関などで、或るアジアの国などは一種の派閥を形成していると見られている場合もある。しかし、これを見ていると実に危険である。勿論、調子のいい時はそのような国籍の人達に阿諛追従が集まるが、同時にこれは情報が偏ることになり、いずれどこかで失策を招き敬意を失うかわからない。このような派閥は形成すべきではない。筆者も、日本人同士で親しくつきあうことは当然であるが、派閥的な動きは絶対にしなかった。

ということは、どういう風に考えたらよいのか。グローバルな人材とは、以上のような筆者の限られた経験から考えると、一口でいえば要するに「迷う人」である。日本にくると何となく調子の合わない、奇妙な日本人と思われ、かといって(たとえばアメリカに行けば)外国人の間でも必ずしもなじめない(英語も少しおかしい)。これが筆者の見るあるいは経験した国際人の姿である。しかし、逆にいえば、仮にこのようなことに悩まなくなったら国際人ではなくなるとも言える。すっかり、アメリカ人になってしまえば悩みもなかりと思う。となると、国際人とは、文化のはざまに迷っている人ということになる、——何とも惜げない！！と言う気もする。なにか、新聞の紙面等に現れる国際人という多少華やかなイメージとずいぶん異なる。

後日談がある。このようなことを考えていた時、たまたま中国の現代史(「中国文明の歴史」 中公文庫)を読んだ。中国の現代史は、資料の未発表もあり分からないところが多いらしい。しかし、これらの筆者は資料不足で分からないことを明言したうえでいろいろ推論を述べているところが興味深かった。ということで、もう少し中国現代史の生々しい感じを捉えられ

ないかと思い、それならと考えてパールバックの小説「大地」を読んだ。この小説そのものについてはともかく、後書きによると、作者のパール・バックは幼少時代は、中国人の家族と暮らし(父親は牧師として活動しほとんど家を空けていることが多い)ほとんど中国人として育てられた。しかし、結局、アメリカ人と結婚しアメリカで暮らすことになる、という経歴を読んで、これこそ国際人ではないか—両国の文化の懸け橋となるべき——と興味をひかれた。その後何となくパール・バックの伝記が気になっていたところである。それらの伝記の一つによると、パール・バックはアメリカにいても別の自分の姿を求め、結局、中国と米国のどちらにも属することがなく孤独であったのではないか、と書かれていること(読売新聞 時の散歩 欄)に妙に納得した。

カテゴリー: 未分類 [パーマリンク](#)

**Gallery Aki Blog**

*Proudly powered by WordPress.*

## Gallery Aki Blog

ギャラリー安樹のブログへようこそ！

## 役人の仕事と責任

投稿日: 2012年9月19日 作成者: admin

少し前になるが、中国からトップクラスの要人の来日が決まり、日本側として天皇陛下との面談を日程に組み込むかどうか問題となったことがある。このとき中国の要人を招き、アレンジをしたのは政治家小沢一郎。ところが、受け入れ側の日本では、羽田宮内庁長官が難色を示した。普通、日本側で天皇陛下との面談がアレンジされるのは大体2か月前からの申し入れが慣例となっている。たまたまこの話が持ち込まれた日にちではこの2か月に足りない。ということで羽田長官は、この取り急ぎ面談には難色を示した。長官の話によると、そもそも、この慣例は天皇陛下の御公務の調整や御負担などを考慮して決められているもので例外扱いは難しいという趣旨だった(確かその旨の記者会見も行われ、宮内庁の考え方が公にされたと記憶する)。このとき、政治家小沢一郎は強く反発した。天皇陛下の中国要人との面談と言うことになれば、それは、最高レベルの政治判断である。政治がこれを求めているとき、なぜ役人が反対するようなことを言うのか—そもそもとやかく言えるのか。これは役人(たしかこのとき「小役人」と言う言葉が使われたことを記憶する)の言うべき言葉ではない。ということで結局、天皇陛下との面談が、いわば急きょ設定(たしか慣例のルールより数日不足していたと記憶する)された。まさに政治が決めたのだ。このときの羽田長官の上記のような言説は多少話題になったが、羽田長官のその後の発言は明快である。長官は「これは私の仕事であり、仕事である以上自分の判断で行動する」と述べたことが伝えられている。

これも少し前になるが、尖閣列島に中国の漁師船が接近したことがある。海上保安庁の船が割って入る形となり、結局、保安庁の船と当該漁船が接触と言うより衝突した。このときの録画映像は秘とされ一部国会議員のみに短時間の編集版が公開されたということで、逆に注目を集めたが、その後この全映像がインターネットで公開されていたことが判明したことは周知のとおりである。このときの中国側の船長の法的な扱いをどうするかは、日中両国にとって大きな問題である。つまりその政治的な意味は大きい。あきらかに、船が衝突するという船長の行動は、日本の保安庁の行動に対する公務執行妨害にあたり、であれば逮捕、起訴に進むはずだ。日本国内で法律違反が行われたという立場をとる以上これは譲れないところだ。しかし、そうなると日中関係がどうなるか。しかも行動の詳細はビデオ化され知れ渡っている。誠に苦しい局面である。これこそ苦渋の判断がおこなわれる政治的な場面であると思い、なにかハラハラするような感じで見ていたら、船長は何事もなくこやかに帰国した。このとき仙石官房長官は、記者会見で、沖縄地検(つまり役所と言うことである)が「判断された」と述べた(たしか敬語が使われたことは確かである)。

しばしば役人は自分のしたことに責任を取らないと言われる。これは最近ではなにか当たり前の常識と言われているようだ。あるところで話を聞いていたら役人批判が行われている。役人は責任を取らない。だけではなく妙に受験戦争で勝ち抜いてきただけに始末が悪い。つまり、過去の間違いを速やかに「学習」し、今度は、うまくごまかし、責任を隠すということについては実に高い能力を発揮する—という趣旨で、元役人の筆者としてはなにか愕然とした思いで、座り心地が悪くひそかに途中退席した。こうなると自分の家族にも聞かせたくないような批判である。役人の責任とは一体何か？これはよく考えてみる必要がある。

先般、国家公務員試験の結果発表があった。かつては、国家公務員Ⅰ種と言われていたが、最近では、総合職と言われるらしい。資料によると、その職務内容は、「主として政策の企画立案等の高度の知識、技術又は経験を必要とする業務に従事する」とこととされている。とすると、この役人の責任は？簡単には書けないが、要するになにか(たとえば社会保証制度や金融制度などの)制度設計を含め、なにか一つの政策を企画立案(法律を制定するなどはその典型的な例であろう)した場合には、その責任を取らなければならないということになる。つまりその「企画立案した政策が失敗した場合は、それについて責任を取らなければならない。今回めでたく総合職に合格した人は、張り切って頑張るのは当然として、この責任のことを身にしみて感じ、かつ受け止めなければならないわけだ。しかし、これはどういう意味なのか—どのように責任をとるのか。

先日、テレビを見ていたら、外務省の総合職合格者の入省式のようなものが行われたらしい。玄蕃大臣の「外交は人である」、と言うような趣旨のあいさつ映像の後、これら若き総合職のちょっとしたインタビューが映ってくる。「自主外交を堅持

し——「笑顔で接するが同時に国益を主張する——」————などとそれぞれに抱負を語っている。しかし、政策に失敗したら責任がやってくるのだ。ここで想像が飛躍する。——白鳥敏夫元イタリア大使(「外務省革新派」戸部良一、中公新書)、大島浩元ドイツ大使(昭和天皇「ベルリンの大島からの報告はあるか」何分軍人の報告は意気込みが入っておりますので、と前置きして重光はいった。「大島大使は、ドイツは最後には勝つと報告してまいりました」昭和天皇 第6部) 福田和也 文芸春秋)の活躍とその責任は？

総合職役人の一番の仕事は政策の立案であり、その一つの典型は、法律の制定或いは改定であろう。これは実際に大変な作業である(勿論、これで給料をもらっているわけであるから文句を言える筋合いではないが)。筆者の経験でも、先ずは上司の指示を咀嚼しつつ自分なりの案を作る。これも大変だがそれからも大変である。この案の関係業界への説明、説得。勿論、有力政治家には十分な説明、根回しも必要だ(いまではこのような事は許されていないようであるが)。これらに応じて軌道修正も必要となる。修正となったらまた説明は最初からやり直す、云々。要するに、知的に大変であるが同時に肉体的にも試練である(いろんな人との面談も自分の都合の良い時だけ会えるというものでもない)。そこで結果として負うべき責任を考えるのだが、これでも分かる通り、このような事を繰り返していると自分(一人の役人)の仕事はどこまでか、一体責任はどこで誰にあるのかははっきりしなくなる。——しかし、そんなことを実際は考えている暇はない。大臣を通し、国会を通過しなければならぬ。実際には筆者の経験でも、ものすごい能力・体力の人は確かにいる。自分の主張を通し、見事に関係者の説得に成功し、自分の信じる理念に基づき一つの法律或いは政策を貫いていく。とすると、このように有能な人のばあいには、その仕事と責任が一致するのか。ここでまた、想像が飛躍する。謀略によって満州事変を起こした石原莞爾の仕事と責任は？

堺屋太一氏は、役人が身分となつてはならないと繰り返し書いています。役人が何をしても責任を取られることもなく、いわばかつての身分のようになってはならないという趣旨と思われる(つまり、間違いがあれば責任をとれと言うこと)。一般に国家公務員法では役人の身分を保障しており(75条)、これは、政権交代などによる政治闘争から身を守り、政治介入を排して、職務の公共性、行政の継続性や中立性を維持するためと説明されている(一方、争議権などの労働権は制限されている)。しかし、公務員法上も、勤務成績の良くない場合(78条)、——職務を怠った場合(82条 2号)——国民全体の奉仕者たるにふさわしくない非行があった場合(同 3号)——などの場合は、人事院規則に従い罷免できることを規定しているのでいわゆる懲戒免職はありうる。しかし、政策の企画、立案に間違いがあった場合はどうか。その間違いの認定・程度はどのように判定されるのかははっきりしない。むしろここで問題となるような「問題役人」は、むしろ恐ろしく勤勉、精力的であると考えたほうがよい。ここでも空想を飛躍させると、辻政信(その仕事と責任は?)などの名前が浮かんでくる。

要するに、たとえば、今年、総合職として、晴れて公務員となった諸兄が、どのような場合に責任をとられるのか、どうもはっきりしない(勿論、汚職などの刑事事件は一般の場合と何ら変わらないので別である)。役人はその仕事に対して責任を取れといわれるし、まったくその通りであると思うが、何をどのようにということはよく考えて置かなければならない。

大学生のころ、行政学(辻清明教授)という科目で初めて公務員採用の「スポイルズ・システム」と言う言葉を聞いた。政権の交代に伴い公務員(だいたい政策立案にかかわる上級公務員)が一斉に交代する、入れ替わるというシステムである。これを聞いたとき、学生ながら本当に驚いた。ほとんどこれはバカではないか——もしこのような事が行われるなら、その名も示す通り、時の政権そして、具体的には自分の上司におもねるだけの役人が増えることになる。当然情実人事が発生するとともに、政策は朝令暮改の弊害を招く——なにかアメリカで採用されているとか聞かすが、これこそまさにあきれ返つてもいえない——と学生のころ考えた。しかし、いま振り返ってみると、このスポイルズ・システムの意味合いは改めて違つて見えてくる。総合職の責任を問うとすれば、このシステムの採用を真剣に考慮すべき時だ。これでこそ総合職の緊張感が生まれてくる。そして役人の仕事と責任についての、上記のような批判にも答えられるようになるだろう(となると総合職に応募するのも大変だが、しかし、責任をとる以上覚悟すべきことである)。

と書くと、奇妙な結論のように思われるが、しかし、すでに現在、お役所にはやたらと副大臣・政務官がいる、事務次官(その会議)の廃止論(次官による記者会見は廃止されたようだ)、国会での役人答弁の制限、等の動きを見ていると役人を政策形成のトップには参加させないようにするという動き(つまり総合職役人の仕事を制限する。同時に責任も制限されるだろう。)とも見ることができる。と考えると、このような動きは上記「スポイルズ・システム」の近似形とも言える。とすれば

スポイルズ・システムも学生のころに考えていたほどには荒唐無稽なものとも言いきれないはずだ。

カテゴリ: [系分類](#) [パーマリンク](#)

Gallery Aki Blog

*Proudly powered by WordPress.*

## Gallery Aki Blog

ギャラリー安田のブログへようこそ！

## 現場主義

投稿日: 2012年10月2日 作成者: admin

現場主義——という言葉を知り、プラスイメージを持つか、マイナスイメージを持つか。大体プラスイメージを持つ人が多からうと想像する。現場を知らずに何が分かるか。机上の空論と言う言葉もある。さらに、一歩を進めると現場で もっこを担ぐ人が偉い、と言うような話にもなる。橋を一本かけるにしても、本当に偉いのは、あれこれ指図をしているような人ではなく、現場で苦勞し、まさに熱い汗を流した人である。要するに、汗を流す人が一番偉いという考え方は、なにか一般になじみやすく人気がある。日本の歴史を語る本を少しひも解いてみても、難工事のなか、しかも資材・機材の不足の中、なんとか現場が工夫を凝らして見事工事を完成するという類の話(美談)にあふれている(太平洋戦争の戦記を読んでもこれに類する話は多い)。まさに現場の力である。先日、知人から自著を贈られたが(知人はその会社のトップにいわば横すべりで入った)、その本の題名は、「とことん現場主義」となっていた。つまり、あまり知られていない自分の姿勢をもっともつよく従業員にアピールする言葉は、何と云っても現場重視という言葉である。つまり現場重視は訴える力が強い。

このようにみると、先般の福島原子力事故の際、当時の管総理が、事故早々に現場に飛んだことが、どういうわけか人気がないのは異例の現象である。もし、あの事故の際、管総理が総理官邸にひきこもり、勿論、作業服などは着ないで(すこしシャツをめぐりあげるくらいか)、あれこれの(多分不完全な)情報にもとづき指示を出していたら——ということを想像してみると、このイメージは大変評判が悪からうと想像する。それこそ、現場も見ないで、と逆に批判にさらされたであろうことは間違いない。国会で管総理が、現場を見に行っただけをしきりと弁明する姿はなにか奇妙であった。

このように、現場重視は日本のビジネス文化の一つと云っていいほど人気がある。しかし、ここには重大な落とし穴があることに十分な注意が必要である。以前オーストラリアに勤務していたころ、ある報道機関の駐在・派遣職員の人と親しくなった。ということであるとき、当記者がオーストラリア(のある分野)について書いている本をもらったことがある。その冒頭で強調されているのは現場主義である。つまり、「この本に書いていることは全て私が実際に見たり聞いたりしたことである、現場取材にのみもとづく」ということをまずは指摘している。つまり、ここにはねつ造も嘘もなく要するに良心的な取材に基づく本である——というように、現場主義を強調する姿勢がこの本のプラスのイメージを作り出すことが期待されている。しかし、ここで少し見方を替えると、疑問が出てくる。確かに書いていることは「事実」かもしれないが、それではこれらの「事実の集合」は、オーストラリアの本当の姿を伝えているのだろうか？群盲象をなでる、という言葉があるが、まさに、この記者は象の「鼻」のところを報道しているのではないか、という疑問と云うか不安である。

この記者は、一つの仮定に基づいている。つまり、これらの事実を集めたものがオーストラリアの真の姿を現していると「信ずる」ということを表明しているのだ。そこにはかならず「想像力」の働いと、いわば「直感による選択」がある。勿論、記者の姿勢は、良心的なものであることは認めるが、ここで記者は、現場取材と云いながら、実は一つの仮定、見方を披露しているにすぎないということを忘れてはならない。記者を批判する気持ちはない。要するにそういう意味では、我々は全て群盲であることを改めて知るべきだ。

イギリス(オーストリア出身)の哲学者カール・ポパーは面白いことを書いている。講義の始まる前に学生に紙と鉛筆を渡して、「これを良く観察して、ありのままを書きなさい」という課題を与えると、かならず学生から手が挙がるという。先生！これの何を観察したらよいか——鉛筆の長さですか、太さですか、あるいは、この紙の書き心地ですか？このエピソードは、要するに、どんなものでも虚心坦懐にいわゆる事実を観察するということとはできない。ものを見るには何かの「視点」、「前提」が必要になることを示していて興味深い。同様に現場に行ってもものが見えるわけではない。常に何かの前提、見る人の考え方があってはじめて見えるということである。文章のみならず、報道写真でも同じである。よく社会心理学に出てくるように、たとえば、今砂糖が払底していると言っ、倉庫の中に砂糖がすこし盛り上げられている写真を掲載しても真実が伝わるわけではない。となりの倉庫は砂糖でいっぱいかもしれないし、それは映らない。つまりまずは映す視点が重要なのだ。

すこし話は横にそれるかもしれないが、この現場主義は意外な力も発揮する。昔、仕事の上で予算をつける方ではなく、



もらいに行くことのほうが多かった。このとき、予算をつける方(いわゆる査定側)が、現場を見たいという。勿論断る理由はない。と言うことで案内すると、それこそ現場でちょっとした事実(要するに査定する側からみた間違い)が発見される。こうなるとこちらの議論(つまり予算要求)はいちじるしくやりにくくなる。査定側としては現場で見つけた事実(つまり、査定側から見た間違い)を、ことあるごとに指摘すればよい。勿論、こちらとしては、そういうことは確かにそれはあったかもしれないが、それは例外的な事だという議論をせざるを得ないが、このようないわば「例外証明」の議論は実にやりこい。現場の事実には対抗できない。なんと言いつつ事実こういうことがあったではないかと言うことで、ちゃぶ台返しのように、こちらの議論はひっくり返される。現場の力の意外な応用方法である(これにはしばしば泣かされた)。先日、東電の会長が現場を視察し、低電圧と書いた張り紙を見て厳しく指摘したそうである。低電圧ではない！家庭用である！要するに一般顧客の目線になっていないからこういう書き方をするのだ！という指摘であったという。まさに現場主義による会長の議論は強い力を持つだろう。しかし、一方で、いちど現場の呪縛からはなれた冷静な議論も必要だ。

現場主義は力を持つ。しかし、その危険も同時に要注意である。確かに現場で、苦難を乗り越えて熱い汗を流し、見事橋を架けることに成功するというような話には確かに感動するが、同時に、そもそも、そんなところに、橋を架ける必要があるのかどうかという判断をすることのほうがむしろ重大な意味を持つ、一一という視点を見失うべきではない。危機の際、なにも全員が作業服を着る必要はない。

カテゴリー 未分類 [パーマリンク](#)

Gallery Aki Blog  
Proudly powered by WordPress.

## Gallery Aki Blog

ギャラリーアキのブログへようこそ！

## 規制者は規制される。

投稿日: 2012年10月17日 作成者: admin

規制者は規制される——ちょっと奇妙な言葉であるが、これは要するにこういうことである。政府当局がある業界を望ましい方法に進めるため何らかの規制をしようとするとき、実は、当の業界から圧倒的な影響を受けて、いつの間にか立場逆転、規制したつもりが規制されるという意味である。ここまで読んでなるほど分かったという読者は相当な事情通である。

今回の福島原発事故を受けて一つ大きく浮かび上がった問題がある。原子力安全・保安院が実は経済産業省の一角をなしていたことである。これについては批判が相次いだ。つまり、資源エネルギー庁を擁する経済産業省はまさに日本経済のエネルギーをいかに確保するかがその使命であるはずだ。であるとすれば原子力発電もいかに「進めるか」に関心があるはず。であるとすれば、基本的には原子力発電の推進の立場であるはずだ。それが安全規制の立場も兼ねているとは全く解せない。つまり推進派と規制派が一体になっているという矛盾というか、そもそも論理的な誤りを犯している、という批判である。確かに、今になっていろいろ公開されている映像を見ていると、福島原発について現状以上の安全策を検討すべきではないかという議論に対して、当時の資源エネルギー庁長官が、「そんな議論をして、寝た子を起すな」と述べている場面はたびたび報道されている。実際、今になってこの組織のあり方をみると、規制当局と推進当局が(相互の人事異動を含めて)ごちゃ混ぜになっているとは驚きであり、ばかばかしいにもほどがあるという感じが強い。しかし、このような形は旧通産省に限らない。かつて証券取引に関する不祥取引の多発に対応して、証券取引監視委員会が設置されたことがあるが、これは当時の大蔵省の下における審議会として設置されている(その後いわゆる大蔵省の解体に伴い金融庁の下に移された)。

このような議論と反省を踏まえて先般、原子力規制委員会が設置された。この委員会をどこに置くかは議論の末、結局、いわゆる原子力発電の推進側と見られる経済産業省とは切り離し、環境庁のもとにおかれることとなったことは知られるとおりである(委員長をはじめとするその人事も経済産業省からは切り離されることになっている)。ということで、原子力発電の安全規制に関する独立した委員会が発足した。結構なことである、と言いたいところであるが、実はここには大きな落とし穴がある。

仮定の話として、この委員会に「人物見識が優れているとはいえ全く原子力発電に関係のない(なかった)人物」が任命されたでしょう。これはまさに理想的である。まったく原子力発電の既得権益からはなれ公明、公正な判断をするに違いない。と言いたいのが実はそうはならないのである。その人物は、原子力発電の安全確保について誠意を持って考えるに違いないが、しかし、机のまえで座っているだけではどうにもならない。そこで、原子力発電について勉強しなければと、書店・図書館に出かけて関係の本を読み始める。このあたりから危険がすでに始まる。なぜならこれらの本や資料には必ず原子力関係者の本が多量に含まれているに違いない(むしろ大部分がそうだと考えなければならない)。そこで、本だけではだめだとばかりに、いちど原子力発電の実情を知らねばならないと決意し、たとえば福島原発に出かけるか、あるいはその関係者を招いて事情を聞こうとすることは大いにありうるし、むしろ望ましいともいえる。するとどうなるか、規制を受ける側は、勿論喜んで実情を説明する、そして規制者は耳を傾ける。このサイクルがはじまると、この有能な誠意ある人物たる委員は原子力発電の関係者の意見に次第になじみ、染まっていく。勿論、規制される側の原子力関係者の意見は自分たちに都合の悪いことは避けていると考えるのが普通であり、これを見抜かなければならないが、そのためにはまた、上に述べたような勉強、事情聴取がはじまる。結局、この循環関係・サークルからは抜けることはできない。むしろ、本当の現場の実情を知るには、そして意思疎通を良くするため、この委員会の事務職員の一部に、実務に経験のある原子力発電の社員を連れてきてはどうかというような意見(積極的な人事交流)もでてくる可能性さえある。更に進めばまずは、相手の「人柄」を知ること必要だとなって(情報交換会と言う名の)夜の宴会も不思議でなくなる。つまり、規制者は勉強すればするほど、こんどは規制者に規制される。こうして規制者而非規制者が共存する「村」が作られる。日本のようにいわゆる先輩・後輩と言った共同体意識がなくてもこうなる。あればなおさらである。

以上のような議論は筆者が「空想」で考えたものではない。実は筆者はかつて国際機関に勤務していたころ、チリの経済

自由化政策にかかわった経験がある。よく知られている通り、開発経済学の分野では、1990年ころ「ワシントン・コンセンサス」と言われる議論が盛んに行われた。これは要するに、それまでの輸入代替政策(要するに国内産業保護・育成政策で、特にラテンアメリカに多くみられた)から市場原理の導入を図る政策への転換を意味し、当時、チリはこの政策転換の模範生といわれた時期がある。また、チリはこの関係の著名な学者も出したことも知られている。筆者もチリ財務大臣のセミナーに参加した記憶がある。ここでの議論は要するに「いかにして市場原理を導入するか」であったが、同時に「小さな政府による市場の最小限の管理をいかに併せ行うか」ということでもあった。このとき筆者の記憶に残ったのは、むしろ、後者、つまり、「適切にして最小な」市場管理の難しさであり、このとき語られたのが「規制者は規制される」と言う言葉であったわけである。英語で何と言うのか記憶は定かではないが、要するに、Regulators ought to be regulated. と言うような表現が使われたのではないかと記憶する(英語のought to は、どうしてもそうならざるをえない、という語感があるようだ)。

筆者は役所勤務の経験があるので、要するに経歴としては規制者である。そしてこの経験からいえば、「業界の実情も知らずに……」と言われるのが一番つらく恥ずかしい。要するに勉強不足を指摘されるに等しい。ということで、実際、今から願みるとせつせと担当の業界の人と話をした。業界の人たちも実に親切であった！ そういえば旧大蔵省批判が激しかったころ、報道によると年に200回(!!)近く、担当する業者(つまり銀行・証券・保険会社)と夜の宴会をこなしたという猛者もいたようだ。要するに、自分では一生懸命しかるべく仕事をしたつもりだが、それだけに、この「規制者は規制される」には考えさせられた(業界とつながりがなくなった後になってのことであるが)。

以上要するに何が言いたいのか。しばしば、資本主義の在り方について、活発な市場経済とこれを適切に管理する政府(しかも最小限の管理が望ましい)という姿が語られるが、実はその実現は極めて難しいということである。かつ、まじめな役人がいるほど、難しい、と言うことを十分認識しなければならない。振り返ると、このところ、日本もアメリカもバブルを経験し、加えて、最近のリーマン・ショックはいまだに世界経済の足を引っ張っている。要するに市場の暴走が指摘されるが同時に、一体、規制当局、つまり政府は何をしていたのかも問われている。勿論、これらの過去の歴史には学ばなければならない。しかし、債券の証券化と銀行による自己投資勘定の拡大、つまり投資銀行化——これは危険な道である(ここで確率的なリスク管理の難しさがからんでくるが、これは又別の問題)、この危険はわかっていたはず、当局は何をしていたのか、今からみればバカじゃないかと言いたくなるが、しかし、上に述べたような規制者は規制されるという原理から脱出することの難しさを知るべきだ。こうして「市場原理主義」の間違ったなどと揶揄されながら、バブルの歴史はバカのように繰り返す。

今回の原子力規制委員会が経済産業省と切り離されたことは「一応」意味はある。しかし、上に述べたような「原理」を考えると、問題はもっと難しい(そのうち原子力発電の実際を知っている電力会社との人事交流を進めたほうがよいというような議論がまさに正論となる可能性は十分にある)。規制者は規制される——そして相互に一定の距離を保つことの重要性和その難しさを、規制する側も規制される側も常に忘れてはならない。

ところで、最近の報道によると、新設の原子力規制委員会も活動が始まったらしく、その初期の会合が開かれているようだ。そして、まずは、当の規制委員会の専門性をいかに高めていくかが真剣な議論の的になったようである。テレビを見ていたら、委員の一人である舟橋洋一氏が「この委員会の専門性をいかにして確保し、高めていくかが緊急の課題である。でなければ事業者に負けてしまう」という趣旨を述べているところが印象深かった。

ラインハートとロゴスの「国家は破綻する —金融危機800年—」を読むと、金融危機は繰り返す。官の側では規制を緩和したり、強化したり、あるいは、民の側ではリスクマネジメントを推進したり、様々なことが行われるが、結局、規制する側も規制される側も一緒になって崖からころげ落ちる。しかも、これをいくどとなく繰り返す歴史の姿を見ることができる。

カテゴリー: [未分類](#) [パーマリンク](#)

Gallery Aki Blog

Proudly powered by WordPress.

## Gallery Aki Blog

ギャラリー安田のブログへようこそ！

## 研究環境

投稿日: 2012年11月2日 作成者: admin

今回ノーベル賞を受賞した京都大学の山中教授がNHKの番組に出演(遠隔テレビ画面による)し、次のようなやり取りが行われている。筆者が聞いたかぎりでの記憶によると、研究環境について――

NHK「以前、奈良先端科学技術大学院に入られた時は研究費も――？」――山中教授「研究費は200万円でスタートしました。研究の助手を務めてくれた高橋君の給与をどうしたらよいか困りまして――もしこの研究がだめなら、私は医者の資格を持っているので、いずれ医院でも開いて、その受付にでも雇ってあげるから――というようなことを考えました」NHK「それは大変でしたね――しかし、このたびの受賞で国のほうでも支援を決め、200億円を支出するということのようにです」山中教授「非常に助かります。しかし、これで雇っておられるのは10年くらいです。その後どうするか。10年もすれば、今仕事をしている人たちはかなりの歳になりますし、その後どうするかと言うことになると、――」NHK「――」(うなづく)

加えて、本日の読売新聞によると、山中教授は総合科学技術会議の有識者議員会合で、日本の研究現場の雇用環境の改善を訴えた、と出ている。――研究所の教職員のうち、9割近くが有期雇用で、年間約8億円と説明。つまり、山中教授のマラソンで得る収入の80回分にあたるといってやジョークめいたコメントも紹介し――このように、スタッフの雇用が、助成期間限定の国の研究費に依存する問題点を指摘した――と、なっている。

山中教授はアメリカでの研究経験もあるようであるが、教授自身はアメリカとの比較は語っていない。しかし、一般的にはアメリカの研究環境は優れているという認識がある。そこで、実際アメリカではどうなのか。よくはわからないがちょっと次のような経験を思い出す。

アメリカ(ワシントンDC)時代、地下鉄駅のそばのアパートに住んでいた。駅近と言うこともあり、かなり大きなアパートで住人も多い。結果として日本人家族も何組かいる。ということで年に1-2回日本人が集まってちょっとしたパーティをする。その中の一人、比較的若い男の人はワシントンDCにある某大学の経済学部助教授である。何が専門か聞いてみると貿易論とか。大学はニューヨークの北にあるコロンビア大だったとかで、その治安の悪さが話題になる。寮で勉強しているとバンバンとピストルの音がする――また、やってるな、と言う感じだったそうである(近頃はコロンビア大学の治安も良くなっているようであるが)。と言うような話をしたが、この人の生活はなかなか大変である。何しろ2年ごとに職探しである。自分の論文を持ってほぼ全米を回る。その時は、サンフランシスコに職(助教授職)が見つかったとかで、これから2年はサンフランシスコに移る。奥さんは会計士で、こちらはジョージア州アトランタで仕事があるそうで、そちらに住むとか。いろいろ聞いてみるとこういうことを2年ごとに繰り返す。

たまたまハーバード大学医学部の研究室に進んだ人も知っている。その雑談などを聞いていると――研究室の教授の最大の仕事は資金集めであるとか。研究にどのようなテーマを選ぶかも勿論資金の集まり具合に大きな影響を与える。この資金力の差は、実際、研究室の雰囲気、活況ぶりを変えてしまう。当の人が属した研究室の教授は老齢でもあり、あまり資金集めができなかったらしく、或る時、なにか機材を隣の研究室から借りることになり、隣の研究室を訪れたら、その研究室の機材、装置の立派さに驚いたそうである。何もかもが新びか――まるで田舎ネズミが都会ネズミに出会ったような感じであったそうである。その後もっと資金の潤沢な研究室に移ることができたそうであるが、そこでは、要するに熾烈な競争である。そして、もし見込みがないとなれば「冷たく」切り捨てられる。アメリカ人も勿論そうであるが、仮に研究員が外国人ならば、ここでビザが絡んでくる。普通、学生から博士号を経て研究室に職(勿論、短期の契約)を見つけてもアメリカ永住ビザ(グリーン・カード)は手に入らない。そこで研究しながら、今後の生活を考えて、ビザサポートを求めめるわけであるが、結果としてビザサポートを得ることができなければ日本人等外国人研究者のビザは自動的に切れ、当の研究者は残れない(ただちに帰国しなければならない)。教授のほうでも別に悪意でやるわけでもないであろうが、要するに、研究が気に入らなければビザサポートを打ち切れればよいわけだ。(現在、日経の「私の履歴書」で、根岸教授の回顧録が出ているが、やはりビザ問題が出てくる。しかし、根岸教授の場合は、指導教授がビザ取得に走りまわってくれたそうである。

つまり強いサポートを得られたケースであるようだ)。と言う事情でありながら、研究室には、世界中から研究者が押しかけてくるそうである。ということで、ここで見られる姿は、要するに国内は勿論、世界中から、自分こそはと自負する研究者が、アメリカには蟬集してくる、そしてほとんど使い捨てに等しい選別。

イエール大学の近く(ニュー・ヘブーン)に住んでいた時、たまたまお隣が教授夫妻であった。ご主人がファイナンスの教授とかで、一人娘のご子息はアメリカの軍におり、当時ハワイに勤務中とか。で、静かな雰囲気のある2人暮らしのように見えた。しかし、その教授がどう見てもかなりの御歳である。勝手な想像ではあるが70代は間違いなく80歳に近いのではないかと推測した。東大では60歳で定年(当時。いまは65歳になったようである。)であるが――、などと思っていたが、要するに、アメリカでは、ある意味では不思議な事に、教授(テニユア)になると終身教授職となるらしい。上に述べたような若い人たちの姿・生活と比べると不思議な気もした。

要するに、これらの断片から浮かんでくるのは、アメリカの研究環境―それは、(テニユアまでとってしまえば別のようであるが、そうではないほとんどの研究者にとって)、無慈悲とも言いたくなる競争と選別である。そして、日本はこのようなアメリカと研究の面で競争していかなければならないという現実がある。とすると、日本の研究者の間でも、アメリカに負けなような競争の原理を導入あるいは維持すべきだ、と考えるのが正論であろう。山中教授が訴えているように、研究所の「教職者」の職の安定を！と言うわけにはいかない。尤も、山中教授の発言の中では、――研究者は別として、研究所の「支援部隊」に属する人たちの安定した雇用を確保したい、というような言い方もあり、必ずしも研究者の安定的な雇用環境を――と述べているわけでもなさそうであるが。しかし、この場合も支援部隊と研究者の線引きはどこにあるのか、どのように分けるのか(支援部隊と言ってもその分野で博士号を持っているような人も多数いるに違いない)は、必ずしも明確ではないという問題がある。

要するに、山中教授が述べているような雇用の確保論とNHKが示しているような同情的、理解論に安易に賛同するわけにはいかない――と、結論付けたいのであるが、実は必ずしもそうとは言いきれないのである。と言うのは、そもそもアメリカのビジネス社会は、上のようなテニユアをとった教授は別として、ほぼ全体が有期雇用である。社会全体が転職を繰り返している。国際機関でも、雇用は原則有期である(2年。これを繰り返すことができれば、成績によって期限なしのレギュラーになれる)。一方、独立したコンサルタントのような仕事も活発で、社会的にもその地位は認知されている。このさらに根底には、高度の知識やサービスには対価(しかも原則としてかなり高い)を払うのが当然であるという文化がある。結果として専門家たちは経済的にも独立しやすく、かつその交流も活発で、国際的に広がるコミュニティを形成している。ライバル関係の他社に移ることも不思議ではない。もっと、具体的には、たとえば転職の際に、有効で意味のある推薦状(reference)を書いてもらう、というような慣行も確立している。今、辞めていくからと言って referenceに誹謗中傷的なことは書かない(またいつかもっと優秀になって、こちらにくるかもしれないのだ)。多分、上に触れたような研究者もこのような流れの中で動いているのであろうと想像する(というところで、思い出したが、アメリカのあるパーティで初老と見える人と話したことがあるが、その人がいわく――私はこれまで5回にわたって職・会社を変わってきた。そしてそれらの会社はいまは全てつぶれた。そしてそのうちの一つは父ブッシュ政権である)。ということは、日本に翻ってかんがえれば、企業のほうでも、新卒一斉採用に血道を上げることなく、もっと個人の知識・経験・意欲に従って、採用を決める(いわゆる通年採用)というような姿勢が必要だ。また、国全体の研究レベルを引き上げていくためには専門家の競争又キャリアデベロップメントのための転職―物ではなくて知識を売ることによる独立の可能性――と言うような社会的なシステムが必要だ。最近、博士号取得者の就職支援プログラムを進めている大学もあるようだが、実際、単なる支援・補助ではなく、これらの高度の知識を持つ(教育投資を受けた)人たちが適切に競争させつつ社会に組み込み有効に活用していくシステムが必要だ。

ということが本稿の結論であるが――実は、最近話題を呼んだ英「エコノミスト」誌による「2050年の世界――英『エコノミスト』は予想する」に驚く！べき記載がある。これは引用するに値する。

まず、『アラブと中国が――どちらも実用的な技術を生みながら、大した理論を生まなかった。どちらも、致命的な欠点として、実験によって理論を検証し、必要ならば旧来の学識を排していくという姿勢を持たなかった――』として、やや一般的にアラブと中国が科学理論の進展には基本的に適さない国であると、断罪しつつ『――今のところ非西洋では随一の技術大国である日本でさえ、本来的な基礎科学の研究は立ち遅れている。日本人で科学部門のノーベル賞を受賞したのは

わずかに十五人。それは、たとえばオーストリアの受賞者数よりひとり多いだけ—オーストリアの人口は日本の人口の七パーセント以下——で、その理由の一つとして、日本の若手科学者が先達の理論に迎合しがちなことがしばしば挙げられる。』(日本語版 p346)

と述べ、まずは一般論としてつまり中国やアラブの文明(あるいは文化)が、そもそも基礎的な科学の発展に向いていないというやや大胆ともいえる発言と、同時にこのなかに日本も入れており、どうやらアジア或いはその一つとしての日本の年功序列的なシステム(つまり、上記先輩の理論に迎合する)を批判している。

更に続いて次のように驚くべき(!)記述がある。つまり、——

『——欧米諸国が苦勞してやっと獲得した、科学の繁栄につながるリベラルで知的な環境を新興国でも実現できるなら、その国は科学の面ばかりか社会的、政治的な面でも繁栄するだろう。もし実現しないなら、あるいはできないなら、彼らの行く末には日本と同じ運命が待ちうける。つまり、ぬるま湯のような暮らしの中でぼんやり日を過ごし、真にあたらしいことに気持ちが向かなくなるのだ。日本のこの現状にかんがみれば———科学者たちが民主的で序列にとらわれないインドのほうが——前途有望だと言えるだろう。』(日本語版 p347)

この記事の筆者は ジェフリー・カー(Geoffrey Carr) 『エコノミスト』誌のサイエンスとテクノロジー担当エディター となっている。

エコノミスト誌と言えば、これまで日本についていくつかの特集を出しており、相当な注目を集めた実績がある。どういうわけか今回の上のエディターの発言はあまり話題になっていないが——『ぬるま湯のような暮らしの中でぼんやり日を過ごし——ている』日本と言う認識は、まさに驚きであるが、これは翻訳であり原文ではどうなっているのかと、参考までに英文版を見てみると、英語でも確かに——

In the answer to that question lie both the future of science and the future of humanity. If the new powers permit the development of the sort of liberal, intellectual environment, so hard-won in the west, that allows science to flourish, then they will flourish themselves- and not only scientifically but socially and politically too. If they do not, or cannot, they will have the same fate as Japan, drifting along with a comfortable standard of living, but unable to do much that is truly new. If it is reality that makes the long-term prospects of democratic, disorderly India (another country with a strong mathematical tradition) more promising than those of its perennial rival, authoritarian China.

確かに翻訳は英文に近い(尤も、インドのところでdisorderlyを序列—多分年功序と思うが——にとらわれない——と訳しているところが面白い)。尤も、このエコノミスト誌の発行日付(翻訳版)は、2012年8月30日(第三刷)であり、山中教授のノーベル賞受賞前であることは興味深い。

このエコノミスト誌の表題は上に書いたとおり 2050年の世界を予測する——であり、このエコノミスト誌の中でも、将来の予測はむつかしいことを繰り返し指摘しており、過去に行われた(重大な)予測は全て間違っていたことを述べているので、たとえこのエコノミスト誌がどんな予想をしようと、それだけで知的な興味をそそるし、価値はある。しかし、上記の日本の記述は予想の部分ではない。日本の現状分析、認識であるというのはやはり衝撃的である——『ぬるま湯のような暮らしの中でぼんやり日を過ごし、真にあたらしいことに気持ちが向かなくなるのだ。日本のこの現状にかんがみれば——』

現状と言うところで、多少悔しくなって、ジェフリーが例示しているオーストリア(人口)のノーベル賞受賞者を調べてみると、まず人口は860万人くらいで、確かに東京都より少ない感じがする。しかし、ノーベル賞の科学部門を検索してみると9人となり、ジェフリー・エディターの計算と合わない。(日本は山中教授を除いて14人)。これは多分オーストリアの栄枯盛衰のなかでどうも国境、あるいは国籍自体があいまいな事も原因のようであるから、あまり厳密な比較はできないようだ。この比較でも物理学者の南部陽一郎はアメリカに入れている。と言うことは別として、オーストリアの9人のうち、7人は第二次大戦前である。大戦前となれば、日本もたとえば赤痢菌の志賀潔、破傷風菌の北里、あるいはオリザニン鈴木梅太郎をどう見るか。そのほか人類の生活に与えた影響からみて、本田鋼、八木アンテナなどが浮かんでくる。勿論、こ

のような事はエコノミスト誌の科学部門エディターは十分承知の上であろうが。それはともかく、この日本の研究環境の現状についてのエコノミスト誌の認識が、あまり話題にならなかったのが不思議であり、敢えてここで引用した次第である。

カテゴリー: 未分類 [パーマリンク](#)

Gallery Aki Blog  
Proudly powered by WordPress.



## Gallery Aki Blog

ギャラリー安樹のブログへようこそ！

## ノーベル経済学賞

投稿日: 2012年11月12日 作成者: admin

ノーベル賞週間が終り今年もノーベル経済学賞の発表が行われた。しかし、このところノーベル経済学賞は多少評判が悪い。その大きな理由は例のブラック・ショールズの方程式にある。これによりデリバティブの一つである先物取引、オプションの価格計算が「合理的に」行われるようになった。この功績が認められてショールズとこの方程式の厳密な定式化に成功したマートンは1997年のノーベル経済学賞を受賞した(ブラックは残念ながら2年前に病死していて賞の中には入っていない)。

ところが、マートンとショールズの二人が名を連ねたことで有名になったヘンジファンドLTMCが巨大な損失を計上して倒産した。ノーベル経済学賞を受賞したような人が2人も経営に携わり、まさにその方程式の運用を行いながら倒産するとは――結果として、この倒産が世の中に与えた苦痛は甚大で、何のためのノーベル賞かと言うわけである。実はノーベル経済学賞はノーベル自身の遺言には無かったとされており、この賞はスウェーデン国立銀行の創立300年を記念したもので、また、その賞金も国立銀行が出しているそうである。実際、上記事件の後、ノーベル家からは、これをノーベル賞と称することについて異論が出たとか報じられている。

という背景もあり先般テレビを見ていたら(民放だったか)、ノーベル賞の話題の一つとして経済学賞に対する批判的な番組を放映していた。どういふバックグラウンドを持っている人なのか分からないが、あるアナウンサー(女性)が登板し、これに対して良く見かける経済評論家が応答に対応している。聞いていると、要するに、当の女性アナウンサーは、しきりとノーベル経済学賞に対する不信感を表明しているわけであるが、相手となる経済評論家は、今一つはっきりせず、なにかとりとめのない弁明を繰り返しているように見えた。その流れのなかで例により上記LTMCの倒産に触れ、これだけ世を騒がせた(具体的には損失を被った人が出た)のだから受賞者はあやまるべきではないか――と述べたところで筆者はムックと起き上がった(実は寝転びながら聞き流していたのだ)。世に迷惑をかけたから謝る！とんでもない発想である。ここで当の経済評論家が、はっきりとした反論と態度を示せばともかく、このアナウンサーの質問になにか今一つの弁明らしきことを述べている。

LTMCの件でノーベル賞経済学者が謝る必要はない。ブラック・ショールズ方程式は人間の知の資産として立派に認められるべきものだ、と反論すればよいのに、ともどかしかった。このとき当の経済評論家が、いわゆる文科系の学問は理科系の自然科学と違うものであり、同列には扱えないという趣旨を述べていたのでますます、こちらの不満はつまった。

翻って、ノーベル経済学賞は、なぜ批判されあるいは疑われるのか？当のアナウンサーなどの言葉を聞いてると、何しろLTMCの倒産のように「間違えた」から、いかえれば科学的ではなかったからと言いたいらしい。

自然科学(たとえばその典型的な天文学・物理学)のさまざまな法則は科学的であり、真実を表わしていると一般に考えられている。しかし、ここには十分注意が必要である。ガリレオ・ガリレイが望遠鏡を天体に向けたのが1609年とされており、以来、科学は長足の進歩をとげ、ガリレオは近代科学・天文学の父ともいわれる。しかし、ガリレオについては面白い手紙が残っている。実は、ガリレオは、潮の満ち引きが月によるという考え(そういう考えが当時すでにあつたことは驚きでもあるが)を理解することができず、はるか遠くに離れている月が(月までの距離は当時すでに大体正確に計測されていた)地球に影響を与えるなどと考えることは、占星術と何ら変わらない、要するにオカルトみたいなことを言うなど強く批判する手紙を残している。当時の支配的な考え方によると――これはガリレオとほぼ同時代人である(年齢的には多少若い)デカルトの著作(例えば「省察」二)などにその一部が表れているが――2つの物は同時に同じ場所に存在できない。上記デカルトの言葉を借りると、物は他のものの中には「陥没」はしない。よって物体の力は衝突により伝わりと考えられ、まさか遥かかなたからの遠隔操作などというようなことはないと言うのが正統な考え方であつたようである。しかし、今では勿論ガリレオは間違っていたことが明らかになっている。ニュートン力学(ただしニュートンも、なぜ力が働くかは示していない)が出て、さらに19世紀には電磁場から場の理論へと発展し、今では重力場と言う言葉も不思議ではなくなっている。つまり、離れていても力が及ぶ。

20世紀(1905年)にはいってニュートン力学もアインシュタインによって修正される。現在携帯などに出てくる位置情報は宇宙衛星をつかったGPSに依存しているが、これは位置測定に使われる衛星の速さと地球からの位置を換算して時間修正されている(スピードが速くなるほど地球から見て時計は遅れる、しかし、地球から離れるほど重力は減少し時計は進むとか)。ところが、このアインシュタインの一般相対性理論も、原子などのミクロの世界を扱う量子論とはうまく整合できない。現在はこの二つの理論が並び立っているような状況だ。アインシュタインは量子論に納得せず、量子論学者の会合には加わらなかったと言われる。アインシュタインの居たプリンストン大学で量子論学者が集まった時、アインシュタインは大学の教室の中の量子論学者の会合を、窓の外からなにか不思議そうに眺めていたそうである(なにか授業を受けさせてもらえなかった子供のような情景を連想させる)。

経済学にも似たような事例がある。1974年ハイエクとミュルダールが同時にノーベル経済学賞を受賞しているが、両者は全く対称的に異なる経済学の体系あるいは思想を示して居ることで知られている。(前者は「隷従への道—全体主義と自由—」で知られるように経済政策に政府の介入を排することを主張、後者はケインズ学派の一人である)。この両者の同時受賞は、これまでも度々話題になり、時にエコノミストといわれる人たちのランチ・ジョークの一つになっている。

と言うことであるが、誰もガリレオやニュートンが謝るべきだとは考えないだろう。ここで、結局、科学とは何かという問題に遭遇する。しかし、実はこれに対していまのところ明確な回答はない状況であると言うことは十分認識すべきである。たとえば、実験を積み重ねて、それがうまく説明できるように理論(実証に基づく理論)が作られるのが科学理論だ—と言う考え方も、じつはあまりはっきりしない。たとえば、カラスは黒いという発言は科学的か？ 実際カラスを100匹捕まえてみたらいずれも黒かったと言っても、それでは101匹目はどうか1000匹目は？ と言うような疑問は常にのこる。(余談だが、筆者はオーストラリアのパースを訪れた時、「黒い」ハクチョウが泳いでいるのを見て不思議な感じがした経験がある)。この関係で有名な話は天王星の発見である。当時、惑星の軌道はニュートン力学できれいに説明かつ予想ができると考えられていたが、どうしても実際の惑星の軌道に異常値が出てくる。これに対して、実際の計測値から理論を出すべきとして、ニュートン力学の修正版(適当な係数をつける)などがしきりと提出されたらしい。しかし、この中でニュートン力学をあくまでも「信じる」学者がいて、今まで知られていなかったもう一つの惑星天王星の発見につながる。この場合、なぜか(いかなる根拠でか)ニュートン力学を「信じた」結果である。

科学は因果関係を説明できると言っても、この因果関係というのも実に曖昧である。たとえば、「この紐は20キログラムの負荷をかけると切れる」という関係もそう簡単ではない。その時、温度が80度以下である、糸の表面にとがったかたいゴミ等が付着していない—等など様々な補助条件が必要になる。川上に雨が降ったから川下が氾濫した—と言おうとしても、やはり、ただし、最近川上の貯水槽がこわされた、川下の堤防が壊れていた—などといくつもの付帯条件あるいは追加的な補助仮説をつけないとこの因果関係は成り立たない。(このあたりは「哲学と現実世界」カール・ポパー入門 ブライアン・マギー著、「疑似科学と科学哲学」伊勢田哲司著、が参考になる)。

要するに、人間の知性に文科系とか理科系と言うような区別はない。一体、大学の進路で文科系とか理科系とかいう言い方がいつからできたのか。たとえば大学の元祖ヨーロッパではこのような文科系、理科系などと言うような区別・考え方はあるのだろうか。そう考えてみると博士号は Doctor of Philosophyではないかと思いつく。これは理系の代表、医学でも同じである。医者は博士号を持つと Medical Doctor, Doctor of Philosophy(Ph.D.)となる。つまり M.D.Ph.D となる例である(アメリカで専門医があつまったいわゆるメディカル・アパートがあるが、そこでは看板にこの称号がずらり並んでいたのを思い出す)。つまり大学は全て Doctor of Philosophy なのだ。Philosophy に文系も理系もない。人間の知つまりは理性が、どこまで究極の真実(それがあると仮定した場合の話であるが)に迫れるかは—本当に迫っているかどうかも含めて—一分からない。とすれば、人間の知の前進あるいはそのための努力を笑うべきではなく、また、その結果を謝る必要もない。—などと一人で憤っているうちに当の番組はなにやら曖昧なまま終わってしまった。

カテゴリ 未分類 パーマリンク

Gallery Aki Blog  
Proudly powered by WordPress.

Gallery Aki Blog

ギャラリー・安樹のブログへようこそ！

## 大学の設立

投稿日: 2012年11月22日 作成者: admin

頭が混乱したので、一度、整理をしておかなければならない。今回の3大学設立に関するいわゆる田中真紀子騒動である。3つの大学が、しかるべき審査委員会の審議を経て、設立の申請を文部科学省に提出したら田中大臣はこれを認めないという決定をした。これに対して激しい反論が巻き起こった。しかし、と考える。大臣は自らの判断で審査委員会、あるいは諮問委員会の判断に反論もできるし、反対することつまり答申通りにはならない—もできる。委員会の審査は所詮、委員のあいだの議論と結論であり、別に大臣がこれに拘束される必要はないし理由もない。答申が出たのだからあとは大臣が盲版を押せばよいといのは全く筋違いである。議員内閣制の下では、大臣は、原則的に主権者から選ばれた議員から任命される。とすれば最終責任は大臣にあり、国民に責任を負う大臣が最終判断をすることは当然である。

審議委員会、あるいは答申委員会と言われるものは専門家により構成されると言うが、実はこの専門家(つまり審議委員)の選任は役所つまり文科省が行う。これは筆者も経験がある。筆者の経験範囲でいえば、金融制度、および、外国為替の管理に関する諮問委員の選定などを経験した。だいたい役所の課長クラスが委員の案を作る。しかし、この審議委員をどうするか、バックグラウンドなどから見てどのようなバランスになるかは、その後の案件の進展にとって極めて重要であるので、大体は少なくとも局長クラスが判断する。一方、手続きとして、大臣の名前で問いつまりは諮問が出る。金融制度のに関して言えば、「現下の経済情勢にかんがみ望ましい金融制度如何？」—という類の問いである。そしてこれにこたえて何ヶ月後に答申が出てくる、という手順である。つまり大臣は問いを出し、審議会は審議会の意見を出したのだ。審議会が決めたわけではない。要するに審議会は当然ながら独立委員会ではない。

この騒動でいろんな反論が出た。その一つは、すでに審議会でさんざん議論し、文科省からの指導もあり、その結果決まったことを着任早々の大臣がひっくり返すことは許せない。大臣の資質を疑う、さらに総理の任命責任を問うというものである。しかし、この議論は理解できない。文部科学行政に(総理を除いて)最終的な責任を負う大臣が変われば行政は変わる。それにしても着任後わずか1か月で！と批判しても同じことである。これまでの行政についてはきちんと引き継ぎを受けているはずで、それを踏まえて新しい大臣が判断することを妨げるものは何もない。これと似たようなポイントに、これでは行政の継続性、一貫性が保てないというのもあった。しかし、それでは内閣の改造とは何を意味するのか。大臣を変える必要があるから内閣の改造が行われる。大臣が変われば行政が変わることはありうる。というより、むしろそれが内閣改造の目的のはずだ。そういえば、確かに法務省も大臣が変われば結果が変わるという例がある。行政はいずれどこかで転換していく以外にない。

さらに重要な事は、このような大臣の問いに答える審議会(あるいはその各委員)は、絶対に「結果」には責任をとらないということである。そういう仕組みだから、別に審議会委員を批判することは当たらない。これは強調して良い。確かに誠意を持って審議したのだ(報道によるとなにか分科会も含めて100回以上会合したとか)、しかし、その結果、大学教育に何が起きたかにはまったく責任を伴わない。これを判断するのは政治である。ここは明確にしておく必要がある。責任はすべて大臣が負う(なお、審議委員の名簿は文科省のHPで公表されているので、この点では透明である)。

さらにもっといえば、「行政組織」が決めたことではないか、それを大臣が変えるとは許せない、という反論があった。これはある政治家が述べた言葉で、かなり広く伝わった筈で、現に、筆者もテレビでこの発言が放映されるのを見た。しかし、こうなるとさらに頭が混乱する。筆者は、かなり前であるが、役人時代、大臣のお供で(実はお供のそのまたお供であったが)国会の委員会の末席に座っていた経験がある(実際はお供のお供に座る場所などあるはずもなく、寿司詰めのように立っただけであったが)。そのころの大臣は、竹下大蔵大臣。竹下大臣の名答弁は有名で、あるとき忘れられない答弁がある。どうい経緯だったか忘れたが、或る質問に、さすがの竹下大臣も答弁に窮するか、と思ったとき、大臣は次のように答弁した。—質問者の懸念・ポイントはわかるが、心配することはない—要するに 司(つかさ)、司(つかさ)がきちんと考えやっている—筆者はこのとき大いに感ずるところがあった。なるほど、我々、司、司がきちんとやっているのだ、国会が御心配になることはない—。しかし、これは、昔、遠い過去の話である。まさかこの亡霊が生きかえってくるとは、司、司と専門家たる審議会が決めたことは行政が組織として決めたこと、とはいまやまさか言えるはずもない。

そのうちに新聞論調を見ていたら、もっと驚くべきことに、このような事ではすでに入学の準備や心構えをしている学生の心に打撃を与えるものであり、これは学生たちの「学習権」の侵害である、と言う見出しが新聞に大きく出ている。しかし、どうなのか。文部科学行政に最終責任を負う大臣が納得しないような大学に学生を送り込むことは許されるのか。これこそ子供・学生の正当なる教育を受ける権利の侵害であろう。

もっと、悪意に考えると、本件は、文科省の「お役人」が、審議会にいろいろアドバイスし、こうすれば認可されますよ、逆にこれでないとは認可されませんよと誘導しつつ、審議会の答申を得ると今度は大臣に答申が出てますからと御認可を迫るといような構図が表れている、と批判することもできる。いわゆる、審議会隠れ蓑論である。大臣はこの構図を脱却しようとしたのだ。

と頭の中をいろいろ整理してみたが――

これらは、要するに書生論にすぎず、すべて間違いである、と考えるに至った次第である。と言うのも、本件騒動以来、眼を凝らして新聞論調やテレビ報道を見たが、以上のような論調は皆無であった。わずかに藤村官房長官が一田中大臣はなにか間違ったことをしているわけではない――というようなコメントを述べたと報じられたがくわしいことはわからない。日経の論説が審議委員のメンバーの見直しは意味があると述べていたことを思い出すだけである。ほとんどというか、すべての論調は、殿ご乱心！、またもやったか！――と言うたくいであったことは注目に値する。なにしろ、まさに有識者であり敬意を払われるべき大学の理事長が、3人そろって公開されたマイクの前に立ち、すでに準備を進めている、これが認可されないとは許しがたい、法的な措置も考える、と言うような趣旨を述べているわけだからこれは尋常ではなく、この3人の理事長の発言は当然重みを持っているはずだ(しかし、認可書も貰わずにどうして、いかなる根拠で、建物を改築し、学生の募集を始めてしまったのか、と聞きたい。また、改築などの必要があると言うなら設立後何年かきちんとフォローアップすればよいだけだ、といいたいのがこれは冒頭の議論の蒸し返しなる)。つまり、殿ご乱心で過ぎてしまったが、ここに行政と政治の関係つまり、大臣(主権者から選ばれた政治家)―役人(身分保証のある官僚)―専門家(諮問に答えるだけで最終的な責任を負わない)審議委員――それぞれのの仕事と責任は何か、と言う問いが隠されていることを認識すべき絶好の機会であったはずだ。

カテゴリー: 未分類 [パーマリンク](#)

Gallery Aki Blog  
Proudly powered by WordPress.

## Gallery Aki Blog

ギャラリー安樹のブログへようこそ！

## 医療保険

投稿日: 2012年12月5日 作成者: admin

医療保険といえば日本は国民皆保険である。これは国がすべきこととしてはなんとも素晴らしいことだ。誰でもみんな元気に働いてほしいし、また元気で働きたいと思っている。しかし、病気に関しては人のままならないときがある。そういう不幸・不運な時は、あるいはそのような時こそ皆で支えあつたらよい。平等であるということは、医療内容も平等である。つまり、仮に、運悪く路上生活者となったとしても、病気なら可能なかぎり最先端の医療が受けられる。そもそも社会あるいは国家とはどうあるべきかなどと言うような議論の前に、このような支えあう姿勢、あるいは仕組みこそ大切だ。日本国民であるということが、いまさらながらありがたく感じる時である(勿論、負担と言う点では、治療を受けた時の個人負担があり、またしかるべき医療保険料も払っているわけであるから全てを国が負担しているというわけではない)。

一方、あの豊かな国アメリカでは、このような国民皆保険制度の導入の是非について大議論になったようである。たしかクリントン時代、ヒラリーが推進者となって延々たる議論の末、失敗。オバマの時代となってようやく実現にこぎつけた。尤も、これまでもこの国民的な医療保険制度については様々な改革案があり、提案されてはとん挫するというような歴史を繰り返してきたらしい。

このような相互扶助、国家の基本機能と思われるようなことでこれだけでもめるとは、アメリカは意外に厄介な国と言うより、こればかりは遅れた国と言う気がする。何しろ働き盛りの国民の半数近くが無保険と言うような信じがたいような状態が続いていたのだ。実際アメリカの民間医療保険は割高である。筆者も依然アメリカに長期に滞在する可能性が出てきたので、民間保険会社のエイジェントと接触したことがある。大体聞いてみるとほとんどスケルトン・クラス、つまり給付可能となる条件を相当に絞り込んだベーシック・コースでも、大体月に5万円くらいかかる計算になる。しかし、エイジェントからはプラス・アルファをつけることをしきりと勧められた。いわく、仮にちょっとした交通事故で手術、入院ともなれば15,000ドルはかかる。これを考えればベーシックに少しでも上乗せしておいたほうがよいとしきりと勧める。こうなると僅かにグレードを上げるだけで月7万円はかかる計算になり、容易ではない(が、結局日本に帰ることになり加入はしなかった)。

ところで先般アメリカで医者をしていたという日本人と話をすることがあった。このとき当然ながらアメリカの医療制度が話題になり、筆者は、今般、クリントン、オバマなどの大変な努力によりついにアメリカも国民皆保険への道に進んだことはあるべき姿として喜ばしいとのべて得意になっていたら、その医者は、「誠に残念だ。」と言うのである。「能力を持ち努力をする人は自分で自分の面倒を見ればよい。それがアメリカだ！」これを聞いてまさに驚いたが、しかし、以来考え始めた――

ということで、思い出したが、以前ちょっとしたことで3日ほど入院生活を余儀なくされたことがある。その間することもないのでテレビばかり見ている。ということである医療番組を見た(病院の患者向けと言うわけではなく普通のいわゆる教育的番組の一つである)。心臓のバイパス手術の過程をまさに手術の手順に従って生放送するというような番組である(実は、これはアメリカでの手術の映像)。であるから開胸されたと思われる映像のなかに大きな心臓が見える。実際動いている。驚くべき映像だが、同時にこの動いているものは巨大な白い塊である。ナレーションによると、これは心臓を囲むものすごい脂肪とか。当然と言うべきか、心臓の血管はいわば(糖尿病なのかどうか分からないが)ぼろぼろになっているよし。その中でバイパス手術が行われる――というじつに難しい状況乗り越えていく近代医学の進歩と医者の賞嘆すべき努力と熟練技術―これがまさにこの番組のテーマである。なるほどと感心する。しかし、同時に、このときふと、一体、この患者はどういう生活をしていたのかという疑問を感じた。

先日やや遅くランチに中華料理屋にはいった。しばらくするとサラリーマンと思しき3人組がドヤドヤとやってきた。何か一仕事終わったという感じでまずはビールである。やがて食事が始まったらしく、しきりとご飯のお代わりをしている(お代わりは無料)。若く元気なサラリーマンの姿である。とみると、一人が中華ソバを食べているが、その隣にお盆に載せて中華ご飯らしきものが置いてあり、後ろの席が空いている。ということは3人組ではなかったのか？とっていると、なんとこんどは、そのソバ食人間は、隣の席に移って中華ご飯を食べ始めた。会計で一緒になったので、そのままついていくと外はち

よつとした広場である一と見るとそろって待っていましたとばかり喫煙である。今頃珍しい若く元気な、というかむしろ好ましいようなサラリーマンの姿である。しかし、中華はジャンクフードとは違うとはいえ、このような生活にはリスクをとまなう。いずれ年齢とともに変えていかなければならないが、そのようなコントロール、自己管理に努力した人としなかった人——そして、しなかった人を支援するのが国の基本的責務か？

こういう眼で見ていると、今回のアメリカ大統領選でしばしば報道されるロムニー候補の言っていることもなにか分かる気がする。

つまり、この議論はアメリカの精神的なバックボーンが問われた議論だったんだ。と言うように考えると、ロムニーに支持者が集まったことも分からないではないし、あれだけ長年にわたり議論され、うよ曲折を経るにあたいする議論だったのだというも納得がいく。ロムニーの議論を、日本で報道される限りで聞いていると、要するに弱者切り捨てに近い。おそらく現在の日本では、これはもっとも忌み嫌われる言葉であろう。このような主張がなぜあれほど人気を集めるのか。働く力と能力のある人は、病気の治療などは自己責任だ。自立自尊の精神を忘れるべきではない。不幸にして貧しくして病気におかされたら、そのような人には、既にメイデイケイドという支援制度がある(これは上に述べた医者も言っていた)。また、老齢になればメイデイケアもある。国民皆保険などは要するによけいな御世話だ、と言う議論もたしかに成り立つような気がしてくる。これは財政負担とか言うような問題を越えて、要するにアメリカ精神の堅持が問われる問題であり、ここで問われているのはアメリカ精神が蝕まれる危険だ。と言うように整理してみると、なるほど上に述べた医者が言うように、それがアメリカだ！ということもわかってくる。

東京都ではいわゆる老齢となると、都バスの無料定期があるそうである。また、都営地下鉄は一定の路線に乗る限り年間定額(1万円くらいとか)で乗り放題というような支援も行われているようである。しかし、筆者の個人的なことを言えば、いまのところこのような利便(つまりは支援であるが)はあえて避けることとしている。別にこのような措置を利用することは悪いというわけではないし、これまで十分働き、多分、税金もおさめてきたお年寄りに対するリターンであると言うように論理的にも説明がつく。また、いずれにせよバスや地下鉄の支援であり別にタクシー代を支援しているわけでもない。しかし、どうも今のところ利用する気がしない。今はとりあえず元気に歩ける。よってせつせと歩く。坂道などはむしろ意欲を持って登る(それにしても東京は坂道が多い)。個人的にはこの意欲を維持したい。よって無料定期などには、いまのところ(可能な限り)手をだす気がしないと言うことである。つまりお金の問題ではなく、年寄りの冷や水とも言われるような精神堅持のためである。

先日、坂東真理子氏の「女性の品格」を読んでいたら、母親の介護について、多分認定を受けることはできるだろうが、いまは可能なかぎり控えていると書いている。なにか似たような考え方と感じた。そういえば曾野綾子氏の本を読んでいると、ご夫妻とも一応経済的な余裕がある限り支援は遠慮しているそうだ。と見ると同じような考え方の人も多いのではないか。勿論、自立のトライむなく不幸にして困窮・老齢・病苦となれば社会に支援してほしいとは思いますが。

要するに、これは財政の問題ではなく、精神の問題だ——と考えてきたら先ほどの医者の言葉も荒唐無稽とも言い切れないと考えた。

カテゴリー: 未分類 [パーマリンク](#)

Gallery Aki Blog  
Proudly powered by WordPress.

## Gallery Aki Blog

ギャラリー安田のブログへようこそ！

## 政党の林立

投稿日: 2012年12月14日 作成者: admin

衆議院選挙の日程が決まり、候補者が一斉に名乗りを上げ始めたが、同時に様々な政党が立ち上がり、いまや12党、政党林立の気配である。このような状況については批判的な見方もあり、急きょ旗揚げした「未来の党」などについては、原発廃止でこの指とまれとばかりに集まっただけで、これで政党をなすのかという批判がある。たしかに、「未来の党」もしばらくすると子供手当の充実のような綱領も出し始め、あわてて政党としての形を取ろうとしているように見える。

しかし、今回の政党の動きの中で実に興味あることは、民主党が選挙候補者の認定に当たって党の方針(綱領というべきか)に従うと言う一札に署名を求めたことである。元首相の鳩山氏はこれには署名できないとして民主党の公認を断念、ついに立候補を取りやめた。聞くとところによるとTPP交渉の参加について意見の違いがあったとかである。このように公認の際に署名を求めるとは、今までも行われていたのかどうか良く知らないが、この一劇は、そもそも政党とは何かについて考えれば考えるほど面白い論点を提起している。

もし同じように、貴方が政党に加入する(あるいは選挙の公認を得る)ために署名を求められたら、よるこんで署名するか或いは待てよ、となるか。仮に、当の綱領(マニフェストでもよい)の一つに反対だとしたらどうするか。鳩山氏が直面した問題であるが、これは単に一つのエピソードにとどまらず、基本的な問題として一般化することができる。たとえば、ある政党の綱領にA、B、C、D、E、Fがあると、仮にこのうちBとDに賛成できなかった時どうするか。署名を止めるか、とどまるか、その判断を分けるのはなにかという問題である。そこで次のように問題を整理してみる。まず多数決方式がある。全体の数の中で賛成が多ければ署名すると言うわけであるが、これではあまりに無節操でありまた同数の時どうするかという問題も残る。そこで、次に加重方式が考えられる。つまり、この6個の綱領の中でも特にAとDとFが重要である。他は軽い。よってA、D、Fが認められるならば署名する。しかし、この方式にも問題がある。このA、D、Fが他とくらべてなぜ重要なのかその基準をはっきりしておかなければならない。つまりA、D、Fと言っても現実には様々なバージョンがありうるから、このような状況に対応できるようにするためには、ここで政党に加入するための一つの基準つまり考え方を決めておく必要がある。これは、言い方を変えれば綱領A、D、Fの理念化である。つまりある「考え方・理念」に賛同できれば署名することにしておけば、このような多数決まがいの方式に煩わせられることもなく、一つの政党として存立理由があきらかにになり、これに賛同できれば署名できる。このように考えてくると、政党とはA、B、C、D、E、Fというような個別の綱領・政策を寄せ集めたものではなく、なんらかの理念によってつくり、結ばれ、成立するものだということが分かる。つまり、政党とその政党の掲げる理念を切りはなすことはできない。政党の理念化が必要だ。もし上に述べたようなA、D、Cに賛同できるかどうかで加入離脱を繰り返していたら、政党はいまの12どころか、際限なく増えていくだろう(勿論、政党助成金とかいろいろ現実的な問題は別として)。

実際、原子力発電の廃止でこの指とまれと集まった党が、なにかあわてて子供手当の充実などをかかげるのを見ると、一種の戸惑いを感じるのはこのせいである。さてよ、この党の結党については、原子力発電の廃止と子供手当をむすびつける、つまり、これらを超えた一段高い理念があるのだと気づき、読者は、このいわばA、B共通の理念をさがす作業を課せられたような気分になるからである。マニフェスト方式がなにか非常に人気がある。しかし、マニフェストは単に政策の羅列であってはならない。それはある理念をうかがわせるものでなければならぬし、理念あつてのマニフェストだ。

理念なきあるいは理念の混乱する現在の日本の政治の下では党は増えるばかりだ。今後とも綱領(マニフェスト)を足したり引いたりして離散集合を繰り返すだろう。日曜日のNHKにあらわれた党首達が語っていることはそういうことである。

と言うところで、この稿はおわりであるが、このままでは、次の疑問が残る。それでは理念とは何なのか？理念が必要だと、究極の理念は何であろうか。A、B、CというマニフェストはA'という理念の下にある。D、E、Fと言う理念はB'と言う理念の下にある。とすると、次はA'、B'を超える理念A''は何かということになる——このように考えを進めていくと——ここにはさまざまな議論があるが、それらを飛ばして簡略化すると、結局、究極の理念は神にいきつく。神を敬うという理念に反対する政党を造り、まとめることは難しい。たとえばアメリカ。アメリカは社会的な雰囲気としても政治的な前提とし

でも非常に宗教的である。そもそも、アメリカは信教の自由を求めて建国されたという歴史を持つ。実際アメリカに住んでみるといたるところが教会である。道を教えるのに、教会の角を曲がってなどといってもほとんど意味をなさなくらいだ。大統領の就任式では聖書に手がおかれる。つまり建国には神あるいは神話が伴う。宗教と建国、したがって政治とを切り離すことはできない。現にドイツには宗教を党名に入れているような例もある。(ドイツキリスト教民主同盟——現に政府与党である)。このように宗教と政治理念とは切り離すことができない。

ここで、勿論次のように問われるだろう。建国の歴史はわかるが、宗教は政治とは別物である。政治は深く現実の、つまり、現世の利害、権益、損得とかかわりあっているはずで、それが宗教的な原理によって左右されることは許されない。というより政治と宗教の分離は人類発展の歴史のなかで形成されてきた世界的な文明の一つの成果であるはずだという考え方が強い。日本でも現状まさにこのような考え方が普通であり、そう言えば、以前ランチをしていた時、或る人から、「日本では信長の叡山焼き打ちにより、政治と宗教の分離が歴史的に決定づけられた」と言うのを聞いて、なるほどそういう見方もあるかと思った記憶がある。

しかし、上で見たように、政党—理念—宗教は並び立つというか、むしろ一つの直線上にある。ここで思い出すが、元総理福田赳夫は、「政治は最高の道徳である」といったと伝えられている。これを聞いてすぐには分からなかったが、じつに含蓄が深い。理念に基づいて政治はおこなわれる。個別の綱領は単にその具体的な応用問題に過ぎない。

さらに、疑問があろう。神なき共産主義 まさにマルクス主義はどうか。マルクス主義は、かつて人道的な感覚でとなえられていた社会主義を空想的社会主義と一笑に附し、科学的社会主義(この言葉には、筆者を含め、ひどく若き日の郷愁を感じる人は多だろう)と言われ、別格扱いだった(というか、であることを主張した)が、このマルクス主義も一つの理念(勿論、これは神なき理念であるが)である、あるいは、にすぎないということは、例えば、カール・ポパーの「開かれた社会とその敵」(未来社)に繰り返し出てくる通りである。共産主義も理念のひとつなのだ。

現在、つまり、戦後1945年8月15日以降の日本人の大部分が強く支持する政治理念は何だろうか。個人の自由、人権尊重、そこからくる民主主義、そして国家の役割としての社会福祉的な政策等であろう。これらの理念はどこから来るのか。ここで考える一つのヒントは、一神教としてのユダヤ・キリスト教である。神は自分の似姿で人間を作られた。神の前では全ての人々は平等である。ここで思い出すが、オーストリア皇女の生涯を描いた「エリザベト」というドキュメンタリー小説にオーストリア皇帝の葬儀の場面がある。最後に遺体が墓地に運ばれるとき、一種の手続きとも思われるが、墓地の門番に「オーストリア皇帝であるぞ！」といっても受け入れられない。一連の手続きを経て、一人のキリスト教徒である、と告げると初めて墓地の門が開かれるという印象的な場面がある。

神が作られた身体を傷つけることは冒涇である。この観点からは、人間の行う死刑も大きな争点になる(一般に残酷刑は禁止されている。日本も憲法上禁止規定があるのもこのような理念の一つである。これについて思い出すが、絞首刑も体重の増加により残酷刑になるとして訴訟となった例もある)。隣人を愛せよと説いたキリスト教は、社会福祉の長い歴史を持ち又理念としてその原点となる(ユダヤ教にもその長い歴史がある)。実際、戦後日本の悲惨な荒廃の中で「蝋の町」の活動を支えたのは神父(勿論日本人もいた)であったことは十分記憶されてよい。

要するに、政治的には日本は一神教であるユダヤ・キリスト教の理念の下にあり、いまや日本人の大部分はこれを強く支持している。とすると、アジアは決して一つではない。

カテゴリ 未分類 [パーマリンク](#)

Gallery Aki Blog  
Proudly powered by WordPress.



## Gallery Aki Blog

ギャラリー安田のブログへようこそ！

## 政治と宗教

投稿日: 2012年12月24日 作成者: admin

前回の稿で書いたように、政治と一理念一宗教とを一直線に並べることについては、疑問というか異論があろう。しかし、これはいわゆる空理空論の類では決してない。前回も書いたように、元総理福田赳夫氏は「政治は最高の道徳である」と述べたとされる。福田赳夫と言え、日本の政治家の中で数少ない尊敬されている政治家であると言っていいと思うが、このような言葉をただ意味もなく使っただろうか。この言葉には何か響きがある。政治とは決して、税金を増やしたり減らしたり、ダムを造ったり、最低賃金を定めたり、そういった事柄の寄せ集めではない、と言っているのではないか。そして、もし「最高の道徳」であるとしたら、それでは、この道徳は、何に依拠しどこから来るのか。この問題を考えた一人がカントである。カントは実践理性批判の中で、人間の道徳の根拠を求めていくと最後には神を要請すると述べている。カントは心の中の道徳について美しい言葉を残しているが、これは墓碑銘に刻まれている。

少し現実的に考えて見よう。今アラブ諸国で、連鎖的に独裁政権が倒れ、次の政治をどうする、どうなるかで世界が注目している。独裁政権が倒れれば、次は民主的な政体へと移行するだろう、すくなくともその窓は開かれたはずだ。これが「アラブの春」(誰が言い出したのか、以下に述べる通り、これは意味不明の言葉であるが)といわれる所以である。しかし、現実には、むしろ宗教的な回帰現象が起きている。これは何故だろうか。これは政治と宗教との関係を考えてよくわかる。これまでの独裁的な統治機構が崩壊し新しい統治が求められる時、もっとも強く訴えるものと言え、これは神の言葉である。もし我々がいかに生きるべきかについて神の言葉が残されておれば、これに従わない理由はない。問題はこの時、神の言葉が必ずしも明確ではなくかつ具体性に欠けることであり、神は日常の生活、いわんや政治的な決定とはおよそ遠い存在ではないだろうか——と考えるが実際には、そのような言葉を残している宗教は存在する。このあたりのことは、マクニールの「世界史」(中公文庫)の記述を借りよう。(p. 335 イスラム教徒の聖典と律法)

——神はどう望まれるかを知りたいと願った。それを知る方法は、預言者マホメットの言葉や行為に先例を求めることだった。——(マホメット)が生前、神の啓示を受けて発した言葉の数々が、この町(メダイナ)で集められ細心の注意を払って編纂されたが、それは彼の死(632年)後まだ何年も経っていなかった。——コーランが直接指示していないその他の多くの事柄についても処理しなければならない。こういう場合の問いに対する答えとして——マホメットの日常の言行を拠り所にした。それでもなお足りない時にはマホメットと密接な関係のあった人々の行いが補助手段として用いられた。さらに、——適切な回答が得られない場合にはウラマー(神学者の集団)は、類推によって問題点を処理することを認めた。——  
——こうした手段によってイスラム学者たちはまもなく精緻な律法の体系を作り上げた。——

もし、相続の問題、結婚の仕組み、土地争いの裁き方、しかるべき刑の課し方、さらには納めるべき税のあり方などについて、神の声が記されていたとしたら、これに従う以外の道があるだろうか。逆に、これら相続や、争い等の正しい処理を望むとき、いかなる原理・理念に従うべきか、と考えるてもよい。もし上に述べたような宗教を前提とすれば、人々が求めるのは政治家であるはずはなく律法学者となるはずだ。

ユダヤ教(つまり旧約)も多数の戒律を残している。一番有名なのはモーゼの十戒であるが、勿論これだけではない。ここでも律法学者の努力と精密な研究によって追加的に多くの戒律が生み出されている。たとえば、その一つに食事の前に手を洗うべし、と言うのもある。実際、新約聖書にはイエス・キリストがパリサイ人や律法学者たちから、何故パンを食べるときに手を洗わないのかと詰問される場面がある(マタイ 15章)(ちなみに、この時のイエスの答えは、——汝ら聞いて悟れ、口にいるものを汚すに非ず。口より出づる物こそ人を汚すなれ、と。——)。そのほか鱗のない魚を食べない等等。「ユダヤ人の歴史」(ポール・ジョンソン 徳間書店)によると、これらの戒律は実に600項目を優に超えると言う。このように、食事の仕方などは、いわば子細なものであるが、これらのなかで、たとえば土地をめぐる争いごとの始末、結婚、相続、貧しい人の救済などについてあるべき姿が含まれているとしたら、政治は何をするのか。

ということであれば、独裁的な統治機構が崩壊したのちの混乱を救う政治は、神の言葉であろう。求められるのは政治家ではなく高度に専門的な訓練を受けた律法学者である。「アフガン0年」という映画がある。おそらく、アフガニスタンの今を

伝える(と言っても古く昔ながらの姿のようであるが)貴重な映画であるが、ここではいろいろな争いや土地や部族を巡る問題を宗教家(多分、律法学者と思われるが、どういう訳か長椅子のようなものに横になっている)が次々とさばっていく姿が出ている。

ところで、新約の世界では上に述べたようないわゆる律法はほとんど出てこない。新約は旧約の律法の世界を批判し、乗り越えたところから始まるとも言われる(むしろ、旧約を否定したところから始まるまで書いている本もある)。ということで、新約の世界(カソリック、そして無数のプロテスタント会派)では戒律と言われるようなことは、ほとんど書かれていない(十戒には触れているが)。実際、旧約の世界を引きずる律法学者たちが、イエス・キリストに、もしこれらの律法を守らないならば何を守るのかと尋ねる場面がある、このときのイエスの言葉は、「第一に、心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして神を愛せ。そして、第二に、隣人を自分のように愛しなさい。(マタイ22章-34節)」となっている(そして、これだけである)。このように新約の世界では戒律がほとんどなく、結果として律法学者の活躍する(少なくとも政治的な)分野はほとんどないと言ってよい。しかし、勿論、新約と言っても、人間(心と身体)は神が造り賜うたものであること、そして、であるなら、全ての人間の完全な平等(ただし武器を持つことのできない女性は子供と同じように扱われているので、女性の平等をどう考えるかはかならずしも明確ではなかったという点はある)、人間理性(spirit)への信頼、さらに、不運で貧しい人々への献身的で人道的な救済、これらの「理念」は新約においても連綿として引き継がれている。ついでながら、マクニール「世界史 上 p.406」によると、民主主義的な代表議会政治の発展について、14世紀ごろに「教会の中の司教の選任に使われ、—あらゆる正当な権威は、任命ないしは選出された代表によって表明された、定められる者たちの同意から生まれる—このような考え方は、容易に世俗政治に持ちこまれることができた—」と指摘していることは興味深い。

おそらく読者は(勿論、筆者も含めて)、人間(心と身体)の尊厳、すなわち人権、ほのかな光とはいえ理性への信頼、法の下の人間(男女)の完全な平等、そしてこれらを前提とする民主的な手続き、さらには、基本的な社会福祉の仕組み—これらを強く支持するに違いない。それならば、これらの理念或いは価値が何に依拠しているのか、どこから来るのか、という問いを考えてみるとよい。あるいはこれらが疑われたらどのように答えるか?人間の生き方あり方そしてその政治的な処理の仕方についても、様々な選択肢がある。それではなぜ、上に述べたような理念が、日本人によって信じられているのか。これらの理念は一神教としてのユダヤ・キリスト教の下にある。

カテゴリー: 未分類 [パーマリンク](#)

Gallery Aki Blog

Proudly powered by WordPress.

## Gallery Aki Blog

ギャラリー安田のブログへようこそ！

## 確率的风险管理

投稿日: 2013年1月3日 作成者: admin

南海トラフに面して立地している浜岡原子力発電所は、現在運転を停止している。これは重要な政治的な決断であるが、この時の菅元総理の発言を覚えておられる人も多いと思う。菅元総理の発言によれば、「今後30年間に、この地域で震度7を超える地震が発生する確率は70%である」。この発言は非常に強い印象を与えた。特に、この70%と言う確率的な表現がグッと来る。たしかに、これは大変だと言う感じが伝わってくる。なるほど浜岡原発の運転停止はやむなし。ある意味では歴史に残るような立派な政治的な決断である。しかし、その後、何か気になって仕方がない。つまり、この70%と言うのが何を意味するのか、どうも具体的なイメージがわいてこないのである。しかし、なにか大変だと言う感じは伝わってくる。

70%をどう理解するか。%と言うからには、何か $A \div B \times 100 = 70$ という計算が行われているはずであるが、このAとは、またこれを割るBとは何なのか。ここで急いで、昔むかしに勉強した確率論を思い出してみる。まず、今後、起こりうる「独立事象」をすべて数える。これがBとなる。そしてそのうちで、該当する「独立事象」の数を数えAとする(この独立ということに、昔悩まされた記憶がある。数える事象は相互に独立でなければならない)。ということまではわかるが上の菅元総理のステートメントで使われたAとBは何なのか？と考えると、以上のような計算はサイコロゲームのような場合にはあてはまるが、この地震発生率の計算にはうまくあてはまらないようだ。

確率には統計的な確率と言う考え方もある。これは、昔、第一大戦前だと思われるが、あるドイツ軍の連隊で一年間に馬に蹴られて死亡する兵隊の数が毎年5人程度出てくる。10人でもなくまた0と言うわけでもないと言う観察記録から始まった言われている。馬に蹴られて死亡するなど言うまったくの偶然と思われることが、なにか統計的に法則を持っているらしいということには不思議な気がする。このような観察は、その後イギリスで教会に残された出生と死亡記録を調査することによって、生存率または死亡確率として使われるようになったらしい。となると、問題の地震発生確率は、このような統計的な処理をベースとするいわゆる統計的な確率なのだろうか。

とすると、毎日くりかえし報道されている気象情報、例えば、あすの降水確率などというのはどうなのだろうか考える。明日の降水確率40%と言う時、この%を決める上記AとBはなにか。これについては、インターネットを検索してみると、多少の説明が出ている。これらの説明によると、ある地域が問題の場合、その地域の過去何十年かにわたる気象統計を調べる、つまり、当該地域の雲の状況、気圧等高線、風などのデータを集め、これらがあるパターンを示していた時に、その地域で雨が降った事例を調べる。こうして過去の事例を多数集めれば、あるパターンの時何回雨が降ったかが統計的に観察できる。これが統計的な降雨確率である。つまり、ある地域について、過去と同じパターンの気象条件となることが予想された場合(ただしこのパターン予想が外れる可能性をどうみるのか気になるが)、上記統計で計算され確率を、当該地域の降雨確率として発表すればよい。ということは、ある地域についてある気象パターンの総数をBとし、過去このパターンの中で実際に雨が降った回数をAとすれば計算できる。それでは、この統計的な処理を浜岡原発のある東海地域にあてはめるにはどうするか、となるとまたイメージがわかなくなる。過去何十年あるいは何百年を観察して得られるBはなにか。また現に地震が起きた回数であるAはどうなるのか。一体そのような統計はあるのだろうか。しかも、この確率は、今後30年の間に、という期間前提で計算されている。が、これがどのように(つまりこの期間を短く、あるいは長くとしたとすると、確率にどのような影響が出るのか)計算にくみこまれているのかどうか、と疑問が消えない。

とって、地震発生確率についてインターネットなどで調べてみてもあまり説明はなく、よくわからない。しかし、計算の結果(これは政府委員会による公式のものらしい)は詳細に発表されている。たとえば千葉県 市川市 76.8%という具合である。つまり、およそ、あるいは大体00%程度ということではなく、小数点以下までが計算されていることが分かる。同時に、これら地震発生確率に関する専門委員のコメントとして、「この確率が低いからと言って地震が起きないというわけではありません。やはり十分な注意が必要です」とでている。それは、たしかにそうだろうと思うが、しかし、それなら逆に、この確率が高いつまり70%でも地震がおきるといっても、御心配なく——と言うことも同時に成り立つような気がしてくる。結局、上のような菅元総理発言の意味は何だったのかに戻ってしまう。

確率的なリスク管理のむつかしさというか、イメージの作りにくさについては、次のような経験もある。1990年代初めにアメリカにいたが、当時アメリカでは確率的なリスク管理の手法が、ビジネスにも次第に浸透し始めた時期に当たり、銀行など金融機関のリスク管理にも確率的な手法が使われるようになっていた。これは、VAR(バリュアットリスク)を計算すると言う手法であり、途中を飛ばして簡単にいえば、ある一定期間中に当該金融機関の資本が全損となる(つまり資本では支えきれない)ような損失が発生するリスクを教えている。これが5%なら、現在の経営を続けた場合、ある一定期間中に資本全損つまり当該金融機関が倒産する確率5%と言うことになる。当時、日本ではバブルがはじけた直後で、日本の銀行、住宅金融会社等のリスク管理が誠におそまつだったのではないかと、つまり、日本の金融機関が貸出先の社長の個人保証と土地担保とに依存していたのは、如何にもアナログ型であり、これに比べて上記のような確率的なリスク管理はデジタル型とでもいうか、一歩進んだ管理のように見えた記憶がある。しかし、この確率的リスク管理にも、その理解の仕方、使い方には難しいものがある。もし、あなたが、銀行のCEOで、計画されているような投資をおこない、結果として資産のポートフォリオがこうなった時、VARによる確率5%、ただし、収益は上がると言われた時どう判断するか。成程、倒産危険はあり、それが数字として表わされている。しかし、一方見方を変えれば倒産しない確率が95%もある。であれば、前に進めと決断をするということも確かに理解できる。というよりむしろ強気で有能なCEO(と思われたい)なら、これでゴーサインを出さないようでは、資格が疑われるとでも言いたいくらいである。アメリカであれほど批判されたリーマン・ブラザーズもこれをやったのだ。当時のリーマンCEOリチャード・ファルドは議会で繰り返し証言している。つまり、われわれは、きちんとリスク管理はした。しかし、起りえないはずのことが実際に起きたのだと。たしかに、起きてしまえば、確率はすべて1=100%になってしまう。

さて、冒頭の菅元総理のステートメントに対する筆者の理解はここまでである。このステートメントは、たしかに、強い地震がくるかもしれませんが、と言われるよりもグッとぐっとくる。グッとくるけれど、なにか理解できないもどかしさがある。

カテゴリー: [未分類](#) [バーマリンク](#)

Gallery Aki Blog  
Proudly powered by WordPress.

## Gallery Aki Blog

ギャラリー安樹のブログへようこそ！

## 帽子(ハット)

投稿日 2013年1月14日 作成者: admin

帽子を愛用している。帽子と言ってもやや古めかしいともいえる中折れ帽子、ハットである。帽子にもいろいろあり、いわゆる野球帽はキャップである。登山帽というような帽子もある。これは一般にやわらかく、かぶるとまわりの「つば」は多少垂れ下がるばかりでなく、場合によっては折りたたんでズボンの尻ポケットにつっこむことができる。もっぱら愛用しているのは、このようなキャップでもなく登山帽でもなく中折れハットである。中折れ帽子をしっかりとかぶる。フェルト帽子ともいわれるが、このフェルトの毛としては、じつは野兎(hare)の毛が使われている。

現在では、このように男が日常的に中折れ帽ハットをかぶることはなにか冷たいまなざしがある。しかし、少し時代をさかのぼると、戦前は勿論、戦後も長らく帽子をかぶることは当たり前のことであった。これは、たとえば昔の記録映画や古い(白黒)劇映画などを見ても明らかである。場面によってはものすごい数の帽子が見える。つまり、男はほとんど帽子をかぶっている。ある説によると、当時(戦前あるいは終戦後しばらく)は、むしろ帽子によってある程度その職業更には社会的な地位なども分かったらしい。例えば、烏うち帽子(ハンチング)は職人がかぶることが多かったそうである。これは西洋でも同じらしく、古いギャング映画のみならずハンフリー・ボガードも帽子(と当時は煙草)なしでは出てこない。しかし、いまや男の帽子はほとんど見かけない。時代は変わると言うが、この帽子の数の変化を見ただけでも時代の動きが産業に及ぼす影響を如実に見てとれる。なぜこれほどまで中折れ帽子いわゆるハットが使われなくなったか。これには諸説あるらしいが、一つの有力な説は自動車の普及である。実際にハットをかぶって見るとよくわかるが、ハットをかぶって自動車に乗ろうとすると、まず間違いなく帽子が引っかかる。さらに座席に着くと運転席はもちろんであるが後部席でもハットの後ろまわりの「つば」が座席のヘッドレスト(むちうち症防止のため、

いまではヘッドレストのない車はほとんどない)に引っかかる。つまり、自動車に乗ったらほとんど間違いなくハットを脱がなくてはならない。これは確かに面倒である。筆者も、結果として帽子をタクシーの中に忘れてきてしまった経験もある。

ということで、時流はハットに全く逆風と言うか、ほとんど忘れられた存在だ。しかし、ハットの効用をもう一度指摘したい。

一つには、防寒である。帽子一つで下着一枚違う、ともいわれる。この寒空に帽子は欠かせない。同様に夏は直射日光をさえぎってくれる。髪の毛の薄くなった頭に直射日光は耐えがたく、帽子なしでは暮らせない。実際これは切実で、帽子に慣れると、あの直射日光に額と頭のてっぺんをさらすことはほとんど苦痛に等しい。

次に、注目すべきはサングラス効果である。帽子をかぶると、世の中は帽子の「つば」の下からひそかに窺うように見える。つまりこちらの眼を直視されることはなく、ひそかに世の中を見るという気分を味わえる。あの濃いサングラスを駅など普通の場で架けることに抵抗のある人には、ハットこそサングラスの代わりになる。

しかし、以上のことであれば、キャップ(野球帽)でも、あるいは烏打帽でも同じかもしれない。しかし、実はハットは全く違う。ハットは、生活のちょっとした小道具役として使えるのが非常に面白い。つまり、生活の中の様々な感情の表現として使えるのだ。ハットのかぶりかたとしては、前を少し下げ、つばは後ろを丸く上げるが前は少し下に向けてまっすぐしておく(少し斜めにかぶってもよい)のが基本マナーである。そこで、たとえば、ハットを思い切ってあみだにする。と、なにか自分は疲れた、すごく落胆しているというような感情を表現できる。映画なども、一仕事おわってヤレヤレとともいうような場面、椅子に崩れるように座るとき人差し指で帽子の前のつばをグット押し上げてあみだにする。あるいは、このような帽子の操作は、皆の中で自分は考えが違うぞというような感情を表すこともできる。つまり、帽子のかぶり方は一つで身振り手振り、或いは男には出しにくい表情の変化に代わる役を果たすのだ。街で知人とすれ違う時にも何か声をかけ難い気分だがそのまま通り過ぎるわけにもいかない。そんな時もちょっと帽子を持ち上げる(あるいは右手でつばに手をかける)だけで、礼を失せず立派な挨拶になる。もうひとつ、実におもしろいのはちょっとしたレストランに入るとき、このハットをとる動作とともにハットを手を持って入口に立つとなにか少し違う。レストランを訪れた上客という雰囲気を出せるから不思議である。フェルトの中折れハットを片手に入ってくるお客には、なにか、レストラン側も丁寧に案内する——と言うよう

な雰囲気が出てくる。是非、しかるべき紳士としてハットをかぶることをお勧めしたい。

さらにハットには不思議な効用もある。なにか気分がシャンとする。確かにフェルト中折れ帽(ハット)を目深にかぶり、なんとなくグニヤリとしているわけにもいかない。フェルト帽にはそういう雰囲気がある。かねてそう思っていたが、最近改めて感じた一件がある。ある冬の日、地下鉄の電車の中でフェルト中折れ帽子をかぶり、勿論、長めのオーバーコートを身につけ、入口のそばに立っていたことがある。そのとき、となりの座席にいた女性から、どうぞと席をゆづられたのである。これには一瞬とまどった。勿論、ありがたく礼を言って座ったが、内心複雑なものがあつた。そしてその時、なぜ複雑な気持ちになるか自省してみた。過去にも席を譲られた経験は何度かある。そのときは別に一一と思ひ起こして気がついた。要するに、ハットをかぶり、自分としてはまさに隆として立っているつもりだったのだ一一そこで席を譲られると言うこの心理的な段差、と言う風に考えてなにか納得した。逆にいえば、つまり、フェルトの中折れ帽子をかぶって背中を丸めているわけにはいかないのだ。ハットをかぶると背筋が伸びる。

ところで逆に困ることもある。それはハットを脱ぐべきか脱がざるべきかと言う悩みである。ものの本などによると、男性は屋内で女性と同席するときは帽子をかぶらない(かぶっているときは脱いで手にもつ)のがマナーだそうである。これが如実に表れるときは、エレベーターに乗った時である。エレベーター内で女性がいるときは男子は帽子を脱がなくてはならない。であるから、仮に乗っていないくても、途中の階から女性が入ってきたときは改めて帽子を脱ぐ必要がある、と言う風に気を付けている必要がある。実際、少し古い映画などを見ると女性がエレベーターに乗ってくるとおもむろに男性がハットを脱ぐ場面なども見られる。これはマナーなのだから仕方がない。ついでながら女性の帽子については、このようなルールは全く当てはまらない。女性の帽子は女性の髪の飾りであり、装飾品である。女性は身に装飾品をつけ美しく見せることは女性の当然の権利ともうべきものであるから、いかなる場合でも帽子を脱ぐ必要はない(逆に脱ぐと髪が乱れるからという説明もある)。これは王様、女王、親、目上の人の前、教会の中さらには食事の最中でも同じである。以前、イギリスのウィリアム王子・キャサリン妃の結婚式が行われ、その模様はかなり日本でも詳しく報道された。そのなかで、一つ印象的だったのは婦人方の帽子である。女性の正装に帽子は不可欠らしく、ありとあらゆるスタイルの帽子を堪能した。これに対比すれば、男の帽子は「かぶり物」と定義づけられるので、昔、貴人の前では「かぶり物をとれ」と言われたように、帽子は取らなければならない時がある。ということであるが、問題は中間形態のときである。たとえば、ホテルのロビーは？これは原則脱がなくてもよいと思うが、仮に知人を認めて近づいていくような時は脱ぐ必要がある。とすると、ホテルのホール(通路)では？部屋の中は脱ぐとして多少広い会議室みたいなところは？などなど、何ともうろろする時がある。とすると、地下鉄はどうだろうか？ホームにいる時はかぶっているとして、やはり列車に乗ったら脱ぐべきか。いわんや列車の中に女性がいることを認めたら？これはやはり脱いで手に持つべきと思う。もっとも、このような紳士用ハットのルールは、最近では本場イギリス・アメリカでもだんだんルーズになってきているとも聞く。最近では女性の服装のいわゆる男性化が進んでおり、そもそも公共の場での一目了然の違ひもわからなくなっているという事情があり戸惑いをまねく。といった具合でハットをぬいだりかぶったり色々気を使う。

と思いながら、テレビを見ているとどうしても気になる場面がある。座っている男性が女性の前で帽子をかぶりながら対談している場面である。勿論、なにかコメディアンが一種のトレードマーク的にかぶっている場合は別かもしれない。が、たしかザ・プロファイラーという番組では、若い男性が見事なハットをかぶったまま司会をしている。のみならず、座ったまま女性と対談を進めている。これは何とも落ち着かない。ハットをかぶった男性が座ったまま女性と対話している一一どうしても、これはあり得ない図としか思えない。この番組の編集責任者は、以上のようなことは勿論十分承知の上とは思いますが、例えば、夕刻のニュース番組で男性アナウンサーが座ったまま帽子をかぶって表れたらどんな感じがするか。このような番組の出演者には、当然服飾アドバイザーなどの専門家がついていると思うが、室内で男性が帽子をかぶって女性と対談するということの異様さをどのように考えるか。

中折れをハットをかぶることの効用ととまどい、一一以上のとおりであるが、以前日経のコラム欄を見ていたら年末の感想記事のなかで次の句が引用されていた。

冬帽を目深にかぶる年の暮れ

あわただしいと同時になにか思いにくる年末の(多分サラリーマンの)気分が出ていると思うが、この帽子は中折れハッ

トでなくてはならない。これがキャップ(野球帽)や鳥打帽ではまったく句にならない。すこし思いに沈みながらハットの陰から世の中を見ている、と言うことでなくてはこの句の味わいがなくなる。

カテゴリ: 表分類 [パニマリシク](#)

**Gallery Aki Blog**  
*Proudly powered by WordPress.*

## Gallery Aki Blog

ギャラリー安樹のブログへようこそ！

## 議論或いはディスカッション

投稿日: 2013年1月23日 作成者: admin

事務所の近くに蕎麦屋があり、ときどきお屋に利用する。ある日、久しぶりに入ってみたら、畳の方の部屋に案内された。靴を脱いで座布団の上に座る。普段あまりこのような事はないので何気なく見回したら、椅子のほうの大きなテーブルには、10人ほどの一組がすでに座っている。このせいか、と思いながら何気なく見ていたが、これは明らかに近くのサラリーマンの団である。一番奥の端の席に多少年配の人がいる。この人がいわゆる部長級か。ここから居流れるようにして対面であって、部長級の人やしきりとなにか、冗談交じりでしゃべっている。その隣人は次長クラスらしい。ときどき部長の話を、あいの手か、茶々を入れる。と、皆がそろって笑う。もっぱらしゃべるのは部長級と思われる人物一人である。そのうち一番若い感じの、つまり一番下と思われる人(丁度、部長級の斜め前になる)になにか質問があったらしく、若い人はなにか改まった感じでしゃべっている。これは典型的なサラリーマンのお屋の風景だなと思って(懐かしい感じもしつつ)見ていたら、やがて部長を先頭に皆並んで行儀よく出て行った。

少し前になるが文化勲章を受章した小宮教授が、自分のアメリカ留学時代を振り返って次のような思い出話を書いている。――驚いたのは午後のお茶の時間となると、先生も生徒もぞろぞろと広間に出てきて、雑談をする。このとき、生徒も先生もなく全く自由に議論をする。――さらに驚いたのは、或る時、高名な先生の送別会のようなものがあり、同僚の若手の先生が贈る言葉を述べたが、何とその時、我が師にして最良の友である云々――と述べたのだ。そして小宮教授は感慨深く続けている、――自分の師を又最良の友と呼ぶとは！(少し前になるが、これは氏の「私の履歴書」に出てくる)。

筆者は外務省への出向という形で、総領事館・大使館に勤務したことがある。このように、本来外交官試験をパスしていない者が外交官となるためには、ほぼ1年にわたる外務研修を経なければならない。当然英語の講義が中心になるが、その時の指導教官は、スコットランド人であった。これは、名前にMc(マック)がついていることから分かるそうである。授業の科目に研修生(数人)による自由討議(勿論、英語)があった。ある日(多分冬の日)、当のマック先生が、少し遅れ気味であたふたと教室に入ってきて、本日の自由討議のテーマは、「男は寒い日に小用に立つと、身体がぶるっと震えるのはなぜか」これを議論せよ(多分先生はトイレを済ませてあわてて駆け込んできたのだろう)。我々生徒(全員男性)は、??と思いつつも、勿論いろいろと考えられることを(英語で)申し述べた。実はこれには伏線がある。と言うのは、この前回の自由討議で株式投資がテーマとなった。しかし、バブル前の昔は個人投資家は、そもそも少なく、(デイトレーダー等と言われる投資家がいるような今はかなり違う)筆者も全く株式投資には縁がなかったので、勿論、英語での表現の困難さと言うこともあり、議論の中でつい「株式投資には関心がない。」と言ってしまった。これがいけなかったらしく、先生の激しい反発を招いた。およそ、ジェントルマン(つまり教養人)たるものは、いかなることにも、関心がない、という言葉は決して許されない。その言葉は辞書にはない――と言うわけである。今回のこの奇妙な出題はまさに、このような姿勢を試そうとしたのだ。と言う次第でこのマック先生には、ジェントルマン(教養人)の議論に対する姿勢をずいぶん教えられた。まずは、どんな議論にも知的な関心を示す。議論では決して一人風を吹かさない(自論をまくしたてないこと)。したがって、むしろ自分の専門分野については(求められない限り)語らない。議論は(テニスのラリーのようなイメージではなく)、サッカーボールを相互に蹴るようにやり取りし(誰もボールを独占してはならない)、そして、ゴール(もしそれがあんならばであるが)にすこしずつ近づく。

要するに何を言いたいのか。上記蕎麦屋の風景のように、日本には伝統的な姿があり、これは麗しく、また実際、高度成長の過程で成果もあげてきた。しかし、そうもいえない世界が広がってきている。最近、マイケル・サンデル教授の「白熱教室」が話題となり、NHKでもその講義の様子がたびたび報道された。これに刺激されてか、最近ではサンデル先生ではない「白熱教室」も始まったらしく、先般は、日本のある私立大学商学部の先生の「白熱教室」があり、興味深く拝見した。この「サンデル現象」ともいべき最近の世論の動きは実に興味深い。サンデルの本をいくつか読んでみるとわかるが、その講義には一つの大きな特徴がある。それは、必ずと言っていいほど答えのない問題を扱う、ということだ(だから白熱する)。あなたが、もし暴走列車の運転手だったら。このまま暴走すれば100人以上の乗客は死に追いやられる。しかし、



線路には右に緩い上り坂があり、ここに入れば列車は安全にとまる。しかし、このサイドラインでは、いま5人の工夫が何も知らないで働いている。さて、あなたはどうか。そして、この「白熱教室」は必ずと言っていいほど「今日はいい議論をした」で終わっている。この「サンデル現象」は改めて考えてみる価値がある。答えのない問題はあるのだ、それでも議論し、議論することに価値がある—と言うことに日本人全体がふと気がついた、と言うように考えるとこの「サンデル現象」も納得がいく。

勿論、議論をしても結論がないというのはいかにも苦しいし、第一無駄なような気がする。筆者の長崎にいる友人は、ときどき上京して来て嘆く。何故もっときちんと議論してコンセンサスづくりができないのか。しかし、今の日本が抱える問題は簡単に結論は出ない。今や、総理の号砲一発、一斉に走り出すと言うわけにもいかない。この結論のない議論、と言うものの苦しさに耐えることのできる知的な強さが必要だ。

カテゴリ: [未分類](#) [バーマリンク](#)

Gallery Aki Blog

Proudly powered by [WordPress](#).

## Gallery Aki Blog

ギャラリー安樹のブログへようこそ！

## クローズアップ現代

投稿日: 2013年2月4日 作成者: admin

NHKの夕刻番組クローズアップ現代を知らない人はいないだろう。筆者も毎日この番組をチェックすることを習慣としている。それにしても、この担当の国谷アナウンサーには驚く。これだけ広範な現代の様々な、かつ複雑な問題を一人で取り上げこなしていく能力には感服せざるを得ない。聞くとところによると、この番組は、実はあらかじめシナリオが決められ(書かれ)ており、出演者はアナウンサーも含めてこのシナリオに沿ってやり取りしているだけだそうであるが、それにしても、国谷アナウンサーの対応は実にこなれている。なにか書いてあるものを読んでいる、あるいは、記憶しているものをなぞっていると言うような「雰囲気」を出さない。つまり、シナリオがあるのかどうかは別にして、すくなくとも自分の言葉でしゃべっているという感じを与えるところに感心する(これに対して、その相手となる方はしばしば書かれたシナリオを前にして何か汗を拭き必死で読み上げているという感じの人もいて、悠揚迫らぬ国谷アナウンサーとの対比が面白い)。

このあたりのことを考えながら良く見ると、要するに国谷アナウンサーの対応の「間合い」が良いことに気づく。少し話が横にそれるが、人と話をしている、こちらが話し終わるや否やすぐに相手が話し始めると言うことにはどうしても違和感がある。こちらが(或いは相手が)しゃべり終わったあと一瞬の間合いが必要だ。その間に、相手が話した言葉つまりアイデアが脳の中を素早く巡る。そして過去の自分の経験や考え方等と照らし合わせて、次に話そうという内容が形成されていくというプロセス—この間合いが、相手の言葉を考えているという姿勢を感じさせる。国谷アナウンサーがこの「間合い」ということは、自分で考えているという印象をあたえる。だから驚く。これだけ多数のかつ複雑な話題について、毎日「考えている」という印象を与えることは並大抵ではない。

と言うことではあるが、実は、クローズアップ現代には不満もある。「今日は0000に大変お詳しい0000さんをお招きしています。」これである。つまり、この番組が基本的に一人の専門家とのやり取りとなっているところが何とも歯がゆい。0000に詳しい方は、しきりと意見を述べる。中には、上に書いたように目の前のシナリオを読むのに必死でまったく自分の言葉でしゃべっていないと言う印象を与える人もいるし、身振り手振りで(シナリオに沿っているのかどうかは分からないが)いかにも自分の言葉をしゃべっていると言う姿勢の人もいる。勿論、後者の方が望ましいが、ここでの問題はこのような事ではない。問題はこの「0000に詳しい方」が(ほとんどの番組について)一人である(補助員と言う感じの記者が出ることは別にして)と言うこと、つまり、このお詳しい方の意見は勿論尊重するが、聞いていて、これに反対の人もいるだろうと思うし、つまり、違った意見も聞きみたいということである。言い換えれば、そこには何かしら「討論・議論」がない。これが不満の所以である。お詳しい方とは違った意見もあるはずで、なぜこれが俎上に乗せられないのか。

筆者のように古い年代の人は必ず記憶していると思うが、昔、NHKには「ニュース解説」と言う番組があった。NHKの「ニュース解説委員」と言う人が出てくる。そして、その日のおもなニュースのポイント、そのバックグラウンド、政府などの動きや対応、将来にわたるような問題点などを懇切丁寧に説明してくれる。きつと覚えておられる人も多いと思う。これは夜の10時からのわずか15分間である。筆者も仕事から帰ってやや遅めの夕食を食べた後、この番組には本当に便利をした。わずか15分間でその日の出来事の要点—問題点、考え方、今後の課題—を実に要領よく説明してくれる。毎日、これを聞いて何となく安心して眠る。そんな番組があったのだ。しばらく海外にいたので、いつ頃、この番組がなくなったのか記憶がないが、NHKの解説委員と言うのは今でもあるらしく、クローズアップ現代でも時に出てくるのでオヤと思うことがある。確かに、このかつての「ニュース解説」に比べると、現在のクローズアップ現代は一步進んだ番組と言える。なにしろ専門家ができて国谷アナウンサーが、多分視聴者に代わって質問をするという構成、つまり少なくとも「対話形式」だから、聞いている方でも、こんなことを聞いてみたら、とか、問いに対する答えになっているのだろうか、などと頭を働かざるを得なくなる。これは明らかに一步前進である。

しかし、どうしても、「たいへんお詳しい方」が一人であるという問題はのこる。

つまり、お詳しい方は大変結構なのであるが、なぜ、ここで、これにむしろ批判的な人を出さないのか。つまり、対談の相手が何故複数ではないのかという点である。専門家の意見は尊重するが、同時に、やはりこれに反論する人の意見も聞

いてみたい。以前、非常に珍しい例であるが、ある経済評論家とおぼしき人とある経済研究所の主任研究員とかいう人が、二人で番組に現れた時があり、これは面白そうだと聞いていたら、残念ながら二人の専門家は互いにしきりと肯定しあい、寝めあっている。これでは全く討論にならない。もう一つあるいは二つの違った意見を聞きたい。

ところで、そういえば、リーマン・ショック後、NHKで複数の登場者が出て、アナウンサーが司会するという番組があり、関心を持って聞いたことがある。ところが、どういうわけか、この時の日本側参加者は、一人はコピーライター、一人は為替のデイトレーダーをしているとかいう女性、さらに一人は漫画家であった。この番組では外国からも参加者を出すという趣旨で、テレビの画面の上に窓が開いて参加者が意見を述べることができる(同時通訳つき)という仕掛けになっており、これは面白と思って聞いていたが、この窓口に出てくる専門家は、一人はウォールストリートで働く敏腕トレーダー、一人はマサチューセッツ工科大学のファイナンス主任教授、もう一人は確かドイツで財務大臣も務めたことのある専門家ということで、日本側の参加者とあまりにも違う。おそらくNHKとしては、いわゆる庶民の声も反映させたいという狙いだったと思うが、これでは残念ながら討論になりにくいというもどかしさがある。

ところで、リーマンショック後、海外メディアを通じる報道もかなりあり注目して見ていたが、大体において、これらは「ラウンド・テーブル」である。もともとは「丸いテーブル」と言う意味であるが、要するに数人のいわゆる専門家が丸く並んで、つまり平等な立場で議論する。議長のようなアナウンサーもいるがこれが主役になると言うことはない。そして、大体、参加者は、ファイナンス関係ジャーナルの編集長、あるいは専門記者、併せて大学教授、専門のライターなどである。これらが、まったく平等に一斉にガヤガヤやる。聞いているこちらは、ややこしくて多少迷惑な感じも受けるが、このラウンド・テーブルという仕組みが実におもしろく、いろいろな違った見方を紹介するというコンセプトでできているらしい。見ているこちらには、話をよく聞いて、その違いを理解し、あわせて自分でも考えなければならぬという負担が来るが、これはやむを得ないと同時に刺激的である。

要するにラウンド・テーブルのような意見が聞きたい。0000にお詳しい専門家と言われるような人たちの間の相互のやり取りが聞きたい。とすれば、「クローズアップ現代」もその仕組みあるいはそのコンセプトが変わらざるを得ないだろう。勿論、有能な国谷アナウンサーの役割も全く変わってくる。確かに、昔のあの一日の出来事を、静かに懇切に説明してくれた「NHKニュース解説」は懐かしい。なんとなく安心し納得して一日を終れた。しかし、今や、違った意見を聞いて自分で考える以外にない。とすれば「クローズアップ現代」の仕組みも考え方も国谷アナウンサーの役割も違って来るはずだ。

カテゴリー: 未分類 [パーマリンク](#)

Gallery Aki Blog

Proudly powered by [WordPress](#).